宮沢賢治「文語詩未定稿」評釈四

信時　哲郎

56　〔青びかる天弧のはてに〕

青びかる天弧のはてに
きらゝかに町はうかびて
六月のたつきのみちは
いまやはた尽きはてにけり

いさゝかの書籍とセロを
思ふまゝ〔以下なし〕

大意

青く光った天球の果てに
きらきらと町が浮かび
六月の生計の道は
今はもう尽きてしまった

いくばくかの書籍とチェロを
思うままに

モチーフ

羅須地人協会時代の現金収入が乏しい頃の詩篇に発する文語詩。断片なので全体像は摑みにくいが「一百篇」の「〔二山の瓜を運びて〕」と共通する詩句があることから、イメージにも共有される部分があったものと考えられる。

語注

天弧　ドーム状に見える空のこと。賢治はこの他にも穹窿、蒼穹、天球なども使った。

たつきのみち　「たつき」とは方便、活計で、生活のための手段、つまりは金銭のこと。先行作品である「一〇七八〔金策も尽きはてたいまごろ〕」には「六月の金策」とある。

評釈

黄罫（24 24行）詩稿用紙に書かれた先行詩篇である「一〇七七　金策　一九二七、六、三〇、」（「春と修羅　第三集」）の下書稿㈢と同一紙面に書かれた下書稿が一種現

存。『新校本全集』には「文語詩に改作しようと試みて未完に終った断片作品である」とある。

まずは先行作品の元となった「詩ノート」から見ていきたい。『新校本全集』にも書かれているとおり、「一〇七七〔その青じろいそらのしたを〕六、三〇、」と「一〇七八〔金策も尽きはてたいまごろ〕六、三〇、」が重なり合って口語詩「一〇七七 金策」に発展している。

「一〇七七〔その青じろいそらのしたを〕」は次のとおり。

その青じろいそらのしたを
金のあるやつらはみんなそなへが厳しいし
どこに工面に行かうにもみちがない
……ぬるんだ風ともひとつなにか音の渦巻……
このえん樹の木だ
甘いかほりといっぱいの蜂
そのコロイダーレな影のなかを
月光いろの花がしづかに降る
遠くでは規則正しく鼻を鳴らす馬

続いて「一〇七八〔金策も尽きはてたいまごろ〕」を示す。

金策も尽きはてたいまごろ
まばゆい巻層雲に
銀いろに立ち消えて行くまちのけむり

『新校本全集』の年譜で羅須地人協会時代の昭和二年六月三十日を見てみると、関登久也の記述から、農学校時代の教え子・大内金助の父で花巻納豆の創始者である大内栄助に何度か借金を重ねた、と書かれている。

関（「借金……大内金助氏から聞いた話」『宮沢賢治物語』平成七年十二月 学習研究社）の記述によれば、賢治が大内家に金を借りに行くと「幾らでもお持ち下さい」と言われ、実家を頼ることはなかったのだという。自立しようという意志が固かったためのようで、賢治は「私は自分の出来ると思うことだけはやりたいと思います。それで御迷惑ではありましょうが、しばらくの間御援助をお願いします」と言っていたという。しかし、自分が返せない時のことも考えてか、弟の清六には連絡していたようで、「どういう風な繰り廻しをしたものか、あまり時日をおかないで、常に清算されていました」らしい。関は「協会の経営は大して費用がかかるはずもなかったのですが、病弱な友

人や生計に困る知己、あるいは農村の人たちへの様々な応援、そんなことに要する金は相当の額に上るのでした」と書いているが、おそらくそうした事情から借金を重ねることがあったのだろう。

「詩ノート」に書かれた二つの詩篇を統合した口語詩「一〇七七　金策」の下書稿㈢の初期形態をあげる。

青びかりする天弧のはてに
うつくしく町はうかんで
この六月の金策は
もうきっぱりと尽きてしまった
いっそ楽器やすこしの本や
勝手にしろと白堊で書いて
おれは遠くの義理のいらないところへ行かう
甘く熟してぬるんだ風と
なにか小さなモーターの音
この花さいた(約三字空白)の樹だ
梢いっぱい蜂がとび
その膠質な影のなかを
月光いろの花瓣がふり
向ふでは町がやっぱり
ひかってそらにうかんでゐる

文語詩は冒頭の五行を忠実に文語化したようだが、その後を続けることはなかったようである。

口語詩の手入れ段階では、三行目から七行目を削除し、自嘲的な言葉が書き込まれ、それはやがて十八や十九の「こども」でさえもが貪欲だ、と町の批判に移っていく。

青びかりする天弧のはてに
うつくしく町がうかんでゐる
かあいさうな町よ
金持とおもはれ
一文もなく
一文の収入もない
そしてうらまれる
辞職でござる
そこで世間といふものは
中間といふものをゆるさない
なにもかもみんないけない
悪口、反感、
十八や十九でおとなよりも貪慾なこども
なにもかもみんないけない
おれは今日はもう遊ばう

何もかも
みんな忘れてしまって
ひなたのなかのこどもにならう
甘く熟してぬるんだ風と
なにか小さなモーターの音
この花さいた(約三字空白)の樹だ
梢いっぱい蜂がとび
その膠質な影のなかを
月光いろの花瓣がふり
向ふでは町がやっぱり
ひかってそらにうかんでゐる

「辞職」とあるのは、花巻農学校を辞めたことを指すのであろう。『新校本全集』や関登久也の言葉を参考にすれば、金策のために大内の父から「貴方はそれ程までに苦労なさらなくともいいのではないでしょうか」（関「借金……大内金助氏から聞いた話」前掲）といった言葉をかけられ、自分が「財ばつ」（昭和七年六月十九日の母木光宛書簡に、自分の家を自虐的にそう書いた）ででもあるかのように扱われることに腹を立てたのではないかと思う。「十八や十九でおとなよりも貪慾なこども」にまでも蔑まれたというのだが、教え子だった大内金助が大正十二年三月に稗貫農学校を卒業し、この頃はちょうど十八か十九であったことから、彼のことを言ったのではないかと思われる。教え子や困った人に金を渡したり、贈り物をするのは慣れていても、金を借りることに慣れていなかった賢治には、人に憐れんでもらうことが屈辱的だったのかもしれない。

しかし、文語化はそこで止まり、紙面には断片として「蒼びかりする天弧のはてに／きらゝかに町はうかんで」、また、「膠質」「天弧」「蒼びかり」「青」といった金策のことよりも、町の風景に関する句が書き付けられている。生々しい金策の思いを詩には残せない思いが擡げてきたのかもしれない。しかし、これらの詩句が「一百篇」の「〔二山の瓜を運びて〕」に生かされていることを思えば、金策についての経験を生かして書くことよりも、その時に見た景色の方を詩に取り込みたいと思うようになったようだ。

①二山の瓜を運びて、　舟いだす酒のみの祖父（ぢゞ）。
②たなばたの色紙購ふと、　追ひすがる赤髪（けゞ）のうなゐ。
③ま青なる天弧の下を、　きららかに町はめぐりつ。

④ここにして集へる川の、　はてしなみ萌ゆるうたかた。

『一百篇評釈』にも書いたように、この詩は「一〇四八〔レアカーを引きナイフをもって〕　一九二七、四、二六、」や「一〇二二　〔一昨年四月来たときは〕　一九二七、四、一、」などとの関連も深く、本作の次に収められている「〔いざ渡せかし　おいぼれめ〕」とも関連が深い。細かな影響関係や推移はたどりにくいが、今は金策を描こうとした詩句が、いつしか内容的に関連性が見出しにくい文語詩定稿に生かされたということのみ確認しておきたい。

先行研究

なし

57　「いざ渡せかし　おいぼれめ」

「いざ渡せかし　おいぼれめ
いつもこゝにて日を暮らす」
すぱとたばこを吸ひやめて
何を云ふともこの飯の
煮たたぬうちに　立つべしや
芋の子頭白髪して
おきなは褌を加へたり

大意

「早く舟を出せ　おいぼれめ！
いつもここで日を送りやがって」
サッとタバコを吸うのをやめて言う
何を言われてもこの食事が
煮えないうちに　立つことがあろうか
里芋の子芋のような白髪頭をして
老人は褌をくべる

モチーフ

関連する作品が多く、賢治が何に着目し、どういったテーマで展開しようとしたのか、未定稿であることからも窺いにくい。先行作品にあった船頭の老人の体調に関する記述も文語詩になって一切失われてしまっているのが気になるが、第三者の内面に必要以上に立ち入ることを戒め、あく

まで即物的、客観的に文語詩を作ろうとしたためなのかもしれない。

語注

いざ渡せかし　佐藤勝治（後掲）によれば舞台となっているのは「昔北上川にあった通称「島の渡し場」公称「長根の渡船場」である」とのこと。「この「島の渡し場」は、川巾一〇〇メートル程のところに、両岸から太いワイヤーロープを渡し、それに滑車で船をつないでいた。船頭は向う岸（矢沢村島）の船頭小屋に居た。こちらの岸から「おおい。おおい。」と大声で呼ぶと、小屋から老船頭がのっそりと出て、船を出してくる。ふだんはまるで人通りが無いので一回の乗客はせいぜい二、三人、たいてい一人であった。渡し賃は無料であった。村役場か部落で手当を出していたものであろう。客が少いので船頭はたいてい畠作りをやっていた。船頭小屋は崖の上（じつは河岸段丘）にあって、そこからの見晴らしはすばらしかった。恰度羅須地人協会のある桜部落の右方（北方）に、花巻の町が南北に長くつらなり、その遥か向うに東根山や岩手山が美しく眺められた」という。ただ、後述するような複雑な推敲過程を経て文語化されたことを思えば、さまざまな場所の記憶やイメージが混ざり、また虚構化されている可能性についても考えておくべきかと思う。

芋の子頭　『新校本全集』の索引では本作から「芋の子」が採られ、先行作品「〔爺さんの眼はすかんぼのやうに赤く〕」からは「芋の子頭」が採られている。七五調で詩句が書かれていることから「いものこあたま・しらがして」と読むことが想定されているのだろう。先行する口語詩には「白髪はぢょきぢょき鋏でつんだ／いはゆるこゝらの芋の子頭」や「白髪の芋の子頭を下げて」とあるが、『定本語彙辞典』では「さといもみたいに虎刈にした頭。芋の子は親芋に対して子芋の意にも使うが、ここでは里芋の異称」としている。毛藤謹治『北東北のたとえ』（岩手日報社　平成六年二月）によれば、「芋の子剥いたよう」について「サトイモを湯がいて皮をむくと真っ白でつやつやしく、つるつるしている。太って元気な幼児をほめるときなどにも用いる」とある。「幼児をほめるとき」に違和感はあるが、白さとつるんとした感じに注目すれば、こちらの意味で使っていたように思われる。

べしや　助動詞「べし」の終止形に係助詞「や」が付いたもので、『日本国語大辞典』によれば「「べし（可）」

のさまざまの意を、疑問または反語の形で表わす。「…適当だろうか」「…はずだろうか」など」とある。

評釈

『新校本全集5』に収められている黄罫（24 24行）詩稿用紙に書かれた口語詩「〔爺さんの眼はすかんぼのやうに赤く〕」を文語化したまま中断した下書稿一種が現存。校異については『新校本全集』で次のように説明されている。

本稿は、口語詩「〔爺さんの眼はすかんぼのやうに赤く〕」（第五巻所収）の書かれている黄罫（24 24行）詩稿用紙一枚に鉛筆で書かれたもの。この用紙には、表裏つづけて右の口語詩があり、その文語詩化をはかった作品である。下部余白に記された口語詩追加挿入の一行を取り込んだ枠で囲み、そこへ文語詩化のためと思われるメモを記して丸番号①をつけ、上欄外に文語詩二連分を記して丸番号②と③をつけ、口語詩中の六行を枠で囲んで、丸番号④をつけてある。第二連・第三連の文語詩を作り、第一連・第四連を構想しながら未完のまま終っている。

そして①から④までの過程が記されているが、（ ）内の表記も含めて『新校本全集』を引用する。

①（この枠内には、口語詩の詩句「鍋の下ではとろとろ赤く火が燃える」があり、それを避けて、文語詩を書いた太い鉛筆で次のメモが記してある）

渡し小屋、
ガラス窓、けむり、
二人

②「いざ渡せかし　おいぼれめ
［脚夫は→㊀］
いつもこゝにて日を暮らす」
すぱとたばこを吸ひやめて

③「［誰→㊀］何を云ふともこの飯の
煮たたぬうちに　立つべしや」
芋の子頭白髪して
おきなは褶を加へたり

④（この枠内には、次の口語詩詩句が囲い込まれているが、文語詩化の手入れは施されていない）
おもてでは植えたばかりの茄子苗や

芽をだしかけた胡瓜の畑に
陽がしんしんと降ってゐて
下の川では　川上のまだまっ白な岩手山へ　南の風が
　まっかうに吹き
はりがねもピチピチ鳴れば
せきれいももちろちろ鳴いてゐるやうだけれども

先行作品である「〔爺さんの眼はすかんぼのやうに赤く〕」は次のようなものだ。

爺さんの眼はすかんぼのやうに赤く
何かぶりぶり怒ってゐる
白髪はぢょきぢょき鋏でつんだ
いはゆるこゝらの芋の子頭
　……そんならビタミンのX
　　あるひはムチンのY号で
　　この赤い眼が療らないか
　　それは必ず治ってしまふ……
鍋の下ではとろとろ赤く火が燃える
おもてでは植えたばかりの茄子苗や
芽をだしかけた胡瓜の畑に
陽がしんしんと降ってゐて
下の川では
川上のまだまっ白な岩手山へ
南の風がまっかうに吹き
はりがねもピチピチ鳴れば
せきれいもちろちろ鳴いてゐるやうだけれども
条件の悪いことならば
いまよりもっと烈しいときがいくらもあった
この数月はたしかにどこかからだが悪い
　……そんならビタミンのX
　　あるひは乳酸石灰が
　　この数月の傾向を
　　療治するかと云ふのに
　　こっちはそれを呑みたくない……
飯はぶうぶう湯気をふき
白髪の芋の子頭を下げて
ぢいさんは木を引いてゐる

なお、手入れ段階で次の内容が書かれている。文語詩との関係が見えにくいが、すぐに削除されているので『新校本全集』の本文には採用されていない。

先客の郵便〔屋〕さんも

わらじをはいた素足をそろへ
小さなきせるで
スパスパたばこを呑んでる

語注にも書いたように北上川には渡し舟があったようだが、賢治と思われる視点人物が、舟が出るのを待とうとしているのに船頭の老人は、自分の食事ができるまでは舟を出すまいと頑張っていたようで、先客の郵便脚夫も手持無沙汰でタバコを吸っているという状況だったのだろう。

そうなると「一百篇」の「〔二山の瓜を運びて〕」が思い出されよう。

①二山の瓜を運びて、　　舟いだす酒のみの祖父(ちゞ)。
②たなばたの色紙購ふと、追ひすがる赤髪(け)のうなゐ。
③ま青なる天弧の下を、　きらゝかに町はめぐりつ。
④ここにして集へる川の、はてしなみ萌ゆるうたかた。

この第三連は、「未定稿」で本作の直前に収録されている「〔青びかる天弧のはてに〕」における「青びかる天弧のはてに／きらゝかに町はうかびて」が用いられていることがわかる。

『一百篇評釈』にも書いたように、「〔二山の瓜を運びて〕」の下書稿㈠には「梵のわらひは遠く／濃緑の水はながるゝ」という詩句があるが、この不思議な詩句に似た表現が「春と修羅 第三集」の「一〇四八 〔レアカーを引きナイフをもって〕 一九二七、四、二六、」に「針を泛べる川からは／温い梵(アニマ)の呼吸が襲ふ」として登場する。また、「詩ノート」の「一〇五二 ドラビダ風 一九二七、五、一、」にも、「梵の教衆の哂ひは遠く」とある。これらの作品について、村上英一（「文語詩〔二山の瓜を運びて〕を読む」「賢治研究110」宮沢賢治研究会 平成二十二年六月）は、風が共通して登場するとし、島田隆輔（「15〔二山の瓜を運びて〕」「宮沢賢治研究 文語詩稿一百篇・訳注Ⅰ」〔未刊行〕 平成二十九年一月）は水の流れが共通するとする。これらの作品には共通する体験があり、また共通するイメージがあったのだろう。

また「〔二山の瓜を運びて〕」における「舟いだす酒のみの祖父(ちゞ)」というのは、『新校本全集5』所収の「〔おぢいさんの顔は〕」における「おぢいさんの顔は／酒を呑む前のときのやうである」に関連するものと思われるが、この口語詩は先に「梵の教衆の哂ひは遠く」の詩句を含むも

のとしてあげた「一〇五二 ドラビダ風」と同じく「詩ノート」の「一〇二二〔根を截り〕 一九二七、四、一、」が合体した「一〇二二〔一昨年四月来たときは〕一九二七、四、一、」の発展形である。こうなると原体験が何か、そこから何がどう付け加わったのかを分析するのは難しい。

ところで、気になるのは先行作品にあった老人の眼や体調に関する記述が、文語詩には残っていないことである。もちろん『新校本全集』に掲載された本文は断片なので仕方がないにしても、文語詩作成の際のメモであったと思われる①から④までを見ても痕跡が残っていない。

口語詩では、まず老人のすかんぼ（スイバ）のように赤い眼について、「そんならビタミンのX／あるひはムチンのY号で／この赤い眼が療らないか／それは必ず治ってしまふ」と書き、また後半には「この数月はたしかにどこかからだが悪い」と老人の体調について書き、それに対して「そんならビタミンのX／あるひは乳酸石灰が／この数月の傾向を／療治するかと云ふのに／こっちはそれを呑みたくない」とある。さして長いわけでもない詩にしては、かなりの文字数や行数を老人の眼や体調の記述に費やしている。

小沢俊郎（「「疾中」と〈文語詩〉」『小沢俊郎宮沢賢治論集3 文語詩研究・地理研究』有精堂 昭和六十二年六月）は「五十篇」の「〔いたつきてゆめみなやみし〕」の下書稿と定稿を読み比べ、下書稿では祖国を後にして日本で太鼓をたたきながら歩く飴売りに自分の心情や鼓者への思い入れを描いていたのに、推敲を重ねるうちにこれを削除してしまっていることを指摘し、「心情の表出という個人感情への溺れを拒否し、説明という散文的要素を捨てた。説明抜きの即物的叙事的客観的表現の中に、自らの体験し経験した世界像を描くのが詩であって、「私」を他へ訴えるのが詩ではない、というのが定稿の詩観と思われる」と書いた。

それに倣えば、賢治は渡し舟の船頭のつつましい暮らし、充血した目や悪そうな体調を慮るといったことを「個人感情」として削除し、「即物的叙事的客観的表現」のみで老人の様子を描こうとした、ということなのかもしれない。

しかし、残された①から④をうまく文語化したところで、老人の様子や病態などが伝わるかと言えば、難しいと言わざるを得ない。賢治が病気を描くことを忌避したようにも思えるが、「〔〔打身の床をいできたり〕〕」、「〔毘沙門の堂は古びて〕」（ともに「五十篇」）、「病技師」、「涅槃堂」（ともに「一百篇」）などでは、体調の悪い人物を描くこともあったことから、必ずしもそういうことでもなさそうだ。

沢田由紀子（「風景と存在　〈川〉という場所」『イーハトーブ風景学　宮沢賢治の〈場所〉』七月社　令和四年八月）は、「〈川〉とその流域は、生き物の生と死に深く結びついたものとして認識されていた」とするが、本作でも、どこか生と死のイメージが漂っているようにも感じられる。

ともあれ、賢治はこの時のモチーフは「〔二山の瓜を運びて〕」などに譲り、下書稿の紙面は早々に毛筆の稽古に使われることになってしまったようだ。

先行研究

佐藤勝治「狡猾ともいうべき『取り消し』や『訂正』　文語詩「二山の瓜を運びて」について」（『宮沢賢治　青春の秘唱〝冬のスケッチ〟研究』十字屋書店　昭和五十九年四月）

58　盛岡中学校

木柵に注ぐさ霧と
幹彫(ゑ)れる桐のいくもと

白堊城秋のガラスは
ひらごとにうつろなりけり

一鐘のラッパが鳴りて
急ぎ行く港先生

気乗りせぬフットボールを
村久のさびしく立てる

大意

木柵に細かい霧がかかり
生徒たちの残した文字が刻まれた桐が幾本か立っている

白堊城と呼ばれた学舎のガラス窓は
一枚一枚が黒く穴が開いたように見える

一時間目を知らせるラッパがなると
港先生が急いで走り出す

やる気の出ないフットボールで
村久は寂しげに立っているだけであった

モチーフ

盛岡中学校時代、賢治が命名したともされる「桐下倶楽部」について書いた詩。実在の人物である「港先生」「村久」を配して現実的だが、賢治の村久への思い入れが背景にあったように感じられる。交友関係が長く続いていたようにも思えることから、賢治とのつながりについて、今後は掘り下げていくべきかもしれない。

語注

幹彫(あ)れる桐のいくもと　『新校本全集』の年譜によると、桐下倶楽部と称された賢治を含めたグループのメンバーだったと思われる工藤祐吉の手帳に「桐の花の薫りを愛でて／集ひせし賢治の／若き頃の横顔」「帰路の木に鉛筆で書く人もあり／ナイフにてけづる人もあり希り」という短歌、また「同し人が同し時刻に／同じ桐の木の下に集まるのが／常であった／誰かゞ桐の下倶楽部とつけた」というメモがあるという。なおタイトル案にもあった「桐下倶楽部」について、島田隆輔（後掲）は「どうかくらぶ」とルビを振り、『新校本全集』の索引では「と」の項と「き」の項に重複して掲載されている。「ど（と）うかくらぶ」あるいは「きりしたくらぶ」と読む両方の可能性を考えているのだろう。工藤は「きりのしたくらぶ」と書いているが、一行目の「霧」（ただし読み方は「さぎり」）と二行目の「桐」をかける気持ちがあったのではないかとすれば「きりしたくらぶ」と読ませたかったのではないかとも思う。

白堊城　盛岡中学校の校舎のこと。

一鐘のラッパ　ラッパの音は「鐘」と呼ばれる音とは違うが、盛岡中学校が始業ベルの代わりにラッパを使っていたための表現なのだろう。「良き師そして良き友　座談会・明治期の思い出」（『白堊校九十年史　世に謳はれし浩然の』盛岡一高創立90周年記念事業推進委員会　昭和四十五年十月）には、インタビュアーの佐伯郁郎（明治三十四年生まれ。詩人）が「その合図ですが、われわれの時はラッパでしたが、先生方の時は？」の質問に山口吉郎（明治二十五年生まれ。俳人の山口青邨として著名。東大名誉教授（冶金学））は「われわれの時もそうですよ」と答え、小野清一郎（明治二十四年生まれ。東大名誉教授（刑法学））は「ラッパの合図で授業を始め、ラッパの合図で終わるということでして、一時間ずつでしたね」と答えている。明治二十九年生まれの賢治も同じ経験をしていたと思われる。

港先生　港純治。盛岡中学校で数学と化学を担当していた実在の教員。明治四十三年から大正六年まで教鞭を採った。島田隆輔（後掲）の示す「学校評判記廿三」（「岩

手毎日新聞」大正二年十一月十八日）によれば「宛然眼球をキョロ〳〵させる小さい先生がある。彼れが即ち湊先生で、先生も御当地には縁が深い。物理学校を卒へて後、当地の師範に永らく教鞭を採られた人だつた。先生は諸種の数学何れとして得意ならざるはないと云ふ偉者が試験負け為るのか急せるのか、要するに落ちて来る」とのこと。

フットボール　森荘已池（後掲）によれば、「フツト・ボールを昼の休み時間にやるという習わしは、上田に新しい中学校が建つてからもやつていた。おもしろいフツト・ボールで、ルールも何もないように見えた。グランドの真中に、ボーンとボールがあがると、何んとなく始まつた。／たしかに、気乗りする日と、気乗りしない日があつて、気圧や天気や、試験のありなしなどが関係したことだろう」とする。盛岡中学校が内丸から上田に移転したのは大正六年八月で、森は明治四十年生まれなので、上田に移転後に入学・卒業していることとなるが、相当に長く伝統が続いていたようだ。後述の村九こと村井久太郎の言葉は、次のように森の文章に紹介されている。「フツト・ボールは、朝、授業のはじまる前や、昼の休み時間にやつたものです。ボールを持ち出すと、ボーンとそれを蹴上げます。そして、落ちて来たのを、とつた者がボーンと蹴るわけでした。それとなしに二組に分れて、敵方の塀に押しつけると勝ち―というのもやりました。／そのころの生徒は六百人ありましたが、ボールを高く蹴つて、校舎を越させることの出来たのは、私のほかほんの二・三人しかおりませんでした」とのこと。仙谷規（後掲）はサッカーであるとし、日本に紹介されたのは明治六年で、明治十六年に盛岡中学校で「フットボール二個」が購入された記録があることを紹介している。ただし村井久太郎の言葉などからゲームの内容を想像すると、ここではサッカー（当時はアソシエーションフットボール（ア式蹴球）と呼ばれた）であるより、ラ式フットボールと呼ばれたラグビーに近いように思われる。ちなみに当時のラグビーボールは慶應義塾蹴球部『ラグビー式フットボール』（博文館　明治四十二年十一月）によれば、いわゆるラグビー型の楕円形ボールを使っていたようだが、盛岡中学校でのボールの形状についてはわからない。

村久　盛岡中学時代の賢治の同級生だった村井久太郎の愛称。仙谷（後掲）によれば次のとおり。「村井家は代々奥州南部藩御用菓子司として士分の列にあり、久太郎の父忠之は剣豪としても名高かった。彼は明治二三年に盛岡初代駅長に任じられ、同三一年退職後、盛岡駅にて「村井

松月堂」の名で構内営業を始めた。同社は現在でも駅弁屋として繁盛している（信時注：令和三年に営業停止）。久太郎は明治二七年に忠之の七男として生まれ、盛岡中学に入学した。当時の同級生の証言によると、彼はスポーツ万能（剣道とフットボールは独壇場だったとのこと）、かなりの硬派であり、下級生は彼の姿を見ると道を避けたほどだったらしい。中学卒業後、早稲田大学に進学、大正一四年より家業を継ぎながら盛岡市議を八期務め、政界でも名を馳せ、昭和三四年に亡くなった」とのこと。国会図書館で検索したところ柔道の達人として名を馳せたようだが、昭和七年九月に司法省刑事局の刊行した『思想研究資料29』には、「盛岡地方ニ於ケル国家主義ないし国家社会主義運動」として、次のような記述も見つかった。「盛岡市々会議員村井久太郎ハ、昭和七年二月民政党ヲ脱退シ爾来青年同士ト「フアツシヨ」的新党ヲ組織すべく画策中ノ処其ノ準備成リ五月六日之ガ相談会ヲ催シ／一、其ノ名称ヲ岩手愛国青年連盟トスルコト／二、規約、綱領、宣言、役員等ハ後日之ヲ決定スルコト／三、中央愛国団体ト連絡ヲ執ルモ其ノ支部トセズ、独自ノ立場ニ於テ愛国運動ヲ為スコト／等ヲ申合セタリ」。ただ、冒頭に「秘」と印刷された資料だけに、存命中の賢治も、そこまではしらなかったかと思う。また、後述するように昭和十四年設立の東亜連盟協会の岩手支部の代表も務めていたようだ。

評釈

黄罫（22　0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは「桐下倶楽部」。藍インクで㈠）、その裏面に書かれた下書稿㈡（タイトルは「盛岡中学校」）の二種が現存。「「文語詩篇」ノート」の大正二年の項に次のように書かれて、赤インクで×が書かれている。本作に文語詩化されたという意味であろう。

九月　　桐下ニテ霧ノ朝

村井、　　高橋、　　佐光、

賢治は盛岡中学に進学した後、はじめは優秀だったのに成績は下降し、欠席日数等も増加したことが知られている。また、中学四年の一月（大正二年）には寮の舎監を排斥する運動に加わり、退寮処分を受けたことも知られる通り。他の生徒たちが将来を考えて進学を志す中で、自分は商家の跡取りとして決められた人生を歩くしかないということからとされているが、そんな時期の詩のようだ。

村井久太郎（森荘已池（後掲）による）は次のように語っている。

内丸の盛岡中学校のグラウンドの裏手に一本の大きい桐の木がありました。その下に同期相求めて自然に集った生徒が、桐下倶楽部を作ったといっていいのです。肌の合わない者は去り、全く親密な集りになりました。阿部仙一（現岩手県知事）がストライキの責任をかぶって、たった一人退校したのを、こんどは復校させようとストライキをやりました。その策源地は桐下倶楽部です。寄宿組には、稲瀬の及川貞治、久慈の中野賢二郎（吉郎兄）日詰の橋本正輔・花巻の宮沢賢治・瀬川貞蔵・佐藤光太郎・永井敬助・鎌田壯介・岩泉の高橋七郎・盛岡組は関口嘉七郎・私などです。

賢治がメモに書いた村井、高橋、佐光（佐藤光太郎）が確認できる。『新校本全集』所収の賢治と同期の卒業生名簿でも名前が確認できる。村井のみ入学時の名簿に名前がないが、賢治よりも生年が二年上であることから、中学時代に落第したといったことがあるのだろう。

吉田沼萍（「桐下倶楽部と賢治君」「四次元８」宮沢賢治友の会 昭和二十五年六月）によれば、当時の盛岡中学では野球部が全国レベルで活躍しており、学内でも様々なチームが名前を付けていたという。「寄宿舎組も、何とか名前をつけようぢゃないかと云ふ事になり、みんなで種々と考へたが、仲々之と云ふ名は浮んで来ないこの時賢治君は／「桐下クラブ」／はどうだらうと云ひ出した」とのことだ。

ただ「教えられ鍛えられた 大正期を彩った「倶楽部」」（『白堊校90年史』前掲）には「桐下倶楽部」の項目もあり、「県内各地から寄合って寄宿舎生活をした生徒らでつくられた倶楽部である」とあり、「白堊校八十年史に、昭和三十二年十一月九日、繋温泉清温荘で阿部勇七らが発起人になり、明治三十八年から大正十年ころまでの旧舎生らが集り「寮生懇談会」を開いた記事があるが、学校に残されているその時の記録には、桐下倶楽部の設立等についてはふれられていない。宮沢賢治も寄宿舎に入っているが彼の四、五年の頃、舎監排斥のストライキの時、他の高学年生と一緒に追い出されている」とのみある。

下書稿㈠の初期形態から見てみよう。

うら寒きさ霧のなかに
気乗りせぬフットボールや

幹彫れる　桐のま下に
村久の　さびしく立てり

剥げそめし　白きペンキの
木柵に人人は捫り、
朝方の　フットボールを、
さびしくもまもるなりけり

一鐘のラッパが鳴りて
急ぎ行く　港先生、
白堊城　秋のガラスは、
ひらごとにうつろなりけり

たゞ白きそらのま下に
桐の枝うごくともなく
村久はなほもさびしく
校庭を見まもりて立つ

実在の人物である村井久太郎が示され、その寂しげな様子が全編に貫かれている。村井は豪放磊落、ともすれば粗暴ともいったところもある人物であったようだが、だからこそ、普段との落差が気になった、ということかもしれない。

村井がどういう人物だったかは、盛岡中学時代に遭遇した森（後掲）の記録が参考になる。

私たちが在学中、早稲田の第二軍が来て、盛中チームと試合した。勝つたようにも思うが負けたのかも解らぬ。ただその時の事で、はつきり記憶していることがある。早稲田の校歌を私たちが練習していたとき、突然講堂の壇に立つた壮漢が、熱血溢れる調子で、早稲田の校歌を歌つて範を示した。私たちは音楽部員の正確な音符の指導で歌つていたのだが、熱血漢の歌は音調以上に歌の真髄を伝えた。音符は形骸であると感じさせたこの熱血漢は早大出身村井久太郎だつた。賢治の同級生である。

島田隆輔（後掲）は、『岩手県災異年表』（盛岡地方気象台　昭和五十四年三月）によれば、大正二年が「この年の稲作期間は平年よりも気温が低く、特に7、8月は異常な低温、日照不足で、8月は雨も多く、このため稲の生育が悪く、前年より3割1分3厘減、五年平均3割4分3厘

の不作となった」ということから、村井の憂鬱が東北の農村を襲う凶作に起因するものだったのではないかとする。

たしかにその可能性もないではないが、士族の血を引き、盛岡駅長（後に駅弁会社の社長）の子で、盛岡の街中で育った村井が、農村に対する鋭敏な意識を持っていたというには、もう少し説明材料が必要であるように思う。なにせ村井は次のような自称「悪童」であったことを自ら語ってもいる（森 後掲）。

桐下倶楽部の生徒は、授業が始まつても、最もあとに教室に入るのですが、そのうちでも一番最後が私で、その私を誘うようにして、賢治さんは一緒に校舎に入つたものです。賢治さんは、花巻弁丸出しで国語の先生をひやかしたり、いじめたりしました。賢治さんと双璧で私は服部品吉という漢文の先生をいじめました。賢治さんは、よくもまああんな悪童共と調子を合せてつき合つていたものです。あいつらに、オレガアイソをつかしたら、アイツラも終りだという気持だつたように思われます。

同年一月の寄宿舎舎監排斥について、賢治は「「文語詩篇」ノート」に、「かの文学士などさは苛めそ。／家には新妻もありてわれらの戯れごとを／心より憂へたり。／なれらつどひて石投ぐるそはなんぢらには戯れなれども／われには死ぞと云ひしとき口うちつぐみて青ざめて／異様の面をなせしならずや」と書いている。村井と大同小異であろう。

賢治も村井も、友人の退学について同情してストライキをするような義侠心の持ち主ではあったが、それでも「戯れ」に教師を苛めていた側面があったことも忘れてはなるまい。

では、何があったのか、ということになるが、特に案があるわけではない。ただ、賢治と村久が、それほどに運命共同体のような関係であったということが感じられるのみだ。ただ、だからこそ本作から読み取るべきことは、むしろそこであるように思うのである。学生時代とは、社会的な地位や名声、打算などということも全く抜きにして人間関係が成り立つ貴重な時代だからだ。

ところで運動神経抜群の村井は、賢治とはおよそ対極にある人物のように感じられるが、中学時代の賢治には、やはり運動神経抜群だった藤原健次郎という友人（一年先輩）もいた。藤原は体が大きく、請われて中途から野球部に入部し、大抜擢されて四番ライトとして活躍した。しかし、秋田への遠征試合から戻ったところで腸チフスに罹っ

て早世している。童話「二人の役人」「鳥をとるやなぎ」には藤原慶次郎という人物が登場するが、モデルは藤原健次郎ではないかとされている。

そんな藤原に対して賢治が送った書簡（明治四十三年九月十九日）は次のようなものだった。

拝啓

こんなに鉛筆で書かうもんなら学校の選手に対して何ぞその不敬なるなんて怒るかも知れないが不敬なやうで失礼でもないんだから何ともないね。

何うだね。遠征中大館に対する時のもやうを書いては。それと早大に対する一点はあれゃ誰が失策したんだね。

選手仲間だからおっかなくってなんてそんな下手な事云ふもんじゃない。

同じ書簡の中で、賢治は大沢温泉に一人で出かけた時のできごとを「どうも僕はいたづらしすぎて困るんだ」として綴っている。賢治は温泉の湯舟に故意に川の水を流し込んで溢れさせたことについて、「面白くおっかなかったねー」「家の人と行かないと之れだからいゝ」とも書いている。

君の今度の成績はどうだあね

僕は百番近く、まづ操行丙。体操丙。博物丙。算術丙。歴史丁。といふあんばいだね。

舎監諸氏の信用も何もないね。チュケァン。奴。来学期は生しておかない。

なますにして食ってしまはなくっちゃぁ腹の虫が気がすまねぇだ。

なんて云ふとゴロツキ見たいだがね。まぁともかく僕は僕自身に謹しんで吊意を表すらぁ。

これが中学二年の夏休みの書簡だが、この年度は成績は一年次からほぼ変わらず精勤賞。操行が乙から丙に落ちてはいるものの、さらに上級学年になってからの凋落ぶりに比べれば、まだまだ荒れてはいない。

村井は賢治が「悪童共と調子を合せてつき合つていた」と語っているが、もともといたずら好きだった賢治なので、馬が合ったのかもしれない。

馬が合った理由は、いたずらだけではないだろう。吉田（前掲）は「当時の私達の友情と云ふものは、今の人達には到底想像もつかぬ濃やかなもので、兎に角所持金をお互ひが全部浚け出しその合計金額で賄ふてゆく」と書いているが、賢治の所有欲のなさ、人情味の深さにも通じるとこ

ろがあり、こうした情の篤さが賢治には居心地がよいものだったのだろうし、熱血漢の村井と合っていたのかもしれない。いや、もしかしたら賢治の資質は、この時に培われたものだったかもしれない。

中学時代の友人としては阿部孝が知られているが、阿部は東大に進学して英文学を修め、高知大学学長も務めた人物だ。賢治とは文学的な交流もあり、また阿部はそれを文章に残す機会も少なくなかった。

一方、村井は駅弁会社の経営や市議会議員を務めていたこともあり、賢治との思い出を文章に綴る機会も少なかったのだろう。しかし、文章が残っていないからと言って、村井と賢治の間に濃厚な関係が継続しなかったとは言い切れない。

たとえば村井と賢治の交流が中学時代だけで終わったわけではないことは、長谷川渉「賢治・心平交渉年譜」（草野心平『わが賢治』二玄社 昭和四十五年九月）の昭和九年の項に村井の名が載っていることにも現れている。関係する箇所を引用しておきたい。

一〇月、全集の第一回配本として第三巻『童話篇』（童話一七篇、劇三篇）が発行される。この全集は三巻とも全て心平に一任され、独断決定の編纂によるもの。装幀は高村光太郎。またこの頃と前後して「東京宮沢賢治友の会」（渋谷区大山町二十三番地、草野方）を結成。岩手県在住の、例えば、村井久太郎、岩田徳弥、木口二郎、森惣一、藤原嘉藤治、小泉一郎、小田中光三、小原忠簡悟などと、東京在住の八重樫祈美子、菊池武雄、照井瀴三らと呼応して、文圃堂の好意的出版に報いる為にも、全集の宣伝方法や、頒布方法などを相談。心平の弟天平が経営していた銀座八丁目喫茶店「羅甸区」などで何度か集会を持つたりする。

とあり、岩手県在住者の筆頭に名前が挙げられている。どういう順序なのかはわからないが岩田徳弥（関登久也）や森惣一（森荘已池）、藤原嘉藤治よりも前に名前が挙がっている。

また、時代は下るが、石原莞爾が中心となっていた東亜連盟協会と村井との関りも見つかった。東亜連盟は昭和十四年に設立され、会員約一万五千名。日本をアジアの盟主とし、日中戦争を終わらせてアメリカとの世界最終戦争に備えろと主張する政治と宗教が一体化した団体であったが、内村琢也（「準宗教運動としての東亜連盟運動―東亜連盟協会の事例を中心に」「創価大学大学院紀要」創価大学大学院 平成二十一年十二月）によれば、国柱会を信奉

する石原は、これを準宗教運動として位置づけようとしていたという。そして、その岩手支部（昭和十五年七月十五日設）の代表者に村井久太郎が就いていることが内村論文から確認できる。支部の所在地は「盛岡市盛岡駅前 村井方」となっているが、村井が経営していた駅弁会社・村井松月堂と同じ場所であることから村井本人だとしていいだろう。

石原と賢治の主張が一致していたというわけではないが、村井が賢治全集の後押しのみでなく、宗教を巡っても連絡を取り合っていた可能性もある。ただ、語注でも書いたように昭和七年に「民政党ヲ脱退シ爾来青年同士ト「フアツシヨ」的新党ヲ組織すべく画策中」（「盛岡地方ニ於ケル国家主義ないし国家社会主義運動」『思想研究資料29』司法省刑事局 昭和七年九月）という記事を見れば、賢治との思想的な距離が完全に一致していたとも考えにくくはある。

しかし、ちょうどその頃、結果として未定稿に留まったとは言え、賢治は村久をテーマにした文語詩に㋆了まで付していたことを思うと、村井に対する思いはずっと継続していたことになるだろう。

いずれにせよ賢治の交友関係はが文学や音楽、農学のみでなかったこと、ことに中学時代の友人たちとの交友関係が途絶えてはいなかった可能性について、もう少し真剣に考える必要があるのかもしれない。

そう思えば、豪放磊落な村井が校庭で見せたさびしそうな様子に、賢治がかくまでにこだわった理由も、このあたりにあったのかもしれないようにも思えてくる。まだまだ不明な点は残るが、新資料の発見を待ちたい。

先行研究

森荘已池「盛岡中学校を歌った文語詩」（「イーハトーヴォ復刊6」宮沢賢治の会 昭和三十年八月）
萩原昌好「「春」と「修羅」前夜」（『宮沢賢治 「修羅」への旅』朝文社 平成六年十二月）
杉浦静「テクスト・クローズアップ⑬ 「校庭」「盛岡中学校」」（「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報13 ケンタウルス」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成八年九月）
千石規「盛岡中学校」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』柏プラーノ 平成十四年七月）
黒沢勉「賢治作品に見る盛岡」（「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報28 サクラソウ」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十六年三月）

小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）
米地文夫「宮沢賢治が描いた架空の島「三稜島」の手書き地形図」（「総合政策20」岩手県立大学総合政策学会 平成三十一年三月）
島田隆輔「《賢治自伝》詩譜の試み 中学生時代篇（下）」（「論攷宮沢賢治19」中四国宮沢賢治研究会 令和三年十月）

59 Romanzero 開貘

①落ちしのばらの芽はひかり
　樹液はしづかにかはたれぬ

②あゝこの夕つゝましく
　きみと祈らばよからんを

③きみきたらずばわが成さん
　この園つひにむなしけん

④西天黄ばみにごれるに
　雲の黒〔一字不明〕の見もあえず

大意

落ちた野バラの芽がひかって
樹液は静かに夕暮れを迎えている

あぁこの夕べをつつましく
君と祈りをささげられたらいいのだけれど

君が来ないのでわたしがしよう
この農園もまったくわびしいものだ

西の空が黄ばんで濁って見えるが
雲の黒　　も見えないでいる

モチーフ

稗貫農学校時代の恋を詠んだ詩篇から、虚構を交えた恋愛詩にするつもりだったようだ。「ロマンツェロ」のタイトルを持つ作品は文語詩に多いが、おそらくはハイネの『ロマンツェロ』を踏まえてのものであろう。ただハイネとは異なり、賢治は一篇の例外を除いて「ロマンツェロ」を恋愛抒情詩の意味で使おうとしていたようだ。しかし、この

例外の存在を重くとらえれば、ハイネが『ロマンツェロ』を発表した際の心情や思想と、文語詩を書いていた頃の賢治に近いところがあることから、賢治にも恋愛抒情詩を越えた詩群や詩集を編む可能性があり、その痕跡が「ロマンツェロ」だったのかもしれない。

語注

Romanzero　『定本語彙辞典』には「ドイツでは抒（叙）情的な民謡調の物語詩がロマンツェ（Romanze独唱歌曲やリートふうの声（器）楽曲にも言う）で、その詩集を言う。ドイツのユダヤ系詩人ハイネに同名の詩集（一八五一）がある。日本では一九二〇（大正九）年に生田春月訳、越山堂からハイネ全集が出ており、その第二巻にロマンツェロ（譚詩集）が収められていた。賢治が読んでいたことは十分考えられる」とある。賢治は「Romanzelo」と書いているが、正しくは「Romanzero」で、『新校本全集』では「Romanze〔r〕o」と修正している。他の場所では「Romanzello」と書き、また「ロマンツェロ」とも書いている。タイトルの「Romanzelo」の部分は現行では横書きで、「開墾」は縦書きになっている。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」第一葉に手を入れた下書稿㈠、既使用の黄罫（22 0行）詩稿用紙の裏面に書かれた下書稿㈡（手入れ段階で「Romanzelo開墾」。藍インクでⓕ）。表面に昭和六年一月九日の佐藤昌一郎宛書簡下書き、その余白と裏面に「一百篇」の「〔翁面 おもてとなして世経るなど〕」の下書稿が書かれている。

まず「〔冬のスケッチ〕」から引用してみたい。

※

芽は燐光
樹液はまこと月あかり

※

薄明穹黄ばみ濁り
こひのこゝろはあわたゞし
こひのこゝろはつめたくかなし

すでに何度か書いてきているように、賢治は大正十年に東京への家出上京から戻ってから出会った女性と交際していたと言われている（栗原敦「「きみにならびて野にたてば 賢治の恋」の〈詩〉読解のこと」『宮沢賢治探究 上 思想と信仰』蒼丘書林 令和三年七月）。おそらくその体験を虚構を交えながら詠んだものだろう。

手入れによって、次のように改変される。

※

落ちしのばらの芽はひかり
にじむ樹液はあかりせり

※

西天黄ばみ濁れを
ひとをおもへばあわたゞし

そして下書稿㈡、つまり最終形態に至るわけだが、昭和六年一月に書かれた書簡の下書と同一紙を使っているとのことなので、この頃に冒頭に掲げたような祈りのテーマ、農園のテーマを挿入することになったようだ。

ジャン・フランソワ・ミレーに「夕べの祈り」や「晩鐘」と訳される絵があるが、農園の野バラの前で男女がつつましく祈りをささげるというのは、当時の岩手の農村では日常的な風景であったとは思えない。ミレーの絵などに触発され、理想的な農家の夫婦を描こうとしたのではないかと思う。

ところでタイトルの「Romanzero」は、冒頭の文字が大文字であることからもドイツ語名詞なのであろうが、語注に書いたように、ハインリヒ・ハイネには同名の詩集（一八五一年）があり、おそらくそこから借りて来たのであろう。童話「土神ときつね」では、きつねが樺の木とハイネの詩集について語る場面があり、「ハイネの詩集にはロウレライやさまざま美しい歌がいっぱいにあった」とあるから、賢治がハイネについて知っていたのは確実だ。賢治の蔵書には残っていないようだが、ハイネほど愛された詩人はいないとも言われるくらい日本では愛読されており、早くから翻訳・紹介されていた。鷗外が翻訳を載せ、その後、高山樗牛や石川啄木、山本有三、生田春月、佐藤春夫、中野重治らが好んでいたことが知られており、賢治が大正九年十二月刊の『ハイネ全集２』（超山堂）に生田春月訳の「ロマンツェロ」があったことを知っていたのは、ほぼ間違いない。

井上正蔵（「解説」『ハイネ全詩集４』角川書店　昭和四十八年一月）は、「『ロマンツェーロ』というのは、もともとはスペインから起こった民謡ふうの抒情的、劇的要素を持つ譚詩、ロマンツェの集まりであるが、作者自身の後記の冒頭に書かれてあるように、それは必ずしも術語的に厳密な意味を持つものではなく、いってみれば物語詩集とよんでもいいほどのもの」とする。ハイネはドイツにおける一八四八年革命の失敗と自身の病苦の中から、プロシ

ア政府やオーストリア官憲などから発売禁止などの処分を受けながら詩集を編んでいる。

生田春月（「訳者序」『ハイネ全集１　詩の本』春秋社大正十四年七月）は、「ハイネは思ふに初恋の如きものであらう、若いやわ(ママ)らかな心は、つひにその魅力から免れる事は出来ない、その初恋、その若き日の悩みのために、ハイネはいかに尊く、いかにふさはしい友であらうか」と、日本でのハイネ人気について述べるが、「ハイネを単なる「甘美な感傷の詩人」としてのみ受容れてゐる人々は、未だハイネの真の心の傷口に触れないものである」としているように、ことに『ロマンツェロ』などは愛や感傷の詩集としては、とうてい捉えられない詩集となっている。

増田周子（「宇野浩二童話「王様の嘆き」に見るハインリッヒ・ハイネ「ロマンツェロ」受容」「国文学91」関西大学国文学会　平成十九年三月）によれば、宇野浩二も尾上柴舟訳『ハイネノ詩』（新生社　明治三十四年十一月）に感動し、大阪・中之島の図書館に通って英訳を読みふけったという。宇野は自ら童話「王様の嘆き」がハイネの『ロマンツェロ』の影響によるものだったと公言しているが、こうした例もあったようである。

では賢治がどのように『ロマンツェロ』を解したかと言えば、「Romanzero」というタイトルあるいはメモを書き付けた八篇（カタカナ表記もカウント）を見ると、そのうち七篇は恋愛のモチーフを含んだものとなっている。賢治は『ロマンツェロ』を読んでいなかったか、読んでいたとしても「甘美な感傷の詩人」というイメージから脱し切れていなかったようにも感じられる。

八篇のうち口語詩は一篇のみで、文語詩が七篇。そのうちの一篇は定稿にも未定稿にも数えられていない手帳に書かれただけのものだ。以下、八篇について簡単にたどっていきたい。

①「若き耕地課技手の Iris に対するレシタティヴ」は「春と修羅 第二集 補遺」として『新校本全集』に掲載された口語詩である。タイトルの上に「Romanzelo」と書かれているので、その方向に改稿する意志があったということだろう。全集本文に採用されてはいないが「そのまだ来ぬ人の名を」と書かれた段階があり、実際に人間が登場するわけではないが、種山ヶ原の美しさについての思いと恋を並べるつもりがあったのだろう。

②「〔月の鉛の雲さびに〕」は「五十篇」の一篇で、その下書稿㈣の中央上部に「Romanzello(ママ)」とあり、下書稿㈢には次のような部分がある。恋愛の苦悩を語るつもりだったようだ。

ひたすらおもひたむれども
はせ行く汽車の窓あかく
ひとりをおもひさながらに

③「〔月のほのほをかたむけて〕」も「五十篇」の中の一篇で、下書稿㈡には「Romanzelo」のメモがあり、「セレナーデ」のタイトル案も示されていた下書稿㈠には、次のような部分がある。

きみしたひこゝにきたれば
草の毛や春の雲さび
月の面をかすめて過ぎつ

④「流氷（ザエ）」も「五十篇」の中の一篇で、下書稿のタイトルは「ロマンツェロ」であった。定稿でも恋愛が前面に出ているが、タイトルには残っていない。

あゝきみがまなざしの涯、　うら青く天盤は澄み、
もろともにあらんと云ひし、そのまちのけぶりは遠き。

⑤「〔きみにならびて野に立てば〕」も「五十篇」の中の一篇で、下書稿㈡に「ロマンツェロ」とタイトルが付けられている。定稿でも恋愛が前面に出ているが、タイトルは付けられていない。以下、定稿の一部を記す。

きみにならびて野に立てば、　風きらゝかに吹ききたり、
柏ばやしをとゞろかし、　枯れ葉を雪にまろばしぬ。

⑥「Romanzero 開墾」は本作。「未定稿」に分類される文語詩であり、第二、三連を再び示す。

あゝこの夕つゝましく
きみと祈らばよからんを

きみきたらずばわが成さん
この園つひにむなしけん

⑦「〔雲深く山裳を曳けば〕」は「未定稿」に分類されるもので、下書稿㈠が「孔雀印手帳」に「ロマンツェロ」のタイトルの元に書かれている。

車窓のかなた北のはて
山裳をひけば
きみ遠く去るにも似たり

ひわいろなせる丘群に
日射しなまめば
きみきたり訪ふにも似たり

ここで宇野浩二も熱中したという尾上柴舟の『ハイネノ詩』から巻頭に掲げられた「おのが涙」（『歌の本』（Buch der Lieder）一八二七（文政十）年）を挙げてみたい。

おのが涙のしたゝらば
麗しき花咲きぬべし
おのがなげきの響きなば
鶯の音となりぬべし

われを思はゞをとめ子よ
花をば君にまゐらせむ
きみが窓辺にうるはしき
鶯の音もひゞくべし

言葉の使い方や雰囲気にロマン主義的なものが感じられ、賢治の一連の「ロマンツェロ」作品が、引用や翻案とは言えないにしても、こうしたハイネ流の抒情詩の延長にあったということは疑えないように思う。

さて、もう一つ残るのが「雨ニモマケズ手帳」に書かれ、『新校本全集』で「補遺詩篇Ⅱ」として扱われる⑧「ロマンツェロ」である。まったくこれのみはハイネ風の恋愛詩とはとうてい言えないものになっている。

なつかしや　なつかしや
こは毘沙門のおん矢なれ
天の功徳のそが故に
事とてならぬ年なくて
はや身は老ひし七十路の
すでにこゝろのたかぶりて
諸仏菩薩をあなづりて
悪道近きをあはれみまして
射てとたまひしおんかぶらやなり

小倉豊文（「ロマンツェロ」『「雨ニモマケズ手帳」新考』東京創元社　昭和五十三年十二月）は、「忍ぶ恋路の歌」らしいところが感じられず、「烈々たる宗教的熱情を感ぜしめるのみだ。恐らく、彼の何らかの宗教的幻想から生れた作品というべきであろう」とし、門屋光昭（「法華経と庶民信仰

とのはざまで」『鬼と鹿と宮沢賢治』集英社新書 平成十二年六月）も、小倉に同意しながら「迫りくる死に多少とも錯乱状態にあった賢治にいとおしさを私は感ずるのである」とする。

ただ、米地文夫・神田雅章（後掲）は、ロマンツェロとは「忍ぶ恋路の歌」ではなく「譚詩集あるいは物語詩集である」として両者を批判し、独自の視点から論じようとしている。しかし、ロマンツェロの語が付された賢治詩が八篇あるうちの七篇が恋愛に関わる詩であることを思えば、小倉がロマンツェロの語を誤解していたのは確かだとしても、事実としては小倉の言うとおりだということになる（なお米地・神田はロマンツェロの語が登場するのが七篇だとしているが誤りで、また恋愛に関わる詩の数をあげず「特に次の４篇では、恋人を「きみ」と呼んで歌い込んでいる」としているのは、それ以外の詩では恋愛を詠んでいないような印象を与える記述になっている）。

しかし米地・神田がロマンツェロは題名ではなく、多くの詩を纏めたものの名だとして、「賢治はハイネの詩集『ロマンツェロ』に倣って、自らの文語詩集『ロマンツェロ』を編むつもりであったらしいのである」としているのは興味深い。

賢治がいくつかの詩篇をまとめようとした例として、たとえば「未定稿」の「宅地」の書かれた原稿用紙に次のように書いている。

◎手がほてる
◎親方
◎稲作挿話
◎げらげら笑ふ

「稲作挿話」のみ抹消した跡があるというが、それ以外の三つについては、該当する文語詩があるので、農村風景を描いた文語詩群として、ひとまとめにする構想があったのだろう。

また、文語詩ではないが、「花鳥図譜」という語を含む詩篇に「花鳥図譜　雀」「花鳥図譜・七月・」「花鳥図譜丶八月丶早池峯山巓　森林主事、農林学校学生、」「花鳥図譜十一月　東北菊花品評会　於盛岡」などがあり、それに関わると思われる構想メモもあることから、シリーズ化する構想があったことが伺える。

童話でも「少年小説」や「花鳥童話」として、いくつかの作品をまとめようとした例があり、決して突飛な発想であるとは思われない。

ただ、「文語詩集『ロマンツェロ』を編むつもりであった」というのが、あり得ないことではなかったとしても、賢治が残した詩が「忍ぶ恋路の歌」に集中していたのがなぜかについても考えておかなくてはなるまい。

簡単に解ける問題ではなさそうだが、井上正蔵（前掲）が『ロマンツェーロ』の解説として書いた次の文章を読むと、賢治が晩年に文語詩を編んだ気持ちと共通するところが多いように感じられる。

いうまでもなくハイネは、長い詩人としての体験にもとづいて時代に先立つ意識を把持していた。変革の時代には歴史をつくりあげる人民を自分の眼で見、自分の鼻で嗅いでしまわずにいられなかった。とはいえ、肉体の自由をうばわれながら世界や人生をながめて歌いあげたものは、勝者への凱歌ではなく、いわば敗者への挽歌であり、この世の美しきもの善きものが、虐げられ辱しめられる現実への苦渋にみちた批判の声ともなった。それは、邪悪なものの優勢にたいする憤りであった。なぜこの地上では、正しいものがかくも多く苦しまねばならぬのか。悪と不正の栄えるこの世の不合理への追及、風刺、嘲笑が、変形・誇張のデフォルメや素朴・単純な直截の詩句となってあらわれたことはいうまでもない。

たとえば、大金持ちの国王から姫と財宝を奪った盗賊がのちにこの国王の後継ぎとなり、この盗賊の治下には盗賊がほとんど無かったというハイネの支配者蔑視は、首斬人が貴族になるという「ベルゲンの悪漢」にもつながっている。「ヘイスティングズの戦場」では、ハロルド王は外国の侵入者に殺されて死骸も行方不明となり、結局は身分の卑しい王の昔の愛人が見つける。それどころか、「チャールズ一世」では、王が子守歌を歌って寝かしつける炭焼きの子が、やがて王の首を斬りおとすようになると歌われている。ここには、明るい見通しの革命的精神が盛りあがっているといわなければならない。これは過去に打ち克つ革命の詩化にほかならぬ。

賢治がここまでハイネに通じていたとは考えにくい。しかし賢治は文語詩にただ自分の経験を書きこむのみでなく、さまざまな人の生活を描き、中でも社会的な弱者に肩入れして権力者を批判しているのは、かなりハイネに近い。またハイネが病苦にあえぎながら『ロマンツェロ』を編んだのだとしたら、心境的にもかなり近いところがあったようにも思う。

ただ賢治が「ロマンツェロ」と付した詩の数は八篇に過ぎず、内容もハイネの『ロマンツェロ』に比べれば「忍ぶ恋路

の歌」ばかりが偏重されている。しかし「なつかしや なつかしや／こは毘沙門のおん矢なれ」といった、およそ恋愛らしい要素の欠けた詩篇も含まれていたことを思えば、賢治がもっと内容と量の両面に亘って、こうした詩を増やすつもりであったと考えることも許されよう。だとすれば「文語詩集『ロマンツエロ』」というレベルではなく、もっと大きく、文語詩自体を「ロマンツェロ」とする意識があったと考えることもできるのではないだろうか。

小倉や門屋のように幻想や錯乱によるものだとして切り捨てるのも一つの考えではあろうが、米地・神田の提案を受け入れ、大きな構想に繋げて考えてみることもできるはずだ。とは言え、賢治の文語詩はハイネほどに現実の政治を批判することはなく、外国に渡ってまで活動を続けようとしたわけでもない。農業や仏教について、岩手の民俗や風習についてなど、賢治とハイネの違いを指摘していけばきりがない。ただ、今は賢治がハイネを参考にして文語詩集を編んだ可能性もあるとのみ指摘するに留めたい。

先行研究

菅原千恵子「晩年の信仰と嘉内」（『宮沢賢治の青春 〝ただ一人の友〟保阪嘉内をめぐって』角川文庫 平成九年十一月）

島田隆輔「〔冬のスケッチ〕現状に迫る試み／現存稿（広）グループ・標準型（一）における」（「宮沢賢治研究 Annual8」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成十年三月）

米地文夫・神田雅章「宮沢賢治の詩いわゆる「ロマンツエロ」と藤原清衡 毘沙門天の矢はなにを伝えたのか」（「総合政策16―2」岩手県立大学総合政策学会 平成二十七年三月）

60 「館は台地のはなれば」

館は台地のはなれば
鳥は岬の火とも見つ
香魚釣る人は薮と瀬を
低くすかしてわきまへぬ

鳥をまがへる赤き蛾は
鱗粉きらとうちながし
緑の蝦を僣しつゝ
浮塵子あかりをめぐりけり

大意

家があるのは台地の端なので

鳥は岬の灯台であるかとも見ているようだ
鮎釣り人は薮と川の瀬を
身を低くして灯りをたよりに歩いている

鳥かとも思わるほどの赤い蛾は
鱗粉をキラキラ落としながら飛び
緑色のエビだとでも言うように
ウンカは燈のまわりを飛び回っている

モチーフ

賢治が独居自炊していた宮沢家別荘の夜の様子を詠んだもの。先行作品には「来訪」というタイトルがあり、農民が賢治の元に相談に訪れたことを記していたが、文語詩では彼らの姿が消え、訪れるのは蛾やウンカ。人間はわずかにアユ釣りの人のみだ。先行作品を見ると、訪れた農民たちは激しく喧嘩をした後のようで、賢治はそんな人間たちより、むしろ虫たちを歓迎していたかのようにも読み取れる。関連作品の「林館開業」（「一百篇」）では、美女を集めたカフェには人間ではなく昆虫だけがやってくると書いていたが、そこに共通したものがありそうだ。

語注

館　先行作品である口語詩に「下台」という地名が書かれていることからも分かるとおり、賢治が独居自炊した下根子桜の宮沢家別荘が舞台だろう。書かれているように「台地のはな」であるため、電燈をつけると虫たちが集まったことが予想できる。

香魚　アユの異称。『新校本全集』の索引や『宮沢賢治コレクション10』では「コウギョ」ではなく「アユ」と読ませようとしているようだ。音数から言っても「アユ」が妥当だろう。アユは淡水魚だが泥臭さがなく、香りが爽やかだとされる。『日本国語大辞典』によれば「体全体、特に体表をおおっている粘膜に良い香りがあるところからいう。香りは、餌として食べる藻類の成分による」とのこと。

瀬　川の流れの速い部分。アユの代表的な釣り方に友釣りがある。囮のアユのそばに縄張り意識の強いアユが攻撃を仕掛ける際、囮のアユに仕掛けた釣り針にかかるのを待つ日本独特の漁法。流れが速いところにはよいコケが生えることから重要なポイントになるという。

低くすかしてわきまへぬ　アユを採ろうとする釣り人が、背を低くして慎重に川と薮とを分けて歩いた、ということだろう。「すかす」は、薮の向こうから「館」の灯りを透かしてみる、ということなのだろう。

浮塵子　『新校本全集』では「うんか」と仮名が付けられているが原文にはない。イネの害虫で5ミリほどのカメムシ目の昆虫。緑色だったとするとグンバイウンカやヨコバイの類であったのだろう。

評釈

黄罫（22 22行）詩稿用紙に書かれた先行作品の口語詩「来訪」の原稿紙上に文語詩化されたた下書稿㈠、同一の紙に書かれた下書稿㈡の二種が現存。

まずは『新校本全集5』に口語詩として載せられている先行詩篇の最終形態を載せる。

水いろの穂などをもって
三人づれで出てきたな
さきに二階へ行きたまへ
ぼくはあかりを消してゆく
つけっぱなしにして置くと
下台ぢゅうの羽虫がみんな寄ってくる
　……くわがたむしがビーンと来たり、
　一オンスもあって
　まるで鳥みたいな赤い蛾が
　ぴかぴか鱗粉を落したりだ……

ちゃうど台地のとっぱななので
ここのあかりは鳥には燈台の役目もつとめ
はたけの方へは誘蛾燈にもはたらくらしい
三十分もうっかりすると
家がそっくり昆虫館に変ってしまふ
　……もうやってきた　ちいさな浮塵子（うんか）
　　ぼくは緑の蝦なんですといふやうに
　　ピチピチ電燈（デンキ）をはねてゐる……
それでは消すよ
はしごの上のところにね
小さな段がもひとつあるぜ
　……どこかに月があるらしい
　　林の松がでこぼこそらへ浮き出てゐるし
　　川には霧がしろくひかってよどんでゐる……
いやこんばんは
　……喧嘩の方もおさまったので
　　まだ乳熟の稲の穂などを
　　だいじにもってでてきたのだ……

文語詩の下書稿㈠の初期形態は次のようなものだ。

館は台地のはななれば

鳥には岬の火とも見え
沖積面の一里には
誘蛾燈ともはたらきぬ
体重一オンスありて
鳥のごとき赤き蛾の
きららかに鱗粉をおとせり
くわがたむしビーンと来り
はたちいさなる浮塵子むし
緑の蝦を潜(ママ)しつゝ
燈のめぐりをはねあるく
秋風吹けば
喧嘩納まり
ひとびととともに談らひて
乳熟なせる稲の穂を
ひともと待(ママ)ちて来るなり

ほとんど口語詩を逐語的に文語化しているようにも感じられるが、賢治とも思われる話者が「三人づれ」の「来訪者」に向かって、電燈をつけっぱなしにすると虫が入ってきて大変なことになるので、先に二階に上がっていてくれ、と頼むユーモラスな部分が削除されてしまって、来訪者たちは、末尾に三行登場するだけになっている。

そして最終形態の下書稿㈡になると次のようになる。

館は台地のはななれば
鳥は岬の火とも見つ
香魚釣る人は薮と瀬を
低くすかしてわきまへぬ

鳥をまがへる赤き蛾は
鱗粉きらとうちながし
緑の蝦を偕しつゝ
浮塵子あかりをめぐりけり

この段階では、ついに訪ねてきた人がいなくなってしまって、その代わり、というべきなのか、鳥や昆虫に混じって、アユを採る人も川から自邸の燈火を頼りにしている、と書かれるのみになっている。

先行作品のタイトルは「来訪」であったが、文語詩になると、テーマになるはずだった来訪者たちの姿が消え、昆虫が来訪者だと擬人化した作品のようになっている。いや、そうではなく、賢治はもともと昆虫のことを来訪者とし、人間の方は重要ではないとして削除してしまったのかもしれない。

気になるのは「喧嘩の方もおさまったので／まだ乳熟の稲の穂などを／だいじにもってでてきたのだ」、あるいは文語で「喧嘩納まり／ひとびとともに談らひて／乳熟なせる稲の穂を／ひともと待ちて来るなり」と、どうも賢治の家を訪ねてくる人間たちが、けんかをしていたと思われることだ。賢治が「ケンクヮヤソショウ」（「雨ニモマケズ」）を嫌ったことは、言うまでもないが、だとすると、この来訪者たちは、賢治にとって招かれざる客だった可能性も出てこよう。

口語詩を素直に読めば「三人づれ」の農夫たちが自邸を訪ねてきたが、招かれざる客としての虫がいるので、電燈を消そうという詩なのだが、賢治にとっては、電燈の灯りに誘われてやってくる虫たちの方が、よほど気持ちのいい存在で、自我を主張し、他者を貶めようとするような人間より、よほどせいせいするという気持ちを書いていたのかもしれない。

独居自炊時代に元同僚の白藤慈秀が訪ねた時の文章がある（「宮沢さんの食事　朝食は井戸に吊してあった」『こぼれ話　宮沢賢治』トリョーコム　昭和五十六年二月）。

宮沢さんは朝の用意ができたというから部屋に入った。朝炊の煙も見えない。ご飯ができましたかというと、ご飯なら心配がない、昨晩のご飯が沢山あったので、そのご飯を裏の井戸の中に吊しておいたから心配はないと、ザルの中から取り出して二人で食卓をかこんでいろいろの話をかわしながら食事をした。

ご飯は一晩中井戸の中に吊されてあったから十分水気をふくんでサクサクして夏のご飯らしかった。

これに直接対応するとは言えないにしろ、近い状況について書いているのが「心象スケッチ　林中乱思」である。

白菜をまいて
金もうけの方はどうですかなどと云ってゐた
普藤なんぞをつれて来て
この塩汁をぶっかけてやりたい
誰がのろのろ農学校の教師などして
一人前の仕事をしたと云はれるか
それがつらいと云ふのなら
ぜんたいじぶんが低能なのだ

賢治は浄土真宗の僧侶であった白藤に対して、ただ宗派が違うという以上の反発心があり、「四〇一　氷質の冗談　一九二五丶一丶一八丶」では「白淵」として登場させ、「大本山からなんにもお振れがなかったですか」などと揶揄して

いる。「心象スケッチ　林中乱思」では、白藤を「普藤」として、その俗物性を批判しようとしているのだろう。賢治の接待は「京都人のお茶漬け」のようなもので、愛想よく自邸に招き入れながら、内心は「この塩汁をぶっかけてやりたい」というようなものであったようだ。

そしてもう一つ気になるのが、「林館開業」（「一百篇」）との関係である。

①凝灰岩（タフ）もて畳み杉植ゑて、　麗姝六七なまめかし、
南銀河と野の黒に、　牖々をひらきたり。

②数奇（すき）の光壁更たけて、　千の鱗翅と鞘翅目、
直翅の輩はきたれども、　公子訪へるはあらざりき。

林間にあるカフェには美しい女性たちが集まっているが、やってくるのは鱗翅目（蝶や蛾）、鞘翅目（クワガタやカブトムシ）、直翅目（バッタやコオロギ）ばかりで、訪れる公子はいなかった、というものだ。「五十篇」の「萎花」の下書稿㈠にも「凝灰」や「千のひらめく鱗翅」、「直翅の群」などの文字があり、これらは密接な関連があったように思う。

これらの源流となった口語詩は「一〇八六　ダリア品評会席上　一九二七、八、十六、」であり、それを文語詩化したのが「〔歳は世紀に曾つて見ぬ〕」（「未定稿」）である。その後半は次のようになっている。

このとききみは千万の
人の糧もてかの原に
亜鉛のいらか丹を塗りて
いでゆの町をなすといふ

この代あらば野はもって
千年の計をなすべきに
徒衣ぜい食のやからに
賤舞の園を供すとか

一九二七（昭和二）年の夏は曾つてなかったほどの悪天候で凶作が予想されるというのに、花巻温泉を開発して遊境地などを作っている場合なのかと糾弾する詩だ。

昭和二年、賢治は教え子だった冨手一の依頼で花巻温泉の花壇設計をする。温泉の他にも貸別荘や大弓場、室内遊戯場、動物園、テニスコート、スキー場などを擁するリゾートで「日本新八景」でも全国一位を取るほどだったが、

実際は「息づまる様な、モダンガールの汗臭い匂いから逃れて、山間のいで湯に一浴して一盞傾け乍ら、欲しいのは矢つ張り女だ」。「花巻温泉にも毎日何百にんとなく入り込むお客様方の為めに朝夕の御機嫌を方する湯女が約七十人から居る」（「花巻温泉ニュース」昭和四年七月十五日）とされるような場所であった。彼らを批判しながらも、自分自身もそれと無関係ではなかったことが、一層賢治をいらだたせたのだろう。

「林館開業」は「〔館は台地のはなれば〕」における昆虫たちが光をめがけて集まるというアイディアを取り入れた点で似ているだけでなく、本来の来訪者である人間、しかも感情として受け入れたくない彼らを詩篇に登場させず、昆虫の方を来訪させているという点でも共通している。一方が定稿になったために、こちらが未定稿になったということかもしれない。

また、こんな風にも考えられるかもしれない。賢治は「五十篇」と「一百篇」に、歌詞の一番と二番のように「対」となるような似かよった語や表現を使った詩を書いていたが、これらは「対」になるように同時に推敲が進みながら、途中で構想が破棄され、本作だけが未定稿に留め置かれた、という可能性である。

いずれにせよ、口語詩からは賢治の人の好さ、やさしさ、ユーモアが読み取れそうだが、文語詩になると、その下に流れる人間不信の思いが読み取れるように思う。

先行研究

太田昌孝「宮沢賢治研究３ 詩「白い鳥」に見られる宗教観と、原風景としての安倍氏の興亡（白鳥伝説）」（「人間文化研究３」名古屋市立大学大学院人間文化研究科 平成十七年一月）

泉沢善雄「〈作品と花巻その五〉生活者の視点で作品現場を歩く 文語詩・短歌・補遺詩篇」（「ワルトラワラ45」ワルトラワラの会 令和元年十二月）

61 「二川こゝにて会したり」

（二川こゝにて会したり）
（いな、和賀の川水（みづ）雪代ふ
夏油（ゲタウ）のそれの十なれば
その川ここに入ると云へ）

藍と雪とのうすけぶり

つらなる尾根のかなたより
夏油(ゲタウ)の川は巌截りて
ましろき波をながしきぬ

大意

（二つの川はここで合流しているんだな）
（いや、和賀川の雪解け水は
夏油川の雪解け水に比べると十倍にもなるので
夏油川が和賀川に入るのだと言いなさい）

藍色と雪とがまじってぼんやりと
連なっている尾根の彼方から
夏油川は岩を切り込むようにして
真っ白い波を流している

モチーフ

「〔冬のスケッチ〕」における連作の一部。北上川の支流の一つである和賀川に、さらに支流である夏油川が流れ込む地点でのスケッチを文語詩化したもの。和賀川を鉄鉱山の「赤」に象徴させ、石灰岩を切り裂いて流れる夏油川を「白」として書き分けるつもりだったように思える。鉱工業と農業（石灰岩を粉末にしたものが肥料となった）を対比させ、賢治は分が悪いながらも、農業に肩入れするつもりだったのだろう。

語注

二川　下書稿㈡で賢治は川の脇に「せん」とルビを振っているので「にせん」と読ませたかったのだろう。和賀川と夏油川の二つの川を指す。

和賀　和賀川のこと。北上川の支流で、奥羽山脈の和賀岳東部を水源とする。

雪代ふ　七五調で来ていることを考えると五音で読むことになるので「ゆきしろふ」になるのだろうが意味不明である。下書稿には「雪代」（雪が解けて川に流れ込む水）とあったことから「雪代」はほぼ確定できそうだが、「ふ」の意味がわからない（『宮沢賢治コレクション10』では「雪代(ゆきしろ)」とルビを振っている）。賢治は平仮名の「に」に変体仮名の「尓」を用いることもあり、「尓」と「不」では見分けがつきにくいことがある。ただ、原稿コピーを見ると「ふ」の方に近いように感じられる。「雪代に」の方が日本語としては自然だが、しかし、そうであったとしても次の行へのつながりを考えるとおさまりは悪い。

夏油の川　北上市の西南端にある天竺山北部を水源とする一級河川。夏油温泉、入畑ダムを経て和賀川にそそぐ。

評釈

「〔冬のスケッチ〕」の一部を文語詩化した下書稿㈠、黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡の二種が現存。

「〔冬のスケッチ〕」では、この一日の内容が文語詩「早春」「廃坑」「化物丁場」（いずれも「一百篇」）になり、ことに「早春」「廃坑」「〔二川ここにて会したり〕」では下書段階で「わが求むるはまことのことば／雨の中なる真言なり」というほぼ同意味の詩句が登場する（最終的に「早春」のみで採用されている）。

まず「〔冬のスケッチ〕」の第九葉（三連）から、連続していると言われる第一二葉（三連）までを見てみよう。

和賀川のあさぎの波と
天末のしろびかり
緑青の東の丘をわれは見たり
※
（許したまへ。）
この層はひどい傾斜です。
おまけに峡谷にはいりましてから
にはかに雪が増しました
※
ぎざぎざに（ここまで第九葉）
ちぎられし
どてのひまより
ひかりの天末
かはるがはるのぞきたり。
※
あすこが仙人の鉄山ですか、
雪がよごれて黄いろなあたり。
※
夏油の川は岩ほりて
浅黄の波を鳴らしたり
雑木と雪のうすけぶり
ましろき波を鳴らしたり。
※
いたゞきの梢どもは
つめたき天にさらされて
けさなほ雪をかむりたり。
※

雪融の山のゆきぞらに
一点白くひかるもの（ここまで第一〇葉）
恐らくは白日輪ならんを
ひとびとあふぎはたらけり。
※
げに和賀川よ赤さびの
けはしき谷の底にして
春のまひるの雪しろの
浅黄の波をながしたり。
※
和賀川の浅葱の雪代水に
からだのりだす栗の木ら
その根は赤銹によりて養はる。
※
ならび落つる
泉を見んと立どまりしとき
かれ葉かさかさと鳴り
透明の雨はふりきたる
雑木のこずえに（ここまで第一一葉）
日輪白くかゝり在はせど。
※
さっきのごりごりの岩崖で
降り出したのは雨ではなかったぜ
霙らしかったよ。　霙だぜ。
※
わがもとむるはまことのことば
雨の中なる真言なり
あめにぬれ　停車場の扉をひらきしに
風またしとゞ吹き出でて
雲さへちぎりおとされぬ。（第一二葉）

第一一葉の下部に「化物丁場」の文語詩化が試みられ、その次には「〔二川こゝにて会したり〕」の下書稿㈠、第一二葉の下部には「早春」の下書稿㈠が書かれている。それぞれの詩篇については『一百篇評釈』に任せ、ここでは「〔二川こゝにて会したり〕」の下書稿㈠の最終形態から読んでみたい。

こは和賀川ぞ赤さびて
けはしき谷のその底に
春はまひるを雪しろの
浅黄の波ぞながしける
雑木と雪のうすけぶり

つらなる尾根のかなたより
夏油の川は岩ほりて
ましろき波をながしくる

二川こゝにて会すとや
いなさにあらず和賀の水
夏油のそれの十なれば
かの川こゝに入るといへ

抹して西に送るべき
かの大理石のつらなりを
この川筋に求めんは
むなしきこととおもはるゝ

島田隆輔（後掲）は、「〔冬のスケッチ〕」には四段階の推敲・手入れがあり、最後の手入れは文語詩作成中のものと考えられることから、「抹して西に送るべき／かの大理石のつらなりを／この川筋に求めんは／むなしきこととおもはるゝ」は、大理石（石灰岩の一種）を抹する、つまり粉末状にして肥料とし、西（秋田方面）に送るという東北砕石工場時代の経験を読み込んだ昭和六年四月以降の記述だろうとした。

「〔冬のスケッチ〕」は稗貫農学校時代に書かれていたと考えられるが、推敲段階で新しい経験を読み込んだ詩に変えたということであり、さらに、その試みが「むなしきこと」、つまり秋田方面での肥料販売が見込めないことをも書いているのだという。

下書稿㈡になると、「げに抹すべき大理石の／層にもましていよいよに／わが求むるはまことのことば／雨の中なる真言なり」という連が挟み込まれる。この件りは先述のとおり「早春」（「一百篇」）に用いられることになるのだが、その際には「げにもひとびと崇むるは 青き Gossan 銅の脈／わが索むるはまことのことば／雨の中なる真言なり」であり、求めるものが大理石と銅で異なってはいるが、ともに鉱石であり、真言を求める自分とは違っている、という意味では共通である。とすれば、「かの大理石のつらなりを／この川筋に求めんは／むなしきこととおもはるゝ」というのは、肥料販売が見込めないという意味での「むなしさ」ではなく、真言ではない、ということによる「むなしさ」であると捉える方が適切であるようにも思える。

さて、下書稿㈡の手入れを見てみたい。

「雨の中なる真言なり」のフレーズを「早春」の方に移したためか、二つの川がここで合流するという方のアイディアを生かす方向で試みられているようだ。また、この地点で

測量する技師と少年のやりとりを主にした四連構成を考えていたようでもある。

①水増す川の崖上を
　こぞのすがれの萱すゝき
　おしわけ越えて杭木うち
　測鎖をたぐり進みしか

②「あなこゝにして川ふたつ
　つどふと誰か思ひけん」
　ポールたもてる少年の
　おどろくさまにさけびたつ

③たちまち技師が濁みし声
　「いな、和賀の川水雪代ふ
　夏油（ゲタウ）のそれの十なれば
　その川ここに入ると云へ」

④藍と雪とのうすけぶり
　つらなる尾根のかなたより
　夏油（ゲタウ）の川は巌截りて
　ましろき波をながしきぬ

最終的には付け加えた第一・二連を削除して未定稿の最終段階の稿となっている。文語詩には職場において先輩が後輩をたしなめたり、無視したりする「〔あな雪か　屠者のひとりは〕」（「五十篇」）や「巡業隊」（「一百篇」）などがあるが、その方向を取ろうとしたようである。

いずれの詩でも、邪険に扱われる後輩の側に賢治は立ち、先輩たちには批判的であるように感じられるが、ここでも賢治は若い測量士の少年に肩入れしていたことが想像される。小さな発見について声を出してしまったことが、先輩にたしなめられるわけだが、それはまた水量の多い和賀川ではなく、水量の少ない夏油川に肩入れしたいという、判官びいきめいた気分にもつながるものだとも考えられる。

そこで気づくのは、「〔冬のスケッチ〕」では、「和賀川」「しろびかり」「緑青」が同一の連に並べられることがあったが、文語詩になると和賀川は「浅黄」もしくは「浅葱」。そして「赤さび」「赤銹」とともに登場していることだ。夏油川の方も、「〔冬のスケッチ〕」では「浅黄の波」と「ましろき波」が同一の連に登場していたが、

「藍と雪」や「ましろき波」だけ登場するようになっている。

和賀川が赤であるのは、「赤さび」からも分かるように鉄の色だろう。和賀川は奥羽山脈の和賀岳東麓に発し、黄鉄鉱、赤鉄鉱などが産出された和賀仙人鉱山のあった和賀仙人を経て流れている。「〔冬のスケッチ〕」の第一〇葉には「あすこが仙人の鉄山ですか、／雪が汚れて黄いろなあたり。」とあり、また第一一葉に「赤さびの廃坑より／水しみじみと湧きて鳴れり。」ともある。『定本語彙辞典』には「仙人鉄山の赤鉄鉱は、結晶が美しく、鏡鉄鉱として産出することで名高い」とのことだ。

一方の夏油川は白である。林野庁の夏油自然観察教育林のＨＰ（https://www.rinya.maff.go.jp/）には「石灰華で白濁した夏油川」というキャプションと共に白く濁った夏油川の写真が掲載されている。夏油川の上流には国指定の天然記念物（昭和十六年指定）である石灰華があり、これは高さ十七・六ｍ、下底部二十五ｍの巨岩で、湧出する温泉に含まれる炭酸カルシウムが岩肌に付着したものらしい。夏油川にはこのように大量の炭酸カルシウムが流れるために白濁しているのだという。賢治が夏油川を「ましろき波」と書いたのは、この白濁を読み込もうとしたためではないだろうか。

こうして赤い川と白い川に書き分けているが、実際には和賀川の上流でも石灰岩の採取は可能であるらしく、東北砕石工場の鈴木東蔵に宛てた「貴工場に対する献策」（昭和五年初めから四月頃）にも、今後の石灰肥料の需給について「地質図と鉄道運輸図とを按じますと、貴工場としては、宮城県の大部分、岩手県の南半、（並に多分は山形県の北半）に宣伝なさるのが得策と存じます。将来の競争者としては、花釜線の鱒沢駅（恐らくは十年後）横黒線の仙人（これは大敵ですが恐らくは五年後）八戸線の鮫附近、東北本線の福岡附近、福島県の南部のある地点位のものでありませう」と書いている。

実際、夏油川の水を白いと書いたものはいくつか見つかっても和賀川を赤いとした記述は見つかっていない。また、白濁した水が流れていた夏油川にしても、和賀川との合流地点まで白濁したままだったのかは疑わしい。このあたりが未定稿に留めおかれた理由なのかもしれないが、鉱物への関心の高い賢治としては、川の水の色を書き分けた可能性はあったように思われる。

ところで「一百篇」に「市日」という文語詩がある。『一百篇評釈』では「丹藤」という地名が登場すること、また「硫黄山」（＝松尾鉱山？）が登場することから、東北本線の好摩駅近辺をモデルにしたものとし、北上川の右

岸の奥羽山脈側は松尾鉱山で賑わっているのに比べて、北上川左岸の北上山地側は農業に頼るしかない農村として描かれているのだとした。

『岩手百科事典』によれば、賢治が文語詩稿を推敲していた昭和七年、松尾鉱山の抗内水が赤川に流出するという鉱毒事件が発生し、鉱山側は一万一千五百円ほどの賠償金を払うに至ったという。この赤川とは、現在でも酸性の赤い水を流しており、ヒ素やカドミウムが含まれていたこともあるという。被害は盛岡市、紫波郡、稗貫郡などにも及び、鉱山はそのたびに見舞金などを支払ったというので、賢治ももちろん知っていただろう。それだけの被害を起こしながらも閉山になるのが昭和四十四年であったことを思えば、鉱山はかくまでに利益を生むものだったということだろう。

『一百篇評釈』では、「市日」がこうした松尾鉱山の光と影を前提に書かれているとし、近代産業で経済的には潤いながらも自然や人間に害悪を及ぼす鉱山の町と、貧しいながらも自然と共生しながら生き続けていく農村を比較しながら、賢治は貧しい農村の側に肩入れしているのだろう、とした。

本作においても、近代鉱工業と農業とを比較する意図を探ることができるのではないだろうか。すなわち和賀川の「赤」は鉄、つまり鉱工業の象徴であり、夏油川の「白」は、島田（後掲）が指摘したように農村を潤す肥料石灰の色、という図式である。

和賀川と夏油川の水量の差は、鉱工業と農業の差をアレゴリカルに示したもので、鉄鉱石が採掘され、甲州財閥の一人である雨宮敬次郎も目を付けていた和賀仙人鉱山に対して、大理石を抹する自分や鈴木東蔵の仕事、そしてその肥料を使う農業は経済規模でも十分の一ほどの価値しかない…そんな意味には取れないだろうか。

農業は鉱工業に比べて、天候には左右され、肉体的にも苦労が多く、収入も少ない。しかし、鉱工業がなくても死ぬ人はいないのに、農業がなければ人間は生きていけない。さらに言えば、鉱工業がもたらす災厄はあっても、農業の場合、それは極めて小さい。賢治としては「和賀の川水雪代ふ／夏油のそれの十なれば／その川ここに入ると云へ」とあっさり言い切ってしまうような測量技師の常識をなんとか覆したい。そんな思いがあったのではないだろうか。

浜垣誠司（「「二川こゝにて会したり」詩碑」「宮沢賢治の詩の世界」https://ihatov.cc/monument/068.htm）は、賢治が二つの川が合流することに特別な思いを抱いていたのではないかとし、「〔二山の瓜を運びて〕」）や、「〔川しろじろとまじはりて〕」と共に本作も紹介している。浜垣は

「これらの作品に共通するのは、二つの川の出会いに象徴させて、「二人の人間のかかわり」というものを描いているところなのではないでしょうか」と書き、妹トシや友人・保阪嘉内との別れ。「銀河鉄道の夜」のテーマに言及し、「「二つの川が合流して、そのあとずっと一緒に流れていく」という有り様は、言いようのない憧れをかきたてるものだったのではないでしょうか」とする。ただ、本作について言えば、「特別な思い」があったことは確かであるにしても、「二人の人間のかかわり」を描いた形跡が見出しにくい（あるいは二人の測量士が特別な思いを持っていた？）。今はまず、鉱工業と農業の対比ということで読んでおきたい。

先行研究

小野隆祥「賢治の和賀時代の恋」（『宮沢賢治 冬の青春』洋々社 昭和五十六年十二月）

島田隆輔「〔冬のスケッチ〕本文手入れ時期に関する覚書《文語詩稿》とのかかわりから」（「論攷宮沢賢治1」中四国宮沢賢治研究会 平成十年三月）

62 百合を堀る

百合を堀ると
ひと恋ひて
濁り田に
くるほしく

友らみな
入学の
われはしも
こゝろはも

森のはて
子ら云へる
はるかなる
汽車の音

このまひる
松森の
いとちさき
索めたる

唐鍬（トガ）をかたぎつ
林に行けば
白き日輪
うつりゆれたる

大都のなかに
試験するらん
身はうち疾みて
恋に疲れぬ

いづくにかあれ
声ほのかにて
地平のあたり
行きわぶごとし

鳩のまねして、
うす日のなかに、
百合のうろこを、
われぞさびしき

大意

百合を堀ろうとして　唐鍬を肩にかついで

ひと恋しい思いを抱きながら　林に行くと
濁った田の水には　白い日輪が
くるおしく思わせるように　映って揺れている

友人たちは皆　大都会に行って
高等学校入学のための　試験をするのだろうが
私と言えば　身体は病に冒されて
心は　恋に疲れ切っている

森の涯ての　そのどこなのであろうか
子どもたちが発した　声がわずかに聞こえ
遥か遠くの　地平線のあたりからは
汽車の音が　消えずに残っているようだ

この真昼間に　鳩の鳴き真似をしながら、
松の森の　薄く光が差す中で、
とても小さな　百合の鱗のようになった根を、
求めているというのは　なんと私は寂しい存在なのだろう

モチーフ

中学卒業後、賢治は岩手病院で蓄膿症の手術を受け、その後もチフスの疑いから入院を続けることとなったが、この時に初恋・失恋を経験し、また退院後は友人たちが高校受験の準備をしている中で、一人で悶々とし、林で百合を掘っているということを短歌に詠んでいる。本作はそれを文語詩にしたもの。この頃の賢治短歌には異様な感覚や頭痛の苦しみを描くものが多く、精神的に追い詰められたためのものだと解されているが、蓄膿症の手術後の頭痛によるものなのかもしれない。百合を初夏に掘るのは、観賞用としても食用としても季節外れであることから、漢方薬としての百合、すなわち余熱やいらいらを抑える効果を期待して百合を掘っていたのかもしれない。

語注

百合　ユリ属ユリ科の植物の総称。北半球のアジアを中心に広く分布するが、日本には十五種が自生し、七種は特産種。観賞用として栽培される他に、食用、また漢方薬の百合（ビャクゴウ）としても知られている。西洋では純潔や処女性のシンボルで聖母マリアをイメージさせる存在となって人気が高いが、日本でも貝原益軒が栽培品種が百をも超えるユリ人気について書いているという。日本産のユリは海外でも高く評価され「19世紀に日本のユリはヨーロッパに渡り、注目を浴びたが、なかでもジョン・ビーチ John Gould Veitch（1839—1870）が1862

年に導入してロンドンのフラワーショーに出品したヤマユリは絶賛され、1873年のウィーン万国博で商談が進み、翌々年から球根の輸出が始まった。明治末にはその数が2000万球にも達し、外貨を稼いだ」（「ユリ」『日本大百科全書』）という。賢治は、童話「ガドルフの百合」に「おれの恋は、いまあの百合の花なのだ」とあるように、恋愛や恋人を象徴させるものとして書いてもいる。

唐鍬　正しくは「とうが」もしくは「とうぐわ」。音数の関係で「トガ」のルビが振られたのだろう。もしくは方言か？　頭部が鉄で、柄のついたくわ。木の根を掘りおこす時などに使われる。

かたぎつ　「担げる」の古語。肩に乗せる、になうの意。

評釈

「歌稿〔B〕」の144～146から発展したもので、黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿一種が現存（タイトルは初めから「百合を掘る」）。

まず賢治が盛岡中学を卒業した直後の「大正三年四月」の項に収められた歌稿からあげてみたい。

144　濁り田に／白き日輪うつるなり／百合を堀らんと／林めぐれば

145　友だちの／入学試験ちかからん／林は百合の／嫩芽萌えつゝ

146　またひとり／はやしに来て鳩のなきまねし／かなしきちさき／百合の根を堀る。

賢治は盛岡中学卒業後、岩手病院に肥厚性鼻炎で入院し手術するが、高熱を発し、チフスの疑いで入院が長引く。ただ、耳鼻咽喉科医である仙石規（「〔血のいろにゆがめる月は〕」『宮沢賢治　文語詩の森　第二集』）によれば「実際名は「慢性副鼻腔炎」に間違いないだろう」ということなので、以下、慢性副鼻腔炎、すなわち蓄膿症で入院したものとして考察を進めたい。

賢治はこの時、看護師に恋心を抱くが成就することはなく、それが本作における「ひと恋ひて」や「恋に疲れぬ」であろう。

先にあげた短歌と同じ「大正三年四月」の項に収められた次の歌群にも百合が詠み込まれているが、初夏の嫩芽が萌え出ていた頃に林の中から掘り出したユリが（144～146）、その後、夏になって花が咲いた時の短歌なのかもしれない（192～196）。

192　いなびかり／くもに漲り／家はみな／青き水路にならび立ちたり

193　いなびかり／またぶらさきにひらめけば／わが白百合は／思ひきり咲けり

193[a]　194　夜の雨に／なかばいたみて／わが百合の／しづくひかれば／蚊も来てふるへり

194　いなびかり／みなぎり来れば／わが百合の／花はうごかずましろく怒れり。

195　いなづまに／しば照らされて／ありけるに／ふと寄宿舎が恋しくなれり。

196　夜のひまに／花粉が溶けて／わが百合は／黄いろに染みてそのしづく光れり。

この歌群は、かねてより童話「ガドルフの百合」の原体験であるとされてきたが、確かに「おれの恋は、いまあの百合の花なのだ。いまあの百合の花なのだ」という童話中の言葉は、ここにあげた歌につながるところが感じられる。

ところでこの「百合を堀る」という詩句であるが、別の未定稿にも登場する。「火の島（Weber 海の少女の譜）」とされるもので、ウェーバーの歌劇「オベロン」に出てくるアリア「人魚の歌」に載せて歌われたものだという。

海鳴りのとゞろく日は
船もより来ぬを
火の山の燃え熾りて
雲のながるゝ
海鳴り寄せ来る椿の林に
ひねもす百合堀り
今日もはてぬ

昭和四年、賢治は大島を訪ね、伊藤七雄・チヱ兄妹と会い、七雄の農芸学校設立などについて語り合ったという。「海鳴り」や「船」「火の山」は、大島をイメージしたものだろう。

昭和五十九年二月四日に新橋ヤクルトホールで開催された「宮沢賢治没後50年のつどい 賢治へのいざない」で賢治の教え子で、東京にある岩手県学生寮長を務めていた小原忠は、昭和三年七月ごろのこと、として次のように語っている（「対談 師賢治を語る」「賢治研究35」宮沢賢治研究会 昭和五十九年五月）。

それから二階に上がって、先生がオルガンを弾いて歌を歌いました。大島へ行って帰ったばかりだったらしいです。その後病気をして豊沢町へ帰って療養すると年譜にありますが丁度その頃で、オルガンで歌ったのは「火の島の歌」です。「海鳴りのとどろく日は／郵船もより来ぬを……。」

司会　あれはウェーバーか何かの？

小原　ええ、ウェーバーの曲です。これを先生は高い声で歌いました。そして歌うのも普通じゃないんですよ。ちょっとぼおっと上気しました。大島をしのんでいるみたいで、やはりあの伊藤チエ子さんを懐っていたんだと思います。（笑）ああいう上気した顔を見たことはありません。本当にその晩は不思議でした。電灯を消して、ムーン・ライト・ソナタじゃないけれども、硝子窓に月光が流れていました。ところがこれには後日物語がありまして、私が昭和四〇年に東京に出て来て間もなくだったと思いますが、ある日、突然、立派な、体格もがっちりした、品の良いおばあさんが私を訪れてそして自己紹介するには、「私、水沢出身で、伊藤と言います。といいました。用件は水沢の甥が大学に入るので入寮をお願いしたいとのことでした。それで私はかねて「三原三部」で知っていた「ひらかぬ花の蕾のひと」はこの人だと直感しました。それで「火の島の歌を御承知ですか」と。私はこの歌は好きなものですから、これを高い声で歌い出したら、伊藤チエ子さんは私と合わせてすっかり上手に正確に最後まで歌うではありませんか。あれは本当に不思議だと思いましたね。チエ子さんの言うには、本屋さんに行って、よく賢治の本をめくり立ち読みしてくるということでしたけれども、おそらくいま考えると、大島で「火の島の歌」とお二人がいっしょに歌ったんじゃないでしょうか。そうじゃないと、ああいう風に歌える筈はないと思います。とても立派なお人柄の方なんです。このお二人がいっしょになられたらどんなによかったろうと今でも思っております。

また、高木栄一（「回想 国分寺在（三原三部の人）」（「賢治研究57」宮沢賢治研究会 平成四年三月）も、昭和二十年の春頃、東京・国分寺に住んでいたチエを訪ねた際、「火の島の歌」と「大菩薩峠の歌」を歌ってくれたというので、小原の言葉を裏付けてくれている。つまり「未定稿」に収められた「「しののめ春の鴇の火を」」「大菩薩峠の歌」「火の島」は、いずれも大島と関わる文語詩であり、どれも歌曲であるということに共通点があることになる。

もちろん、二人の証言があったからと言って、賢治が大島で七雄やチヱと歌ったと断定することはできない。ただ、もし自らの初恋の思い出である「百合堀り」を、「伊藤さんと結婚するかもしれません」（森荘已池「「三原三部」の人」『宮沢賢治の肖像』津軽書房 昭和四十九年十月）とも語らせた本人の前で披露したというのであれば、どういう心境だったのだろうかという興味はある。残された下書稿㈠には「海鳴りの／とゞろく日を／　山の火も燃ゆる、」という詩句と共に「海鳴りの／とゞろく日／わが胸の火ぞ燃ゆる」とさえも書かれている。

一連の百合の短歌は初恋の相手である看護師を思い出してのものだとされてきたが、伊藤チヱへの思いも託されているということになる。ただ、解釈の上で重要なのは特定の人物に紐づけてあれこれ詮索することではなく、「ガドルフの百合」がそうであったように恋愛（あるいは孤独な境遇から、何かの対象を見つけて崇め敬う気持ち）の象徴として百合を登場させているとして読んでいくことではないか、とも思う。

さて、文語詩「百合を掘る」にもどろう。

「われ」は、林の中で百合を掘りながら寂しさを感じていたのだが、寂しい理由は、失恋だけによるものではなかった。中学を卒業した友人たちは、入学試験の準備をしているというのに、自分だけが取り残されてしまったからだ。

百合の嫩芽が萌える季節と言えば初夏だが、佐藤勝治（後掲）が書くように、大正三年当時の旧制高校の入試は七月であった。盛岡高等農林や師範学校などは四月入学であったが、旧制高校は七月に入試を行い、九月に入学していた。旧制高校が四月始まりになったのは大正十年からである。佐藤は『校本全集』の年譜の大正三年の項に「七月同級生の阿部孝、金田一他人、沢田藤一郎は一高へ」とあるのは誤りだとしている。『新校本全集』でも同じ記述になっているが、「一高受験のために上京した」ならともかく、「進学した」であれば誤りだ。

また佐藤は「歌稿〔A〕」の「56　学校の／志望はすてぬ／木々の青／疾みのまなこにしみるころかな」をあげ、実は賢治は進学を考えていたのに、思いがけない病気のために受験勉強ができず、かなしくも進学をあきらめたのではないか、としており、これは重要な指摘であるように思う。

賢治は商家の長男であるために進学を諦めざるを得なかったとされているが、短歌ではそのようには読みにくい。もっとも伝記の修正は、作品に書かれているからというだけでは、なかなかしにくいが、文語詩の第二連でも、「友らみな　大都のなかに／入学の　試験するらん／われはしも

身はうち疾みて／こゝろはも　恋に疲れぬ」というのだから、進学断念は家業が理由であるよりは「疾みて」であるように読み取れることから、事実がどうかはともかく、少なくとも文語詩を読む上では、伝記に引きずられすぎてはならないだろう。

さらに佐藤は、岩手病院を退院した後も、賢治が「脳病」とは書いても「鼻病」とは書いてないことから、賢治は退院後、むしろ症状が悪化したのではないか、としている。佐藤自身も蓄膿症の手術の後「余りの苦しさに死んだ方がましだとさえ思った」というほどであったと書いているが、これも重要な指摘であるように思われる。

蓄膿症（副鼻腔炎）は、副鼻腔の化膿性感染のことで、副鼻腔内に分泌物が溜まるために鼻が詰まり、嗅覚が低下するだけでなく、頭痛が続き、集中力が続かないために学業成績も低下するという。また「手術を行えば治るということではなく、後の治療が容易となり、そのことによって症状が軽快するということで」、さらに「副鼻腔は周囲に重要臓器が隣接しているため，ひとつ誤ると、眼や神経の損傷、出血などがおこるので、手術には熟練を要する」（「副鼻腔炎」『世界大百科事典』）という。そのため近年では抗生物質やステロイドも使用することも増えているようだが、もちろん当時はそのようなことはできない。

当時の一般向け医学書である林熊男『神経衰弱と蓄膿症：蓄膿症簡易根治法』（機山閣書店　大正十二年一月）によれば、神経衰弱という病名は有名だが、その多くは蓄膿症に由来するものだとし、また「他から見て何等の症候も見へなくて、頭脳の活動が十分でなく、憂欝であつたり、怒りつぽくあつたり、悲観的であつたり、学校の成績が良くなかつたりしたならば、先づ第一に蓄膿症を疑はねばならぬ」とも書かれている。

脳の異常を詠んだ短歌は岩手病院退院後に頻出している。が、佐藤の言う通り、鼻とは書かれていない。

148　すずきの目玉／つくづくと空にすかし見れど／重き
あたまは癒えんともせず。

162　なにのために／ものをくふらん／そらは熱病／馬は
ほふられわれは脳病

166　目は紅く／関節多き動物が／藻のごとく群れて脳を
はねあるく。

167　ものはみな／さかだちをせよ／そらはかく／曇りて
われの脳はいためる。

177　われもまた日雇に行きて／桑つまん／稼げばあたま
癒えんとも知れず。

177の歌について「読書会リポート」（「賢治研究116」宮沢賢治研究会 平成二十四年三月）で、「これは精神的なものではなくて、蓄膿症の手術のあと、まだ完全に治ってないからなのだろう」というコメントが無記名で書かれているが、たしかに失恋や友人たちに取り残されたことによるノイローゼだというわけではなく、蓄膿症による不調が重かったためだと考えた方が良いのかもしれない。もちろん、それが進学をあきらめさせた主因だったのかどうかの判断はできないが、失恋や友人たちに遅れる辛さの、根底に蓄膿症があった可能性については、もっと真剣に考えてもよいように思う。

あるいは蓄膿症の後に罹患したと言われるチフスもまた「語源は「ぼんやりした」という意味のギリシア語 typhos に由来し、高熱によって患者の精神状態がぼんやりしているということから臨床的に命名されたもの」（『世界大百科全書』）であったことから、この時の感覚を退院後になって詠んだ可能性についても考えておいてよいかもしれない。

さて、賢治本人に関する言及ばかりになってしまったが、ここで賢治がなぜ百合を掘っていたのかについて考えてみたい。

自生する百合を掘って植えることは、特に珍しいことでもなかったし、広く行われていたようだが、普通は秋に移植するのだという。美しく百合が咲いていたら、持って帰りたい気持ちにもなるかもしれないが、ここでは「嫩芽」が萌える時期である。

あるいは「百合のうろこ」、つまり百合の鱗茎を掘るのだと書いていたことを重視すれば、食用としてのユリを掘り起こそうとしたとも考えられる。ただ、百合根の旬は秋から冬だとされているようで、これもあまりふさわしくなさそうだ。

となるともう一つの百合の用法であるところの漢方薬としての百合を掘ろうとした、と考えることもできるのではないだろうか。「生薬百選19 百合（ビャクゴウ）」（白鳥奈緒美 https://www.yomeishu.co.jp/genkigenki/）によれば、「百合の効能は潤肺止咳以外に寧心安神（鎮静作用）で、この鎮静作用が主になっている漢方処方が百合知母湯です。これは百合と知母の二味からなり、熱病の回復期で余熱によるいらいらや動悸、寝つきが悪いなどの症状に用いられます」という。

大正三年の初夏、賢治を悩ませていたのは失恋と友達に遅れる辛さ。そして、それらの原因ともなり、現に今も「余りの苦しさに死んだ方がましだとさえ思」うほどの蓄

膿症の手術の後遺症に悩んでいたのだとしたら、薬としての百合を求めて、唐鍬を手に林に出かけた可能性を考えてもいいのではないだろうか。即物的にすぎるかもしれないが、案外、そんな可能性も考えてよいだろう。

もちろん、そこで賢治が全ての百合を漢方薬として煎じて飲んでしまっていたら先述の192～196までの短歌が詠まれなかったかもしれず、また「ガドルフの百合」も生まれなかったことにもなりかねないのだが…

先行研究

境忠一「初恋の歌と百合の花」（『宮沢賢治の愛』主婦の友社 昭和五十三年三月）
続橋達雄「百合を掘る」（『宮沢賢治・童話の軌跡』桜楓社 昭和五十三年十月）
吉見正信「初恋 その青春彷徨」（『宮沢賢治の道程』八重岳書房 昭和五十七年二月）
多田幸正「初恋と〈まことの恋〉」『宮沢賢治 愛と信仰と実践』有精堂 昭和六十二年七月）
佐藤勝治「賢治と胡四王山 火のごとくきみをおもへど 文語詩「丘」の解説・賢治の初恋」（「やさしい研究 賢治文学のよろこび2」寂光林 昭和六十二年十月）
小林俊子「詩歌」（『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）

63 国柱会

外の面には春日うららに
ありとあるひびきなせるを
灰いろのこの 館には
百の人 けはひだになし

台の上 桜はなさき
行楽の 士女さゞめかん
この館はひえびえとして
泉石を うち繞りたり

大居士は 眼をいたみ
はや三月 人の見るなく
智応氏はのどをいたつき
巾巻きて廊に按ぜり

崖下にまた笛鳴りて

東へと　とゞろき行くは
北国の春の光を
百里経て汽車の着きけん

大意

建物の外にはうららかな春の陽がそそぎ
ありとあらゆるひびきが聞こえてくるのに
灰色のこの建物には
多くの人がいるはずなのに気配もない

台地の上には桜が咲き
行楽にやってきた男女が声をあげているようだが
この建物はひえびえとして
庭園がかこんでいる

智学大居士は眼を患って
もう三ヶ月も面会を断っており
智応氏も喉を病んで
布を巻いて廊下に控えている

崖下では鉄道員による笛がまた鳴り
東方に響いて行くが
北国の遅い春の光を載せて
百里を駆け抜けた汽車が到着したようだ

モチーフ

「「文語詩篇」ノート」の大正十年四月のメモに基づくものと考えられることから、家出上京中の国柱会への心境を書くつもりだったのだろう。山の手にある上野公園は花見で賑わう一方、商人の町であった下町にある国柱会はひっそりしているとあるが、静かだった理由の一つには国柱会幹部の造反事件も影響していたのかもしれない。また、取材の数日前には父・政次郎が上京して、賢治と一緒に関西方面に旅行している。晩年の賢治は、弟子や息子といった反発する側の視点ではなく、反発される側から見直そうとしていたのかもしれない。

語注

台の上　武蔵野台地の末端にある上野台のこと。「上野の山」とも呼ばれる。江戸開城の際に天海上人がここに寛永寺を置き、徳川将軍家の祈祷所・菩提寺となったが、サクラの木が植えられたことから桜の名所となり、ことにソメイヨシノは有名で、花見の時期には減殺も多くの客が訪れる。

泉石　庭園のこと。大橋冨士子（後掲Ｂ）によれば、大正七年落成の国柱会館の屋上にあった庭園は、「もとの武家屋敷に残されていた樹木泉石に手を加え」られたもので、能舞台や千五百人収容の大広間もあったという。また田中芳谷（「国柱会館時代」『田中智学先生略伝』昭和四十九年三月　獅子王文庫）は「五百幾十坪の邸宅で、家屋二棟平屋建、大小十九室あって庭園の樹木泉石数寄を凝らし、園内には茶席二棟があるといふ屋敷がまえ」とする。

大居士　「居士」とは仏教に帰依する在家の男子のことで、ことに熱心な信者は大居士と呼ばれた。戒名にも多く用いられる。ここでは在家の日蓮宗の教団である国柱会の創始者・田中智学のこと。大橋（後掲Ｂ）は、智学の法号が「獅子王道人智学日謙大居士」であることによるとする。

智応氏　国柱会の講師・山川智応のこと。若くして智学の立正安国会に入り、多くの著作がある。賢治が五回読んだとも言われる国柱会の『本化妙宗式目講義録』の筆録を行った人物で、当時は「天業民報」の社長でもあった。智学の没後は国柱会を除名され、本化妙宗連盟を創立する。

東へと　大橋（後掲Ｂ）や大角修（後掲）は東にある上野駅に汽車が向かっているのだとするが、鶯谷駅のすぐ前にあった国柱会から上野は南南西になる。よって東北本線（山手線）の線路から東方となれば、国柱会の方角に笛の音が響いてきたということになる。ちなみに明治四十五年に開業した鶯谷駅は東北本線の駅でありながら、山手線の電車しか停まることはなく、東北本線はここを通過した。大正十年四月十一日の「読売新聞」（朝刊）には、花見客で混雑することを予想して「上野駅も予定を変へて十日の日曜から臨時列車の運転を初めたので臨時に四ヶ所の出札場を増設したに拘らず雑沓を極めた」というが、鶯谷駅の構内も多くの人が集まっていたのであろう。

評釈

黄罫（22　0行）詩稿用紙に書かれた下書稿一種が現存（タイトルは初めから「国柱会」。右肩に赤インクで㋐）。「「文語詩篇」ノート」の「26　1921」に次のようにあり、文語詩として制作済を示すと思われる赤インクの×が付されている。

四月

国柱会　外の面桜咲けるに
　この建物の中ひえびえとして
山川智応氏のどをいたはり
　行き来してある

国柱会　屋上庭園。並びに

一九二一年とは大正十年。花巻の自宅で店番をしていたところ、頭の上に日蓮の御書が落ちて来たことから賢治は上京を決意し、そのまま東京に滞在した年である。賢治は「上野に着いてすぐ国柱会へ行」（大正十年一月三十日関登久也宛書簡）くが、高知尾知耀からそっけない応対をされ、「あてにして来た国柱会には断られ実に散々の体でした」（一月三十日　保阪嘉内宛書簡）としながらも「こんな事が何万遍あったって私の国柱会への感情は微塵もゆるぎはいたしません」（同　関宛書簡）と感じたらしい。賢治はアルバイトと執筆をしながら東京生活を続けるが、国柱会で仕事をすることもあったようだ。

メモに田中智学の記載はないが、文語詩になって「眼をいたみ／はや三月　人の見るなく」として登場する。高知尾（「宮沢賢治の思い出」「真世界5755」真世界社　昭和四十三年九月）は、「私が非常に遺憾にたえないのは、この青年を田中智学先生に紹介する機会のなかったことである」とあるように、賢治が智学と会う機会はなかったようだが、家出上京時に賢治が智学と会うことができていないのは上田哲（後掲）が書くように、智学の眼疾のためではないらしい。智学は大正三年七月に片目を失明し、昭和三年にも眼疾が悪化することがあったが、大正十年には健康面での問題はなかったという。智学が三ヶ月、人に会っていないというのも疑わしく、大正十年は日蓮生誕七百年にあたり、国柱会の新聞である「天業日報」で布教宣伝に努めるよう連日書いており、賢治が上京する前日の一月二十三日には、国柱会で大々的な新年会が開催されるなどの行事もあったようだ。

山川智応については、大橋冨士子（後掲Ａ）が「このかたは、私もおぼえていますが、よく首に白いほうたいを巻いていました」と書いているが、メモにも賢治が書いてあるように、こちらの方は事実に基づく記述なのだろう。昭和四年九月刊の『日蓮上人研究　第一巻』（新潮社）の自序にも、「昨年生命脅威の難患に罹り」ともあることから、健康面に少し不安のある人物だったようだ。

国柱会は大正五年に鶯谷駅前（現在の台東区根岸一丁目）に移ったが、ここは「崖下にまた笛鳴りて」とあるように、上野台地の崖下にあたる下町で、東北本線（山手線）の線路は、この崖に沿って走っている。

一方、台地の上には徳川家の菩提寺であった寛永寺、そして帝国図書館、帝室博物館、東京博物館などの国家的な重要施設が立地する上野公園があり、ソメイヨシノが咲いて、多くの市民が訪れている。ただでさえ近代日本の最も華々しい場所の一つだが、一年のうちで最も華やいだ季節を迎えている。そんな日であったことから、国柱会館の静寂がことさら心に残ったのだろう。

本作の取材日は、大角修（後掲）も書いているように四月十日だろう。大正十年四月十一日の読売新聞（朝刊）には、「待ち兼ねたお花見は待ち兼ねた十日の日曜が絶好の花見日和となつたので上野飛鳥山を初め花の名所と云ふ名所は何処も彼処も人山を築き、一日の行楽の限りを尽した」とあり、その喧騒が崖の下の国柱会館まで聞こえた来たというのだろう。曜日から言っても、天候から言っても、桜の開花度合いから言っても、この日だとしていいだろう。

一連では「外の面には春日うららに／ありとあるひびきなせるを」と山の手の鮮やかさ、賑やかさを描くが、崖下の国柱会館はひっそりしていた。「灰いろのこの　館には／百の人　けはひだになし」とあるのは、日曜なので普段はいるはずの「百の人」がいないのだとも読めるし、日曜にもかかわらず「百の人」がいるのだけれどもとも読める。しかし、いずれにせよ、人の気配もない（かのように）、暗く地味なイメージを描いている。

二連でも山の手が「台の上　桜はなさき／行楽の　士女さゞめかん」と描かれるのに対して、「この館はひえびえとして／泉石を　うち繞りたり」と、地味で、暗く、寒々しい。

賢治が国柱会のみすぼらしさ、貧弱さを伝えたかったようにも思われそうだが、そうではなく、おそらく俗世での成功や華やかさに惑わされることがなく、正しい道を進もうという真摯な姿を描きたかった、ということだろう。

賢治は東大前の印刷会社でガリ版切りのアルバイトをし、帝国図書館に通い、また、上野公園で行われる国柱会の布教活動にも参加したと言われている。帝都東京の山の手を中心とした活動だ。しかし、印刷所は「着物までのんでしまってどてら一つで主人の食客になってゐる人やらたくさんの苦学生、辯（ベンゴシの事なさうです）にならうとする男やら大低は立派な過激派ばかり　主人一人が利害打算の帝国主義者です。後者の如きは主義の点では過激派よりももっと悪い。田中大先生の国家がもし一点でもこんなものならもう七里けっぱい御免を蒙ってしまふ所です」（大正十年一月三十日　関登久也宛書簡）と書いている。

また、帝国図書館では「図書館へ行っ見（ママ）ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或は「創作への道」といふやうな本を

借りやうとしてゐます。なるほど書く丈けなら小説ぐらゐ雑作ないものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもうかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴じたりしてゐるとお思ひですか。どんな顔もして居りません。／これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です。いくら字を並べても心にないものはてんで音の工合からちがふ。頭が痛くなる。同じ痛くなるにしても無用に痛くなる」（大正十年七月十三日　関登久也宛書簡）と書いており、自分自身が山の手のお世話になり、その文化に強く惹かれながらも、手放しで絶賛しているわけではない。もちろん大正十年の家出上京中の賢治と最晩年の賢治を軽々に比較するわけにはいかないだろうが、基本的な姿勢にあまり差はなかったように思われる。

満開の桜について、賢治は「〔或る農学生の日誌〕」で「けれどもぼくは桜の花はあんまり好きでない。朝日にすかされたのを木の下から見ると何だか蛙の卵のやうな気がする。それにすぐ古くさい歌やなんか思ひ出すしまた歌など詠むのろのろしたやうな昔の人を考へるからどうもいやだ」と書いている。ここには賢治自身の桜への思いも託されているのだろう。やはり同じ大正十年四月の桜を詠んだ文語詩に「隅田川」（未定稿）があるが、こちらは高等農林時代の恩師・関豊太郎と王子近辺の桜を見に行ったようだが、ここでも桜の美しさを愛でている様子はうかがえない。

さて、ここで考えておきたいのは、「「文語詩篇」ノート」には登場していなかった田中智学が、なぜ文語詩になって登場しているか、である。もちろん名前だけの登場であり、眼疾のために賢治と会うことができなかったというのも虚構（もしくは事実誤認）であったことについては上田（後掲）が指摘している通りである。

ただ気になるのが、「四月には突然智学の国柱会総裁退隠宣言が出され、一時会員に大きなショックを与えた。これは前年十一月国柱会幹部で獅子王文庫同人、智蔵・中村又衛が脱会し彼と同心の人々による造反行動が起こったことによる」と、上田（後掲）が書いているような事態があったことである。もっとも「その後会は、智学の指示に従って形式的には、〈公撰〉による幹部の〈合議〉という集団指導体制がとられ、対外的には山川智応を統理という名で代表者としたが、役職員はすべて智学による就任付嘱の手続きが必要であった。つまり名目的には退隠しても実質的には、死去まで智学が国柱会を統括指導していたということである」とのことなので、国柱会自体が大きく変わってしまうほどの事件ではなかったようだ。

ただ、この事件は「天業民報」を通じて一般の信者にも伝

えられていたというし、ちょうどその頃、国柱会に出入りしていた賢治が知らなかったはずはなく、少なからぬショックを受けたとするのが自然だろう。だとすれば、ひっそりとした国柱会の様子には、ただ賑やかな山の手とは一線を画し、孤高なあり方を示したかったというだけでなく、信頼していた弟子に裏切られるという智学の孤独が示されていたとすることもできるかもしれない。もっとも賢治は智学の眼疾のみ書いていたことを思えば、穿ち過ぎということになるかもしれないが…

そして、もう一つ気になるのが、やはり「「文語詩篇」ノート」には現れず、文語詩化されてはじめて登場する最終行の汽車の記述だ。「百里経て汽車の着きけん」には、当然、百里を隔てて花巻（実際には五百キロ）から上京した賢治自身の行動を振り返ってのものかと思われるが、国柱会に出向いた四月十日の、ほんの数日前、賢治は上野駅に父・政次郎を送りに行っている。

大正十年四月に父・政次郎が上京し、四月四日か五日には、伊勢、京都、奈良を賢治と二人で廻り、その後、賢治は父を上野駅まで送ったのだという。『新校本全集』の年譜には次のように書かれている。

古聖の法論を探り、諸派派生の由来を知り、冷静に研究を怠らぬよういましめた。今回は伊勢まいりの上、日本仏教の始祖ともいうべき聖徳太子・伝教大師の遠忌を幸い、実際に法灯の伝統に触れ、法華経と国柱会にとらわれすぎる点を反省させ、併せて感情の融和をはかろうとしたようである。従ってふたりとも帰正問題は全く口にせず、父としては自然な解決―賢治の帰国―を半ば期待したようであったが、その点では初志をまげず、父を上野駅に送り、丁重に頭を下げた。

ただの物見遊山の旅でも、聖地巡礼の旅でもなかったのは、四月二十七日に花巻川口町の町会選挙が控えていながら、政次郎がわざわざ上京したことに明らかだろう。長男の賢治に厳しかった父だとされるが、「公子」（「一百篇」）の下書稿㈠には「わが父は　わが病ごと／二たびの　いたつきを得ぬ」とも書かれるような息子思いの側面もあり、そこは直木賞受賞の門井慶喜が『銀河鉄道の父』（講談社 平成二十九年九月）に書いた通りだ。賢治の方も、大きく感情的に揺らぐところがあったかもしれない。

だとすれば、百里を経て上野駅に滑り込む汽車の音に自分の姿だけでなく、政次郎の姿もイメージさせていた可能性はある。

つまり賢治は田中智学と政次郎という二人の尊敬すべき

〈父〉たる存在を文語詩の段階になって登場させたということになる。一方は不肖の弟子、もう一歩は不肖の息子を抱えたための苦労を強いられる存在であった。メモの段階では、若き日の自分を思い出すだけであったかもしれないが、文語詩化を始める頃になって、〈父〉を登場させているのは、そろそろ自分も〈父〉として世の中を見る視点を獲得した、ということなのかもしれない。

ただ「〔われらひとしく丘に立ち〕」（「未定稿」）の評釈でも触れたように、「未定稿」とされた百二篇のうち、少なくとも十一篇が岩手県外での取材によることが明らかであることを思えば、内容の良し悪しはともかく、東京での取材であることが明白な本作が文語詩定稿の編集方針から外され、未定稿にとどめ置かれたのは、仕方のないことだったのかもしれない。

先行研究

上田哲「賢治と国柱会」（『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院 昭和六十年一月）
福島章「生涯と創造」（「「精神医学的病蹟学的伝記」の試み」『宮沢賢治 こころの軌跡』講談社 昭和六十年二月）
大橋冨士子A「「法華文学ノ創作」にいたる過程」（『宮沢賢治 まことの愛』真世界社 平成八年八月）
福島泰樹「上野桜木町」『宮沢賢治と東京宇宙』日本放送出版協会 平成八年十二月）
大橋冨士子B「国柱会」（『宮沢賢治 文語詩の森 第二集』柏プラーノ 平成十二年九月）
大角修「桜は青き夢の列」『「宮沢賢治」の誕生』河出書房新社 平成二十二年五月）
岩﨑仁「宮沢賢治と国柱会の軌跡」（「かまくら・賢治7」鎌倉・賢治の会 令和元年年六月）

64 「なべてはしけく よそほひて」

なべてはしけく　よそほひて
暁惑ふ　改札を
ならび出づると　ふりかへる
人なきホーム　陸の橋

歳に一夜の　旅了へし
をとめうなゐの　ひとむれに
黒きけむりを　空高く
職場は待てり　春の雨

大意

すべてをかわいらしく　装って
夜明けの頃の　改札口を
並んで出たところで　ふりかえると
人のいなくなったホーム　跨線橋が目に入る

年に一夜限りの　旅を終えた
乙女と少女の　一群れに
汽車は黒い煙を　空高くに吹きあげると
職場は彼女たちを待っており　春の雨がそそいでいる

モチーフ

「一夜の旅」からもどってきた「をとめうなゐ」が駅の改札口にいる様子を描いたものだろう。手入れ前には「なべての指は　荒みたり」とあったことから厳しい労働を強いられていたことがわかる。ただ、その一方で「フェルトの草履　美しくして」や「オペラバッグを　振れるあり」ともあって、彼女たちが精一杯にオシャレをしようとしていたことが強調されている。けなげな様子を詠みこもうとしたのかと思われるが、「歌ひめ」を詠んでいた可能性もある。

語注

はしけく　形容詞「愛し」の活用形で、いとおしい、かわいらしいの意味。

陸の橋　ホームにあった跨線橋だろう。現在、最古のもの（現役）は島根県の大田市駅のもので、明治二十三年製造。移築されたものとされている。ただ、具体的なモデルがどこの駅なのかはわからない。

評釈

黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿が現存。先行作品や関連作品の指摘はなく、メモ等にも関連するものも見当たらない。

沢口たまみ（後掲A）は、賢治の恋人を大畠ヤスだとし、「賢治とヤスは、花巻から別々に汽車に乗り、降り立ったどこかの町で待ち合わせをしていた」と書いている。さらに沢口（後掲B）は「オペラバッグも愛らしい女性と「一夜の旅」を終え、朝、偶然に乗り合わせたふうを装って、同じ汽車で帰ってきたというのです」とも書いている。

栗原敦（「「校本全集」で発表できなかったこと・小沢俊郎さんからうかがった話」（『宮沢賢治探究　上　思想と信仰』蒼丘書林　令和三年七月）が書いているように、賢

治が大正十年秋に花巻に戻ってから、交際を始めた女性がいたのは確かなようだし、「未定稿」には、この交際のことなのか、自分自身の恋愛体験を元にしたとも思われる詩も多く収められている。なかでも「セレナーデ　恋歌」（「未定稿」）は、花巻駅あたりで恋人を待っていたのだとも読み取れそうな内容であることから、沢口の書いているように、本作も恋愛詩である可能性が全くないというわけではない。

ただ、栗原（後掲）が「いちばんありそうなのは製糸工場の女工さんたちなどが、美しく着飾って出掛けた慰安旅行から戻ってきた駅の場面などでしょう」とし、「ここには賢治と女性の逢い引きの場面を連想させる要素はありません」としている方が納得できる部分が多い。そもそも賢治が未婚の女性と一夜を過ごし、同じ汽車に乗って朝帰りしてくるなどということが、当時の花巻で、名家の長男であった賢治が取るということは、きわめて考えにくい。

下書稿の初期形態から読んでみたい。

フェルトの草履　美しくして
なべての指は　荒みたり
さもいたいけの　をみなごの
オペラバッグを　振れるあり
暁惑ふ　改札を
ならびすぐると　おのおのに
人なきホーム　陸の橋
まなこさびしく　ふりかへる

まだ早暁の駅の改札に、をみなごたちが、美しいフェルト製の草履を履き、オペラバッグを振っていたということのようだ。

フェルト草履とは「はいた感じがよろしく、令嬢向の派手なものとしては、フェルトを前二枚後ろ三枚にして高くし、本南部表を付けた御幸草履がすっきりして一番喜ばれます。但し安物には布を貼つたものもありますが、之は全くの見掛本位でありまして、すぐ汚れたり破れたりいたします」（青木良吉「足袋と履物」『最新実用染織叢書 第11篇 衣服と整容法』大日本文化研究会 昭和三年十一月）といったものであったらしい。ただ「近頃フェルト草履が倦かれて、キルク草履が好まれて参りました」ともあり、「読売新聞」の記事にも「一時ははいて気持ちよいフエルト草履が全盛であつたがフエルトはポク／＼してお天気のよいときには砂、ほこりをあげるし雨のときには泥道を歩くことが出来ず、おまけに水を吸ひ込んで重くなると始末

に負へぬ、そこでだん／＼コルクに圧倒され出した、コルク草履は穿き心地はフエルトより少し悪いが雨にもお天気にも穿くことが出来、そして値が安い、フエルトは上等品七八円するがコルクは四五円で特別上等品が買へそれでフエルトより長く穿くことが出来る、便利で経済だから中等以下のフエルトを穿くよりこつちがすべて都合がよろしい」（大正十五年十一月十二日（朝刊））とあった。

また、オペラバッグについては「手提用の袋としては、之迄は、信玄袋や合財袋などが最も多く行はれて居ましたが近頃その代りに、オペラ・バッグやバニチー・ケースが、大分勢力を得て来ました」（青木良吉「オペラバッグとバニチーケース」前掲書）という。洋装にも和装にも、それぞれ使われ、「実用と云ふことよりも、装身具の一部として考へられる様になつて参りました為に、形も小型に、携帯の仕方も大変上手になつて参りました」という。最新流行だったようだが、バッグを「振れる」という形容を見れば、ここにあるように、物を持ち運ぶためであるよりも、装身具としての側面が強かったようで、かなりオシャレに気を使っていたことが伺える。

ただ「なべての指は　荒みたり」とあることから、精いっぱいに当世風のオシャレをしてはいるものの「いたいけな」様子であったのだろう。

複雑な過程を経た後の手入れで、次のように変わっている。

なべてはしけく　よそほひて
暁惑ふ　改札を
ならび出づると　ふりかへる
人なきホーム　陸の橋

歳に一夜の　旅了へし
をとめうなゐの　ひとむれに
黒きけむりを　空高く
職場は待てり　春の雨

新しく加わった情報としては、「年に一夜の　旅了へし」ということ「職場は待てり　春の雨」というあたりだろう。手入れ前は「なべての指は　荒みたり」というように彼女たちが「いたいけ」な存在であることが肉体的に描かれていたが、手入れ後になると、彼女たちが社会的に描かれることとなり、同じ職場の少女たちが、年に一度きり許された「旅」から戻ってきたことが描かれるようになっている。

ただ、その「旅了へし」だが、時間は「暁惑ふ」とあることから、一夜の旅行などと言いながら、夜明けには職場のある町に戻ってきているので、泊りがけの旅行に行ったというより、車中泊で朝方に着いたというのが実際だったのかもしれない。

「陸の橋」とあるのは陸橋で、おそらくは跨線橋のことを言うのであろう。明治時代から跨線橋はあったが、岩手県下にどのくらい普及していたかは定かでない。福島泰樹（後掲）は、東京の鶯谷駅の跨線橋ではないかとするが、本作の前に鶯谷駅前の国柱会を舞台とする「国柱会」が置かれているための連想だという。「未定稿」は賢治が意図的な連作を感が憎いので少し無理はあるにしても、鶯谷であると限定しなくても、東京が舞台だったと考えることは可能かと思う。というのも、流行していたフェルトの草履やオペラバッグを持った若い女性たちが、明け方の改札から出てくるというのが、岩手を舞台にしていたとすると、いささかハイカラすぎるようにも思われるからだ。

「読売新聞」のデータベースで「フェルト草履」を検索してみると、大正十五年四月十二日（夕刊）に銀座松屋の「特製フェルト草履」が「軽く柔かくお召し心地よき春の優美なお履物」とされており、「一足 三円五〇銭ゟ」とある。「オペラバッグ」については、いささか古いが明治四十二年三月十九日（朝刊）の記事に「流行の袋物」の一つとして紹介があり、「値段三円五十銭より六円迄」と出ていた。『物価の文化史事典』によれば、大正十二年の東京の公立小学校の初任給が五十円ほど、明治四十年が十二円ほどなので、これを現在の初任給約二十万円と比較すれば、現在の価値にして、フェルト草履は一万四千円、オペラバッグは五万八千円から十万円ということになる。

時代は下るが、昭和四年九月六日の「読売新聞」（朝刊）に、フェルトの特等品だと四円五十銭、一号品で二円五十銭、二号品では一円七、八十銭。コルクだと特等品で三円位、一号品で一円五十銭、二号品で一円内外だという。しかし、二号品では「何れも持ちが悪く実用向ではありません」と書いてあるのが見つかった。いずれにせよ、栗原（後掲）が書くように「製糸工場の女工さんたち」の持ち物であった可能性は高いにせよ、少し豪華すぎるようにも思われる。ことに彼女たちが年に一度しか旅に出ることができず、「なべての指は　荒みたり」とあることを思えば、着飾ることも仕事のうちであった遊廓などで働く女性たち、「歌ひめ」であったのではないか、とも思えてくる。

賢治は「五十篇」の「〔夜をま青き蘭むしろに〕」「雪の宿」、「一百篇」では「歯科医院」「〔燈を紅き町の家

より」」などで芸娼妓、酌婦などの夜の仕事で生きる女性たちを描いていることを思えば、突飛すぎる発想ではないだろう。

賢治が描いたのが「女工」だったのか「歌ひめ」だったのか。また、岩手県内だったのか、東京だったのか。下書稿一枚が残されているだけの状況で、これ以上のことを推測するのは難しい。ただ、荒れた指や一夜限りの旅から早朝に職場の町に戻ってくるという状況をたどっていけば、沢口（後掲A、B）の書くように恋愛詩であるとするより、幸福であったとは考えにくい状況の女性たちを思って詠んだ詩であったと考える方が自然であるように思える。

先行研究

福島泰樹「上野桜木町」『宮沢賢治と東京宇宙』日本放送出版協会 平成八年十二月）

沢口たまみA「きみにならびて野に立てば 賢治の恋」（『宮沢賢治 雨ニモマケズという祈り』新潮社 平成二十三年七月）

沢口たまみB「一夜の旅」（『新編 宮沢賢治 愛のうた』盛岡出版コミュニティー 平成三十年四月）

栗原敦「きみにならびて野にたてば 賢治の恋」の〈詩〉読解のこと」（『宮沢賢治探究 上 思想と信仰』蒼丘書林 令和三年七月）

65 「雲ふかく 山裳を曳けば」

雲ふかく
山裳を曳けば
きみ遠く去るにかも似ん

丘群に
日射し萌ゆれば
きみ来り訪ふにも似たり

大意

雲が深く
山が裳裾を引きずるようにしているのは
君が遠く去って行ってしまう気持ちに似ている

丘群に
日が差し込んでくるのは
君が自分を訪ねて来てくれた時の気持ち似ている

モチーフ

羅須地人協会時代の現金収入が乏しい頃にメモされた詩篇に発する文語詩。一つの山を見ながら曇れば恋人が去るように感じ、晴れると恋人がやってくるようだと書いており、『春と修羅』所収の「岩手山」をも彷彿とさせる。

語注

山裳　『定本語彙辞典』には「表現上の賢治独特のレトリック」として分類され、「山裾もそうだが、さらに山裾を着物の裳すそに見立てて言う」とある。赤田秀子（後掲）は「賢治の造語で、衣装の裾に見立てた山裾のこと」とする。「山裳」の用例は本作のみのようだ。「裳裾」という言葉があるが、「裳の裾。衣服の裾」（『日本国語大辞典』）のことで、「裳」には「衣服の下の縁」（同）を指す「裾」の意味はない。「裳」とは「古代の上流階級女子がはいたロングスカート状の衣服、および平安時代以降女房装束（十二単）に着装された服具。古墳時代の女子人物埴輪にあらわされた上下二部式衣服の腰衣が、《古事記》に見られる裳に当たると思われる」（『世界大百科事典』）とある。山が裳を曳く様子が、「きみ遠く去るにかも似ん」というのは、「きみ」の履いている袴、あるいはスカートのことと解することもできるのではないだろうか。「やますそ」ではなく「やまも」を選んだのは、ただ音数のためではなく、女学生の袴や女性のスカートを重ねようとしたと解するべきなのかもしれない。賢治が文語詩に書いた恋愛詩は、どこまで実体験に遡っていいのか判断しにくいが、一つの案として書き留めておくことにしたい。

評釈

「孔雀印手帳」に記された下書稿㈠（タイトルは「ロマンツェロ」）、黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（藍インクでⓉ）の二種が現存。先行作品や関連作品は示されていない。ただし、賢治は「ロマンツェロ」とタイトルを付けた作品が八篇あり、うち口語詩が一篇、文語詩七篇（そのうちの一篇は定稿にも未定稿にも数えられていない。詳しくは「Romanzero 開墾」（「未定稿」）の項を参照）がある。

賢治は大正十年に東京への家出上京から戻ってから出会った女性と交際していたと言われており（栗原敦「「きみにならびて野にたてば 賢治の恋」の〈詩〉読解のこと」『宮沢賢治探究 上 思想と信仰』蒼丘書林 令和三年七月）、その経験から詠まれたものかとも思われるが、文語詩の性質から考えて、全てを実体験だけによるものとすべきではないだろう。

下書稿㈠から見てみたい。

車窓のかなた北のはて
雲ふかき山裳をひけば
きみ遠く去るにも似たり
ひわいろなせる丘群に、
こぼれし日射しなまめば
きみきたり訪ふにも似たり
あゝ青木　青木のむらに
かくこうはをちこちすだき
水置ける稲田にはいま
耕の馬あえぎ行けるを

後半については下書稿㈡でも採用されるが、手入れ段階で削除し、その後に㋐が付けられたようだ。実際の状況を描くより、「雲→君が去る気分」「日射し→君が訪れる気分」という対句性を目立たせる詩にしようとしたようである。

「孔雀印手帳」は昭和三年に一部が使われた後、昭和六年になって使用が再開された手帳で、東北砕石工場関連のメモと詩作メモが交互に書かれている。童話「北守将軍と三人兄弟の医者」の構想メモの他、詩篇が数篇あり、文語詩に改作されたものとしては、本作の他に「賦役」（「一百篇」）、「〔夜をま青き藺むしろに〕」（「五十篇」）がある。「賦役」は下書稿㈠にあたるものが書かれているが、「〔夜はま青き藺むしろに〕」は大正九年の夏、稗貫郡で土性調査をしていた際の慰労会に取材した作品で、下書稿㈢にあたるものが書き付けられていることから、本作の取材時期は、必ずしも昭和三年、あるいは六年以降であるとは限らない。散逸してしまった下書稿の存在も想定しておくべきかと思う。

冒頭の「車窓のかなた北のはて」という言葉から考えると、北に向かって走る東北本線を舞台としたものではない。となれば、東西に走る岩手軽便鉄道か橋場線、横黒線あたりがモデルのようだが、車窓から北方の遠くの山を見渡すとなると橋場線から岩手山を見てのものかもしれない。そして『春と修羅（第一集）』の「岩手山」との関連についても考えることができそうだ。

そらの散乱反射のなかに
古ぼけて黒くうごくるもの
ひかりの微塵系列の底に
きたなくしろく澱むもの

これを関連作品だというのは大げさに過ぎるかもしれないが、短い詩の中で岩手山の二つの姿、すなわち「古ぼけて黒く」と「きたなくしろく」に描き分けて見せており、車窓の彼方に見える岩手山に雲がかかるのと、日が差すのとで自分の心象が変わることを書いた本作は、アイディアにおいても共通するところがある。ただ「一百篇」に収められた「心相」が「岩手山」の文語詩化と思われるほどにアイディアと語彙に共通性があることから（『一百篇評釈』）、本作が未定稿にとどめ置かれたのかもしれない。

先行研究

小倉豊文「きみにならびて野に立てば」（『「雨ニモマケズ手帳」新考』東京創元社 昭和五十三年十二月）

佐藤通雅「二冊の手帖」（『宮沢賢治 東北砕石工場技師論』洋々社 平成十二年二月）

赤田秀子「文語詩 語注と解説」（「クラムボンの会二十周年記念林洋子ひとり語り 賢治の詩・タゴールの詩」クラムボンの会 平成十二年）

66 僧園

星のけむりの下にして
石組黒くひそめるを
さもあしざまに鳴き棄てつ
かくこう一羽北に過ぎたり

夜のもみぢの木もそびえ
御堂の屋根も沈めるを
さらに一羽の鳥ありて
寒天質（アガーチナス）の闇に溶けたり

大意

天の川の下に
石組みが黒く積まれている中を
いかにも悪意を込めたように鳴き棄てて
カッコウが一羽北に向かって飛んでいく

夜の闇に向かってモミジの大木は聳え
御堂の屋根も地の底に沈んでいるが
さらに一羽の鳥がいて
コロイド質の夜の闇の中に溶けていった

モチーフ

下書稿㈠では「僧園幻想」とタイトルが付けられ、体が伸びゆき、石組が動き、我が身を「鬼の堺に堕ちし」とも感じる幻想が詠まれていた。最終形態の下書稿㈡になると、タイトルが「僧園」に改められ、作中にあった幻想の部分が削除される。賢治が幻想部分を削除したのは、鳥の声、視覚の変容、伸びていく体といった賢治作品における幻想を描写する際のアイテムが並んでおり、他作品と似てしまうことを避けたためかもしれない。

語注

僧園　修行のために多くの僧侶が集まる施設のこと。梅田えりか（後掲）は「ここでは建物そのものというよりは、伽藍を中心とした清浄閑静な境内をいう」とし、島田隆輔（後掲）は、賢治が参禅したことで知られる盛岡市北山の曹洞宗・法恩寺あたりを想定する。が、平泉にある毛越寺と一致する点が多く、モデル地の候補としてよいように思う。

星のけむり　梅田（後掲）は「天の川のこと」とするが、その通りであろう。

石組　梅田（後掲）は「日本庭園の造園技法のひとつ。自然石を組み合わせて配置したもの。ここでは僧院の庭園に置かれた石、または石組を配した庭そのものをいう」とするが、島田（後掲）は、「境内を囲む石組みの低い塀とみることも可能で、庭園と固定しないでおく」とする。ただ、平泉にある毛越寺（もうつうじ）の大泉が池には石で作られた出島（出島石組（でじまいわぐみ））と、その先端にある飛島（池中立石（いけなかたていし））が有名で、その周囲には杉の大木があり、池の向こうには常行堂が見え、その脇にはモミジの大木があることからも候補地として考えてよいように思う。したがってここでは「いわぐみ」と読むことにしたい。

かくこう　ホトトギス科の鳥で、賢治作品にはよく登場する。梅田（後掲）はカッコウが日本ではホトトギスと共に死の国・異界との往来者とされることを指摘するが、島田（後掲）は、万葉学者・多田一臣がカッコウを「魂（恋心）の使者」としていることから、妹トシの声として読み解こうとする。

御堂の屋根　平泉の毛越寺を舞台としていたとすれば、出島石組から池を越えた対面にある常行堂（享保十七（一七三二）年再建）であろう。

寒天質（アガーチナス）　微細な粒子が気体・液体・固体に分散している状態のこと。『定本語彙辞典』には「賢治の存在哲学、宇宙観の中核をなす概念の一。特に賢治は気圏をコロイド溶液（媒質が液体のもの）として表現した」とある。文

語詩では「車中〔一〕」（「五十篇」）や「軍事連鎖劇」（「一百篇」）に「寒天光」とする例がある。

評釈

黄罫（22 0行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠（タイトルは「僧園幻想」。鉛筆で㋐）、その裏面に書かれた下書稿㈡（タイトルは「僧園」）の二種が現存。先行作品や関連作品についての指摘はない。

語注にも書いたように、本作の舞台として平泉の天台宗・毛越寺を考えてよいのではないかと思う。「僧園」とは、『日本国語大辞典』によれば「修学のために僧徒の集まる学園。また一般に、寺院のことをいう」とあることを重んじれば、花巻周辺にそうした大規模な寺院は見当たらず、島田隆輔（後掲）の書くように、盛岡の報恩寺あたりならイメージに合いそうだが、やはりスケールが小さい。父と廻った奈良や京都を舞台にしている可能性もあろうが、岩手県内で候補を探してみると、「石組」「もみぢの木もそびえ」「御堂の屋根」といった言葉から、毛越寺と共通する点が少なくない。

毛越寺は嘉祥三（八五〇）年、中尊寺と同時に慈覚大師円仁によって創建されたという。焼失し、荒廃していたところを奥州藤原氏により再興。『吾妻鏡』によれば「堂塔四十余宇、禅房五百余宇」あったというので、「僧園」の名にもふさわしい。

賢治は平泉の中尊寺をタイトルにした「中尊寺〔一〕」（「一百篇」）、「中尊寺〔二〕」（「未定稿」）という文語詩を書いており、年譜によれば、中学時代の明治四十五年五月二十九日に修学旅行で平泉を訪ねている。この時に毛越寺も訪ねており、大正十二年三月にも、農学校の同僚だった堀籠文之進と一ノ関で歌舞伎を見物し、平泉駅の待合室で一睡するということもあった。

カッコウが鳴いていたことからすれば、五月に修学旅行で訪れた時の経験を元にしたとすべきかもしれない。「歌稿〔B〕」に「9 桃青の／夏草の碑はみな月の／青き反射のなかにねむりき。」とあるが、桃青は松尾芭蕉の号であり、毛越寺に「夏草や兵共が夢の跡」の句碑があるので、ここを訪ねたのは確実だが、そのすぐ前にあった大泉が池や出島石組も、この時、目にしたであろう。

小川達雄（「中尊寺の鐘」（『盛岡中学生宮沢賢治』河出書房新社 平成十六年二月）によれば、盛岡中学の一行は、当初、平泉で下車する予定はなかったが、急遽、訪問することとなり、午後四時五十四分に平泉に到着。中尊寺を訪ね、その後で毛越寺を訪ねたという。ただ、「旅行隊が毛越寺の境内にいたのは、せいぜい長くても五分ばかりの間であっ

たらしい。大泉ヶ池の周囲をめぐることもなく、洲浜と出島、石組等と、そのかみの伽藍の位置を示されて見回した、その程度であったろう」とする。阿部孝が盛岡中学校の「校友会雑誌20」（岩手県立盛岡中学校校友会雑誌部　大正元年十二月）に掲載した「四年級旅日誌」には、「かけ足で帰路をステーションに急いで又汽車に乗る」とあるとのこと。盛岡には臨時列車で二十三時二十五分に着いたらしいことから、小川は「およそ平泉を午後八時二十分頃に出たはずである。毛越寺から平泉駅までは八百メートルほどで、その遅い時刻の汽車には、毛越寺を八時過ぎに出ても間に合う。しかし、そんな暗い時間になるまで、一行が廃墟の毛越寺にいるはずがなかった」とし、「盛岡発上り一関行二三二列車、平泉発六時二十二分というのがあった。さては、これに乗って始発駅の一関まで戻り、そこで駅弁かなにかで夕食を済ませて休息したのであろうか」とする。毛越寺で賢治が幻想を見たにしても、修学旅行中の五分程度の時間では、さすがの賢治でも難しいのではないだろうか。

しかし、駅弁を食べるために（？）、わざわざ一関に戻るのは不自然だ。臨時列車の停車駅は分からないが、もし平泉に停車したのであれば、まったく時間と運賃（平泉・一関間の往復料金）の無駄遣いであるように思う。

斎藤隆三（「毛越寺と無量書院跡」『美術行脚　古社寺めぐり』博文館　大正十年九月）は、当時の毛越寺について、「其境内の広きこと、その昔五百坊存在したといふのも直に諾かせる、それが今では至る所落莫として在りし址には草茂み、名ばかりの坊舎には養蚕などに忙はしげの男女を見るなど、変り果てたさまは寧ろ懐旧の情の切なるを覚えしむる」と書いている。無駄に一関まで往復するのも不自然だが、このような廃墟に八時まで残り、わざわざ「かけ足で」駅に向かったというのも不自然かもしれない。しかし、修学旅行の予定を急遽変更して平泉を訪ねることに変えたり、駅までかけ足をさせるような、今日からすれば考えにくいような修学旅行をしていたことからすれば、毛越寺の暗闇の中で握り飯などの食事を取らせ、集合時間に遅れる者がいたなどの理由によってかけ足で駅に向かったということは、十分に考えられよう。また、そうであれば賢治が毛越寺で幻想を見るだけの時間も十分にあったことになる。

斎藤（前掲書）は、「一心三観の台密の奥旨を型つたといふ大泉池も昔のまゝに残つて居る」と書いているが、毛越寺の庭園は浄土庭園として名高い。下書稿㈠には、自分の幻想について「鬼の堺にやわが堕ちし」と怪しむ言葉が綴られているが、毛越寺の浄土庭園を前にしての詩であったとした

ら、仏から人間を経て、修羅、畜生、餓鬼と身を落とす幻想を見て、それを詩に書いた可能性がなくもない。

長々とモデル地候補である毛越寺について書いてきたが、文語詩におけるモデル地の詮索は、読解のための重要なキーになる可能性があるが、すべてが虚構であったり、いくつかの経験が重ね合わされて描かれている場合も少なくない。誤った先入観を持ってしまう可能性もないとは言えないので、ここをモデル地であると断定してしまうことについては慎みたいと思う。

さて、下書稿㈠の手入れ形から見ていきたい。

星のけむりの下にして
杉むら黒くひそめるに
いとあしざまにうちなきて
かくこう北に截りすぐる

夜のもみぢの木もそびえ
御堂の屋根も沈めるに
あやしく身うちのびたつは
鬼の堺にやわが堕ちし

星のめぐりの下にして
石組怪しくうごめきつ
わが身はいとゞのびたちて
はてはいづちと知らぬらし

更に一羽の鳥ありて
わがまん円のぬかの上
無方のかなたうちけぶる
寒天いろの夜に溶くる

梅田えりか（後掲）は、これについて次のように解釈する。

――啼き棄てられたカッコウの「あしざま」な声が、佇む者の内にひどく残響する。閑静な僧園の暗中で「わが」身体は怪しく伸びたち。「鬼の堺」…この世ならぬ異空間へと「堕ち」たのかと慄く。この「わが身」が異様に伸びたつ身体膨張の幻覚は、その果てがいずれの方向に及ぶのかすらわからない、ひどく不安な恐怖体験である。「一羽の鳥」が、のびたった者の額の真円上をゆき、遥か彼方、けむって判然としないおぼろな寒天色の夜へ溶けて行方は知れない。

そして「下書稿㈡では、これら一人称による異常感覚体験は抹消され、表題からも「幻想」という語が消えて「僧園」と改められる」とし、賢治は「兄妹像手帳」に「わがうち秘めし／異事の数、／異空間の断片」と書かれていることなどから、自らの経験について沈黙することを選んだのだと考える。

また島田（後掲）は、賢治の文語詩ではタイトルが簡略化されると、詩句の方で、それを補うかのように詳述されることがあるが、本作の場合は、タイトルが「僧園幻想」から「僧園」に簡略されながら、詩句の方でも「あやしく身うちのびたつは／鬼の堺にわが堕ちし」という幻想の部分が消えており、「これは陥った事態を「幻想」としてでなく、修行中の惑いとして厳にとらえなおした、ということなのかもしれない」とし、「そうであれば、眼をそむけることなく向かいあわなくてはないない我が身なのだ、とする自覚が込められてくる、といえよう」とする。

梅田も島田も「石組怪しくうごめきつ」については言及していないが、下書稿㈠の初期形態だと「身うちのびたつ」ことは描かれていないが、石の群れが動くことだけが書かれている。

星のけむりの下にして
石組怪しくひそみたり
夜のもみぢの木もそびえ
御堂の屋根も沈めるに
げにあしざまにうち啼きて
かくこうそらを截りすぐる

星のめぐりの下にして
黒くうごめく石の群
更に一羽の鳥ありて
わがまん円のぬかの上
無方のかなたうつけぶる
寒天いろの夜に溶くる

どちらが実際の経験に基づいていたのか、判断のしようはないが、おそらく入眠幻覚のような体験を描いていたのだろう。

ところで「五十篇」に収められている「民間薬」は、農作業の合間に仮眠した際、夢の中で石の匙を持った巨人が登場し、ネプウメリなる薬草を食べよ、と勧められるという内容の文語詩だ。

たけしき耕の具を帯びて、羆熊の皮は着たれども、
夜に日をつげる一月の、　干泥のわざに身をわびて、
しばしましろの露置ける、すぎなの畔にまどろめば、
はじめは額の雲ぬるみ、　鳴きかひめぐるむらひばり、
やがては古き巨人の、　石の匙もて出できたり、
ネプウメリてふ草の葉を、薬に食めとをしへけり。

寝ころんだ際の「ぬかの上」、つまり額の上に広がる空を書き、鳥の声が聞こえ、視界が変容するのが共通している（石組みが動いたり、また、雲が変化したように感じたのだろう）。「僧園幻想」に「あやしく身うちのびたつ」経験が書かれていたが、これは「巨人」に重なっているように思われ、やはりこれも共通している。

「春と修羅（第二集）」の「二九　休息　一九二四、四、四」でも、ヒバリの声と巨人になった入道雲が登場している。

中空（なかぞら）は晴れてうららかなのに
西嶺（ね）の雪の上ばかり
ぼんやり白く淀むのは
水晶球の溜（くも）りのやう
……さむくねむたいひるのやすみ……

そこには暗い乱積雲が
古い洞窟人類の
方向のない Libido の像を
肖顔のやうにいくつか掲げ
そのこっちではひばりの群が
いちめん漂ひ鳴いてゐる

童話「山男の四月」でも、「小鳥もチツチツと啼」く中を、山男があおむけになって空を仰ぎ、「雲といふものは、風のぐあひで、行ったり来たりぽかっと無くなってみたり、俄にまたでてきたりする」と視覚が変容し、「なんだかむやみに足とあたまが軽くなって、逆さまに空気のなかにうかぶやうな、へんな気もちにな」って夢の世界に入っていく。その夢の世界の中では支那人が登場し、六神丸を呑み込むと「みるみる陳のあたまがめらあっと延びて、いままでの倍になり、せいがめきめき高くなりました」という怪異が起き、そこで目が覚める。やはりここでも鳥の声と視覚の変容、そして巨人（めらあっと延びる）が登場している。

このように見てくると、本作で展開された幻想は、他の詩篇や童話などで何度か書かれたものと共通する部分が多いことがわかる。梅田（後掲）は、賢治が自らの異常体験を隠そうとしたために最終形態で「幻想」の文字が消えたのではないかとし

ていたが、むしろ他の作品などで既に作品化したことがあったために、敢えて「幻想」をイメージさせる部分を切った可能性を考えた方がよいのではないだろうか。

幻想シーンを消してしまうのは、見どころを消してしまうようだが、たとえば「〔南風の頬に酸くして〕」（「一百篇」）でも、賢治は幻想的な部分を削除している。わずか二行の文語詩は次のようなものだ。

①南風の頬に酸くして、　シエバリー青し光芒。

②天翔る雲のエレキを、　とりも来て蘇しなんや、いざ。

雲からのエネルギーを取って力を蘇らせようという内容のようだが、先行詩篇である「七一四　疲労　一九二六、六、一八、」は次のようなもので、やはり巨人が登場している。

南の風も酸っぱいし
穂麦も青くひかって痛い
それだのに
崖の上には
わざわざ今日の晴天を、
西の山根から出て来たといふ
黒い巨きな立像が
眉間にルビーか何かをはめて
三つつも立って待ってゐる
疲れを知らないあゝいふ風な三人と
せいいっぱいのせりふをやりとりするために
あの雲にでも手をあてゝ
電気をとってやらうかな

賢治の心象スケッチは「歴史やその論料、われわれの感ずるそのほかの空間といふやうなことについてどうもおかしな感じやうがしてたま」らなかったために、「あとで勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました」（大正十四年十二月二十日　岩波茂雄宛書簡）というものである。したがって夢の記述や、さまざまな幻想や幻聴もそのまま書かれるのだが、もちろん全てがそうした作品というわけではない。

さて、下書稿㈡となって、幻想性を捨てた賢治は、どこに向かおうとしたのだろうか。下書稿㈠の手入れ段階で、賢治は㋐を付けていたことから、かなり気に入っていたようだが、下書稿㈡の段階で定稿に向けた推敲は止まってしまっている。夜の僧園に鳥が鳴くというだけでも不気味さは残るが、それだけでしかない。神秘体験の記述が重複するのを避けたにしても、そ

こがなくなってしまえば、わざわざ詩にする意味も感じなくなってしまった…　今は、そのように解しておくことにしたい。

先行研究

梅田えりか「僧園」『宮沢賢治　文語詩の森　第三集』柏プラーノ　平成十四年七月）

島田隆輔「僧園」（『宮沢賢治研究≪文語詩稿≫未定稿　信仰詩篇の生成』ハーベスト社　平成二十七年六月）

67　釜石よりの帰り。

かぎりなく鳥はすだけど
こゝろこそいとそゞろなれ

竹行り小きをになひ
雲しろき飯場を出でぬ

みちのべにしやが花さけば
かうもりの柄こそわびしき

かすかなる霧雨ふりて
丘はたゞいちめんの青

谷あひの細き棚田に
積まれつゝ厩肥もぬれたり

大意

鳥は集まってすだくことをやめないが
心はどうにもおちつかない

小さな竹行李を背負って
白い雲が浮かぶ中を飯場を後にした

道端にシャガの花が咲いているので
洋傘の柄はなんとも不似合いだ

細かな霧雨が降ったが
丘はいちめんに青く

谷合の細い棚田には
積み重ねられた厩肥が濡れるままになっている

モチーフ

盛岡中学時代の短歌に発した作品だが、この頃、釜石に行ったという記録はないので、後年の経験と重ねているのだろう。下書稿に「薬の荷」とあり、洋傘を持たせていることから、当時有名だった千金丹の行商人の姿であろう。下書稿の段階から「かなしめる」「はかなみ」「わびしさ」などといった言葉が登場することから、山間の飯場にまで入り込む行商人の境遇を思いやったのだろう。

語注

竹行り　竹でできた葛籠（つづらかご）。視点人物である行商人はここに商品を入れて地方を回っていたのだろう。

飯場　鉱山労働者のための食堂・宿舎のこと。

しゃが　アヤメ科の多年草。漢名の射干から命名されるが、中国では射干はヒオウギを指し、中国では胡蝶花。学名はIris Japonicaだが中国の帰化植物。Wikipediaには「三倍体のため種子が発生しない。このことから日本に存在する全てのシャガは同一の遺伝子を持ち、またその分布の広がりは人為的に行われたと考えることができる。したがって、人為的影響の少ない自然林内にはあまり自生しない。スギ植林の林下に見られる場所などは、かつては人間が住んでいた場所である可能性が高い」とある。

かうもりの柄　こうもりは洋傘のこと。柄は「がら」とも読めるが、音数から言えば「え」であろう。小川達雄（後掲）は「岩手日報」の明治四十三年四月三日の記事に「今年の洋傘ハ男物では矢張り細巻の皮袋入りで色合は松葉色、紺等も可なりあるが最も多いのは黒で、握は木が最も多く白竹、水牛等も多少は売れる様である。此は普通絹物で三円五六十銭から五円内外だ」とあるのを引用し、この頃の盛岡での日雇い賃金が一日五十銭であったことからすると、高価な品物だったとする。賢治は「春と修羅（第二集）」で「〔その洋傘だけでどうかなあ〕」を書き、童話「チュウリップの幻術」で洋傘直しを登場させており、童話「税務署長の冒険」では「変装して行つて貰ひたいな。一寸売薬商人がいゝだらう。あの千金丹の洋傘（かうもりがさ）があつた筈だね」と書いている。「釜石からの帰り」の下書稿㈡には「薬の荷やゝにはかなみ／かうもりの柄をさゝげたり」とあり、また「薬負ひいそぐわびしさ」ともあったことから、おそらく売薬の行商人を描いていたと推測できる。千金丹とは『定本語彙辞典』にあるように「明治一〇年代から流行した口中清涼剤。成分はハッカ油、ちょうじ（丁子）、桂皮（けいひ）（ニッケイの皮）、甘草（かんぞう）（あまくさ）、阿千薬（あせんやく）（カテキン）等」のことで、「「千金丹の洋傘」とは白い木綿の洋傘

に「千金丹」の赤いＰＲの大文字が入った洋傘のことで、浴衣姿で効能を大声で掛け合いながら売り歩く、その千金丹売りは夏の風物詩でもあった」としており、北原白秋や木下杢太郎の詩にも登場することが指摘されている。ここで登場する洋傘も、おそらく千金丹の行商人が持っていた傘のことだろう。大場柯公（「くすり　貝杓子（四）」「読売新聞」大正九年八月二日　朝刊）は、「未だ蝙蝠傘の珍しい時代に、白張りの蝙蝠傘をさし、手に鞄を下げて「本家は大阪安土町」と呼び売りをした千金丹は、精神と型とを薬種行商から受け継いだにも拘はらず、その呼び声と歩調とに新し味を見せて、その流行は一時都鄙を風靡したり」と書いている。ただ、賢治は「竹行り小きをになひ」としているが、当時の新聞に掲載されていた広告などを見ると売薬の行商人たちは鞄を下げていたようである。また、洋傘を持っていることについて、賢治は「霧雨ふりて」と書いており、ここに登場する行商人は宣伝のためでなく、実用のために傘を持っていたようにも解せる。千金丹に似た、他の売薬行商人をイメージしていた可能性についても考えるべきかもしれない。

棚田　急傾斜地などで階段状に作られた田のこと。『世界大百科事典』には「棚田の耕作には農具、肥料、資材の運搬に多くの労力を要し、機械化も困難でおもに手労働によらなければならない。用水も天水の田ごと灌漑（かんがい）や小規模の湧水（わきみず）や溜池（ためいけ）に頼るしかない。高冷地の渓谷型棚田では、春には雪融（ど）けが遅くて水温が上がらず、秋には早い時期に霜が降り稲作に適する高温期間が短い。また棚田は火山灰性の土で砂礫（されき）も多く、作土の浅い漏水田が多い。ここに冷水灌漑が行われているので、盛夏の7、8月に異常低温がくると冷害を受けやすい。雨量の少ない年には干魃（かんばつ）の被害も出やすい。このように棚田は生育が不安定で生産性が低く、経済上不利な条件にある」とある。

評釈

先行作品は「歌稿〔B〕」の短歌186で、行間に文語詩化が試みられたものが下書稿㈠、その下部余白に書かれた下書稿㈡（タイトルは「バガボンド」）、黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡、その裏面に書かれた下書稿㈢、下書稿㈡の余白に書かれた下書稿㈣（タイトルは「釜石よりの帰り。」。鉛筆で㈠）の五種が現存。

まず短歌186から見てみたい。

186

しゃが咲きて
きりさめ降りて
旅人は
かうもりがさの柄をかなしめり。

小川達雄（後掲）は、183から186を連作と捉え、釜石への旅を詠んだものだとする。「大正三年四月」の項に収められていること、シャガの咲く季節が五～六月頃であることから、制作年月は大正三年の初夏となるが、三月に盛岡中学を卒業して岩手病院に入院。しかし進学の許可は下りず、悶々とする日々を送っていた頃の短歌だということになる。

小川は岩手軽便鉄道が開業区間を少しずつ増やしていた時期であることから、賢治は乗車と徒歩を繰り返しながら釜石を目指したとする。鉄道路線が開業すると、賢治はすぐに乗りに行っていたことを思えば（信時哲郎「「鉄道ファン・宮沢賢治 大正期・岩手県の鉄道開業日と賢治の動向」「宮沢賢治研究96」宮沢賢治研究会 平成十七年七月）、いかにもありそうなことに思われるが、『新校本全集』の年譜などにもこの年に釜石に行ったとは書かれていないことから、可能性が全くないわけではないにしても、そう断言してしまうのはためらわれる。

下書稿㈠はバガボンド、すなわち放浪者のタイトルが冠されているが、『新校本全集』には「下書稿㈠に対しては、〇印でそっくり削除の印（あるいは転写の印）がある。そして、下書稿㈠と下書稿㈠とをまとめて赤インクの枠で括り、肩に「転」としてある。下書稿㈠と下書稿㈠を合体させて、下書稿㈡が作られたと考えられる」とある。下書稿㈠の初期形態は次のようなものだ。

丘添ひの小さきまちに
おりんとてその旅人は
丘の上の電柱に椅（ママ）り
まづしばしのその兆をきく

歌稿への書き込みであることから、文語詩の作成を思い立った頃のものだろうが、下書稿㈠と同じ時のできごとなのか、賢治自身の中でイメージが連続していた他の時のできごとなのかは定かでない。

下書稿㈡の最終形態は次のとおり。

いさゝかの霧雨ふりて
丘丘にしやが花さけば
瞳よどむさすらひ人の

かうもりの柄をかなしめる、

うちたゝむ雲のかなたに
町なみのかそけき音や
電信のはしらによりて
人しやがの花軸を噛めり

下書稿㈠では、旅人が丘に添った小さな町に降りていくために電柱に寄り添うという不思議な光景が書かれていたが、賢治は電信柱や電線が強風で音を出すことを「オルゴール」として作品によく登場させていた。ここも同じ趣向のようで、電信柱に寄り添って「町なみのかそけき音」を聞こうとした、ということかと思う。こうした不思議な感性を持った旅人を賢治が見かけたのかもしれないが、賢治自身を旅人として客観的に書いているようにも思える。

しかし下書稿㈢になると、同一用紙の表面と裏面だが、町や電信柱が消え、棚田も見える谷合の飯場が舞台となり、旅人は薬売り商人になる。初期形態は次のとおり。

竹ごうり小きをになひ
雲しろき飯場を出でぬ
かすかなる霧雨ふりて
丘はたゞいちめんの青

薬の荷やゝにはかなみ
かうもりの柄をさゝげたり

かぎりなく鳥はすだきて
薬負ひいそぐわびしさ

かぎりなく鳥はすだくを
しやがの花ほのに匂へり

谷あひの細き棚田に
積まれつゝ厩肥(こえ)もぬれたり

大きく方針転換されていても、こうもり傘とシャガの花、霧雨、つまり下書稿㈠のモチーフは大事に残されたままだ。何を描こうとしているのかわかりにくいが、「かなしめる」「はかなみ」「わびしさ」といった言葉が登場することから考えれば、山間で仕事をする売薬商人の孤独な姿を描こうとしたということのようである。

先述のとおり、本作は「大正三年四月」に詠まれた短歌に発しているが、賢治が釜石を訪ねたのは、年譜によれば、大正六年七月に岩手軽便鉄道が開業し、東海岸視察団として訪ねた時のようだ。ただ、この時は仙人峠を越えて釜石に降りたものの、帰路は別ルートを取って、宮古市の立丸峠を越えて遠野に至っているので「釜石よりの帰り」というタイトルはそぐわない。

初めて仙人峠を釜石側から遠野・花巻側に越えたのは大正十四年一月の三陸旅行から帰った時で、その際に「峠」（「春と修羅（第二集）」）を残している。この時ならば「釜石よりの帰り」というタイトルもしっくりくるが、季節が一致しないし、内容面でも、あまり共通する点が見られない。

「一〇七三　鉱山駅　一九二七、六、一、」（「詩ノート」）には、「五葉山」（住田町・釜石市・大船年にまたがる標高一三五一ｍの三陸沿岸の最高峰）や「峠」といった語が含まれていることから、仙人峠を越えて大橋駅（現在の陸中大橋駅とは別）あたりまで出かけたようだが、年譜には、この頃、釜石方面に向かったという記述はないようだ。それでも「かうもり傘」や「でんしんばしら」といった「釜石よりの帰り。」にも登場する語が使われていることを思うと、本作と何らかの関係があったように思われる。

鉱石もぬれシグナルもぬれ
工の字ついた帽子もぬれれば
山の青葉も坑夫のこどもの
黒いかうもり傘もぬれる

五葉山雲の往きかひ
またなかぞらに雲の往きかひ
あわたゞしく仕舞はれる古い宿屋の鯉のぼり

峠の上のでんしんばしらもけはしい雲にひとり立ち
その雲と桐ばたけの雨のなかから
ぬれた二疋の裸のサラーブレッドがあらはれる
その耳もたちその尾もゆらげば
銅像にもなる立派なサラーブレッドである
一人のこどもがこぶしをかため
雨をうちまた空気をうって
馬をおどしてはしらせる
馬は互にたはむれて
雲の尾行き交ふ山の尾根

シグナルもぬれ家もぬれ

もちろん傘や電信柱の登場の仕方が異なっているし、シャガの花もない。ただ、文語詩とは季節も一致していることから、「大正三年四月」の短歌を詠んだ時の記憶と、昭和二年の釜石への旅の記憶が融合して文語詩になったものと、今は考えておきたい。

モデル地に関する考察が長くなってしまったが、こうも傘の柄を気にしながら、竹行李を背負って飯場にやってきた人物について考えてみたい。

先に、電柱に寄り添って音を聞くという振る舞いから、賢治自身を第三者化した可能性がある事を指摘したが、下書稿㈡で「人しやがの花軸を噛めり」という行動もとらせており、「五十篇」の「〔月のほのほをかたむけて〕」で、「塩のうるゐの茎噛」んでいた「夜さしはせ来し酉蔵」も思い出される。「うるゐ」はオオバギボウシのことで食用だが、シャガは一般に食用とはされていないあたりに違いもあるにせよ、「〔月のほのほをかたむけて〕」は賢治自身の体験が、いつしか第三者化されていったとされる文語詩であることを思えば、本作の読解にも応用できるかもしれない。

実際の経験なのか虚構なのかはわからないし、自分の体験かそれを第三者化したものかもわからない。ただ、語注でも書いたように、少なくとも本作に登場するのが千金丹（もしくはそれに似た薬）の行商人であった可能性は高い。

賢治は童話「山男の四月」で、やはり行李を背負った売薬商人・陳を登場させている。陳は山男をだまして六神丸という丸薬にしてしまうという「あやしい」男だが、だまされて憤った山男が「何だと。何をぬかしやがるんだ。どろぼうめ。きさまが町へはいつたら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだとどなつてやる。さあどうだ」と迫ると、陳はしんとしてしまい、「山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いてゐるのかなともおもひました。さうしてみると、いままで峠や林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考へ込んでゐたやうな支那人は、みんなこんなことを誰かに云はれたのだなと考へました。山男はもうすつかりかあいさうになつて、いまのはうそだよと云はうとしてゐました」などと自分をだました陳を憐れむシーンがある。

当時の行商人のイメージとして、たとえば作家・佐藤紅緑の『咲く花散る花 後編』には、「日雇ひの人足や、放浪者や、乞食同様の行商人など云ふ、此世の極底（どんぞこ）に活きる

人人」（樋口隆文館 大正八年十月）として行商人が登場し、「読売新聞」で大正時代の記事をデータベースから探してみると「女学校教諭が売薬の行商」（大正十一年十月十八日（朝刊））や「悔悟の博士を劬（いたは）りお化粧品の行商」（大正十二年八月二十七日（朝刊））といった《美談》が掲載されていた。女学校教諭や博士の妻というステイタスの高い人々が行商をしたということが事件だったということのようだが、つまり行商人のイメージが極めて低かったということだろう。

榎本滋民「明治風俗町姿15」（「読売新聞（朝刊）」昭和五十二年四月十七日）には、千金丹売りが扱われており、「「その努力は尋常のことにあらざるなり」と、当時の報道にもあるとおり、どんな酷暑厳寒もいとわず、星をあおいで出かけ、月をいただいて帰る商売熱心だった」とある。賢治は童話の中だけでなく、「五十篇」の「〔いたつきてゆめみなやみし〕」で飴売りの行商人を、「一百篇」の「羅紗売」ではロシアの羅紗行商人を描いていたが、熱心に商売をしながらも、人々からは冷たい目で見られる彼らを、賢治は痛ましく思っていたのだろう。

賢治は文語詩で「歌ひめ」や貧しい農民たち、被差別部落で生きる人に肩入れしながら書いていたが、そう思えば、本作が未定稿に留め置かれたとしても、賢治がどのような方向で推敲していたのか、およその検討はつきそうだ。

本作は㋐が付けられただけで未定稿となったが、赤田秀子（後掲）は、「詩句が整い過ぎたため、インパクトは弱く、やや抒情に流れ、㋐を付しながらも、定稿に入りきれなかったのだろうか」とする。ただ、賢治は行商人をテーマに描きたくとも、「釜石」「でんしんばしら」「しゃが」「かうもり傘」といった思い入れのあるイメージも整理しきれず、どこに焦点を当てればいいのかわからないままに自滅してしまったようにも思えるのである。

先行研究

赤田秀子「短歌から文語詩へ「釜石よりの帰り」「製炭小屋」を中心に」（「ワルトラワラ14」ワルトラワラの会 平成十三年三月）
小川達雄「しゃがの花と旅人」（『盛岡中学生宮沢賢治』河出書房新社 平成十六年二月）
佐藤通雅「懊悩のはざまにて」（『賢治短歌へ』洋々社 平成十九年五月）
宮沢賢治研究会「読書会リポート」（「賢治研究117」宮沢賢治研究会 平成二十四年四月）

68　祭日〔一〕

アナロナビクナビ　睡たく桐咲きて
峡に瘧のやまひつたはる

ナビクナビアリナリ　赤き幡もちて
草の峠を越ゆる母たち

ナリトナリアナロ　御堂のうすあかり
毘沙門像に味噌たてまつる

アナロナビクナビ　踏まるゝ天の邪鬼
四方につゝどり鳴きどよむなり

大意

アナロナビクナビ　桐が眠たげな花を咲かせる頃
この山峡にもマラリア感染者が発生した

ナビクナビアリナリ　赤い幡をもって
草の生い茂る峠道を母たちが越えてくる

ナリトナリアナロ　御堂のうすあかりの中で
毘沙門天像に味噌を捧げている

アナロナビクナビ　毘沙門天は天の邪鬼を踏みつけ
四方にはツツドリの声が聞こえている

モチーフ

法華経陀羅尼品第二十六の毘沙門天の呪文をしりとり式に並べ、呪術的効果と音韻的効果を狙った作品。舞台は成島の毘沙門天とされるが、当時、瘧（マラリア）が流行したことはないようで、また「祭日」とあるのに、祭りらしい様子もうかがえない。「一百篇」所収の「祭日〔一〕」と「対」の作品にしようとしたのだろうが、構想が破綻したままになったのだろう。

語注

アナロナビクナビ　法華経陀羅尼品第二十六で毘沙門天が仏に対して法華経を守り広める決意を示した呪文を、サンスクリット語を翻訳せずそのまま示したもの。『世界大百科事典』の「陀羅尼」の項には「陀羅尼を繰り返し繰り返しとなえれば雑念がなくなって禅定に入り、その結果はいっさいの言語説法を記憶することができる。こ

れを聞持（もんじ）陀羅尼ともいうが、そのためには声に出さずにとなえるのがよいので入音声（にゅうおんじょう）陀羅尼ともいう。しかし陀羅尼が普通の言葉ではその意味を分別するので，無念無想になれない。したがって意味不明な呪文（じゅもん）のほうがよいことになる」とある。賢治はしりとり風にアレンジしているが、吉見正信（後掲A、B）によれば、漢詩における離合詩の形式を使っているのだとのこと。呪文を漢字で書くと「阿梨（あり） 那梨（なり） 捻那梨（となり） 阿那盧（あなろ） 那履（なび） 拘那履（くなび）」となるが、小林一郎（『法華経講義第四巻』晋文館 昭和二十年十二月）によれば、「『阿梨』とは『富有』といふことである。富有といふのは有ゆる力がその中に具はつて居るといふ意味である」。「『那梨』は『調戯』と訳される。調戯とは揶揄（からか）ふといふことである。からかふといふのはどういふのかと言へば、仏の真実の教を弘める場合に於ては、如何なる者が来ても本当の対手にはならないと言ふことである」。「『捻那梨』は『無戯』といふことである。これが那梨の次にあるのは大に考ふべきことである、前のは他に対すること、是は内に顧みることである。他に対しては真面目に対手になるものは無いといふ位な自信を持つのだが、自分達が信仰を励む上に於ては、少しでも心に弛みがあってはいけない。それが即ち無戯である」。「『阿那盧』、これは『無量』といふことである。仏の慈悲は無量であり、教の力も無量である」。「『那履』といふのは『無富』、又『拘那履』といふのは『何富』といふのでこの二つは同じことを別な方面から言つて居るのである。すなわち仏の真実の教は、是より富めるもの無し、又何処にか是より富めるものがあるかと言ふので、斯ういふことは仏教を奉ずる者の忘れてならぬ事である」とされる。

瘧のやまひ　瘧（おこり）はマラリヤのこと。ハマダラカによって媒介される原虫性疾患で「8世紀ころの「養老律令」（757年）に瘧の記載がある。明治以降では北海道深川市に駐屯した屯田兵と家族の20％近くが感染していたと伝えられ、本州だけでも琵琶湖周辺や愛知などに土着マラリアの記録が残っている。日本でマラリアがなくなったのは、水田に生息するハマダラ蚊が水田の環境や稲作法の変化により減少したことが理由ではないかともいわれている」（吉田武史「マラリアのはなし」「Ignazzo」https://www.bdj.co.jp/safety/articles/ignazzo/hkdqj2000001j3d7.html 日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 平成二十八年十二月）。内務省衛生局保健衛生調査室『各地方ニ於ケル「マラリア」ニ関スル概況』（内務省衛生局 大正八年十月）には岩手県について次のよ

うに書かれている。「本県ニ於ケル「マラリア」ノ発生期ハ詳ナラサレドモ明治二十七、八年日清戦役ノ当時凱旋者中ニ本病ニ感染セシモノアリ一時発生ヲ見タリシモ之カ為メ蔓延シタル状態ナク最近三ケ年間ニ於ケル罹病者ヲ調査スルニ左記ノ通リニシテ県内発生中一、二原因不詳ヲ除ク外列記地方ニテ感染帰来シタルモノニシテ従来ノ患者ニ徴スルニ二、三年間ハ再発スルノ傾向アリ」。掲載されている表には大正五年の患者数が二十二名、大正六年に三十二名、大正七年に二十五名とある。先行作品の制作年は大正十三年五月二十三日だが、状況にあまり変化はなかったと思われることから虚構であろう。「瘧」を「流行り病」のことだったと考えることもできそうだが、たとえばスペイン風邪の流行は大正七年から九年のことであり、制作年月には差があって、これをモデルにしたとも考えにくい。

毘沙門に味噌たてまつる　舞台になっているのは花巻市東和町の成島毘沙門堂。毘沙門とは古代インドの神話に登場し、北方を守護し、財宝富貴を守るとされる神。仏教にも護法神として取り入れられた。四天王の一人として造像される場合は多聞天、独尊像として造像安置される場合は毘沙門天と呼ばれる。成島の毘沙門天は平安中期、十世紀頃のものとされており、高さは四・七五ｍで一木作り。兜跋（とばつ）毘沙門天と呼ばれるが、兜跋とは西域のトルファンのことと考えられている。八田二三一（後掲）は、この像の脛に味噌を塗ることで人々の健康や味噌づくりの成就を願う民間信仰があったが、大正九年に旧国宝指定されて以降は脛に味噌を塗ることが禁止され、以降は味噌を朴の葉や経木に包んで奉納するようになったという成島公民館の青木慶七の聞き取りを紹介している。

踏まるる天の邪鬼　毘沙門天像は武将の姿をして、邪鬼を踏みつけていることが多いが、成島の毘沙門天は地天女が支えている。対馬美香（後掲Ａ）は「当時は一般的には北成島のものも「天の邪鬼」を踏む像と認識されていた」という岩手県立博物館の大屋邦宣を紹介し、八田（後掲）も「古い毘沙門堂は暗くて下方が見えにくかったと言われる」ことを指摘し、「地元の人々の間では当時『天の邪鬼』と認識され、『天の邪鬼』と呼称されていた（熊野神社、小原明氏〈一九四八年生〉よりの聴き取りによる）」と紹介している。

つゝどり　ホトトギス科の鳥。全長三十センチほどで、カッコウに似ておりポポッ、ポポッと鳴き、紙筒の口を叩くようであることから筒鳥と呼ばれている。

評釈

既使用赤系詩稿用紙に書かれた先行作品である口語詩「一三九　夏　一九二四、五、二三、」の裏面に書かれた下書稿㈠（タイトルは「祭日」）、黄罫（22 22行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは「祭日」）の二種が現存。

「一百篇」の「〔うたがふをやめよ〕」の下書稿㈡にも「アナロナビクナビ」を詩化しようとした痕跡が残っており、また、先行作品である「一三九　夏」は「〔毘沙門の堂は古びて〕」（「五十篇」）の先行作品でもある（ただし『新校本全集16（上）補遺・資料　補遺・資料篇』では、「一三九　夏」を文語詩に改作したという記述の削除が指示されている）。さらに信時哲郎（「〔こらはみな手を引き交へて〕」『五十篇評釈』）は、「一三九　夏」と舞台や語彙、母がテーマになっている点などから詩群を形成しているのではないかとした。

参考文献は「未定稿」にしては多いが、いきなり法華経に登場する毘沙門天の呪文で始まっている異様さによるものだろう。木村直弘（後掲）は、田中智学が題目を口唱することの重要性を説いたことを指摘し、その影響があったことに着目するが、吉本隆明（後掲）が、これを「それ自体はまったく意味をもたない（あるいは意味不明）」と、宗教的意味については気づいていなかったようだが、「定型の各節の上句として、下句のふつうの文節語の詩句の暗喩をなしている。しかも音喩というよりも意味喩の機能を負っているため、ひとつの概念的な意味の兆候を背負った普遍的な言語の役割をはたしている。たぶんこれが擬音語の極限で、宮沢賢治にとっては宇宙のささやきや回転音を言語にするのにひとしいものだった」と書いている。賢治としても、宗教的な意味だけでなく、純粋に音韻の芸術として提示したい気持ちがあったのだろう。

対馬美香（後掲A、C）は同じタイトルで「一百篇」所収の「祭日〔一〕」が、母をテーマにしているという点で共通性があるとしたが、「祭日〔一〕」の舞台は、花巻市東和町の丹内山神社。『角川日本地名大辞典』では成島毘沙門堂について「近くの丹内山神社は巨石信仰に発した古い地元信仰の神であり、おそらく、この神を、遠胆沢（とおいさわ）の官社として祀る過程で、その神宮寺のようなものとして営まれたのが成島寺であったろう。今日、毘沙門堂だけ残るのは、廃仏毀釈後の状態であろうが、しかし成島寺そのものが毘沙門を本尊とする毘沙門寺ないし多門寺であったことは、間違いあるまい」とのことで、無関係ではなさそうだ。

賢治の残した同名の文語詩は「対」ともいうべき関係にあり、漢詩における対句のような類似性のある語句が使われることを指摘したが（「「五十篇」と「一百篇」 賢治は「一百篇」を七日で書いたか」『一百篇評釈』）、この二作はタイトルが共通し、ともに母をテーマにし、丹内山神社と成島毘沙門堂も「対」と言うべき関係であった。また、「モッペをうがち児を負ひて／青きパラソルかざしつゝ」（「祭日㈠」下書稿㈡）と「児らをせなに負ひ／赤とうこんの　幡もちて」（「祭日㈡」下書稿㈡）の類似などを考えても、それぞれの詩稿を見比べながら手を入れていたようにも思われる。ただ、「アナロナビクナビ」は「祭日㈡」のみにしか登場していないし、「祭日㈠」では母のテーマが後退するなどから、「対」の構想は早い段階で挫折したようである。

ところで、気になるのは「祭日㈡」に、およそ祭日らしい要素が見えないことだ。敢えて言えば「赤とうこんの幡」に祭日らしさは伺えるが、「祭日㈠」において「煮物をなして販りなんと」（下書稿㈠）や「麓に白き幟たち、／むらがり続く丘丘に、　鼓の音の数のしどろなる。」（定稿）とあったのに比べると寂しい。そもそも瘧のために味噌をたてまつるというのは祭日の行事ではない。

先行作品である「一三九　夏」でも、やはり祭日らしさは見出しにくい。下書稿㈡を挙げてみる。

木の芽が油緑や喪神青にほころび
あちこち四角な山畑には
桐が睡たく咲きだせば
こどもをせをったかみさんたちが
毘沙門天にたてまつる
赤や黄いろの幡をもち
きみかげさうの空谷や
たゞれたやうに鳥のなく
いくつもの緩(ゆる)い峠を越える

成島毘沙門堂（正式にはその脇にある三熊野神社）の例大祭は九月十九日であり、「一九二四、五、二三、」という日付は少なくとも大祭の時のものではない。つまり、賢治は「祭日〔一〕」と「対」の文語詩に仕立てようとして、「祭日〔二〕」も、いかにも祭日であるかのように推敲している最中だったということなのかと思う。

ただし、賢治は三熊野神社の例大祭の記憶も生かそうとした可能性もある。というのも三熊野神社では大祭の日に「十二番角力式」が行われることで有名だからだ。この行事

は同神社が創建された坂上田村麻呂の時代までさかのぼることができるもので、田村麻呂が相撲を取らせ、勝った側の集落の豊作を約束したことに始まるという。しかし、後に流血沙汰になるほどに盛り上がり過ぎてしまったことから、江戸時代には幼児による泣き相撲に改められて、今に続いているのだという。岩手県神道青年会（http://www.ganshinsei.jp/hanamakishi/272kumanojinja.html）によれば「現在は幼児成長と豊作を祈る行事として続けられています」とのことで、母親が子どもたちを思って神社にやって来るとした背景に、この例大祭と十二番角力式があったのではないかとも思えるのである。

もう一つ言及しておきたいのは、「一三九　夏」の日付が、賢治が花巻農学校の教員として北海道への修学旅行の引率から花巻に戻った当日だということだ。年譜によれば、二十二日の午後五時に船で室蘭を出て二十三日の四時二十分に青森着。六時二十五分に青森駅を出て、花巻に十三時四十九分に着いたという。そのまま岩手軽便鉄道に乗り換えれば毘沙門堂に来た可能性もないではない。しかし、おそらく徹夜に近い状況で生徒を引率した旅を終えて毘沙門堂までやってきたとは考えにくい。

「春と修羅（第二集）」を見ると、作品番号から考えて少なくとも七篇の詩を同一の日に書いていることがわかる。現存する二作のうちの「一三三　〔つめたい海の水銀が〕一九二四、五、二三、」には、「三角島」や「三稜島」という語があることから、車窓から見えた青森県浅虫温泉の沖にある湯の島ではないかとされているが、その一方で「鱗をつけたやさしい妻と／かってあすこにわたくしは居た」（下書稿㈡といった内容も含まれた幻想的な部分も含まれている。創作意欲に燃えて毘沙門堂にまで足を運んだと考えることもできるが、多分に幻想的な、あるいは多くの虚構を含んだ詩を書いた日だとすることもできそうだ。

例えば、この前日、北海道滞在中に書いた「一二三　馬　一九二四、五、二二」は、リアリスティックな作風にも感じられるが、旅程からすると実見したものではなく、空想で書いたと考えられている。とすれば「一三九　夏」が虚構に基づくものだと解することも可能だ。もし、毘沙門堂の記述を虚構であるとしてみると、語注に書いたように「瘧のやまひ」が大正の岩手で流行したという証拠が残っていないことも、説明が付けられるかもしれない。

先行研究

小倉豊文「ロマンツエロ」（『「雨ニモマケズ手帳」新考』東京創元社　昭和五十三年十二月）

吉見正信A「「文語詩」の世界」（「イーハトーヴ通信 新修宮沢賢治全集6 月報10」筑摩書房 昭和五十五年二月）
吉見正信B「文語詩への到達」（『宮沢賢治の道程』八重岳書房 昭和五十七年二月）
対馬美香A「祭日〔一〕〔二〕・「毘沙門の堂は古びて」考 宮沢賢治「文語詩稿」研究（その2）」（「弘前・宮沢賢治研究会会誌5」弘前・宮沢賢治研究会 昭和六十二年九月）
対馬美香B「祭日〔二〕における植物の意義」（「弘前・宮沢賢治研究会会誌5」弘前・宮沢賢治研究会 昭和六十二年九月）
吉本隆明「擬音語・造語論」（『近代日本詩人選13 宮沢賢治』筑摩書房 平成元年七月）
岡井隆A「「文語詩稿」の意味」（『文語詩人 宮沢賢治』筑摩書房 平成二年四月）
岡井隆B「賢治 詩と短歌の間」（「短歌研究53―8」短歌研究社 平成八年八月）
中谷俊雄「カッコウ・ツツドリ・ホトトギス・ジュウイチ」（『賢治鳥類学』新曜社 平成十年五月）
八田二三一「祭日〔二〕」（『宮沢賢治 文語詩の森』柏プラーノ 平成十一年六月）
門屋光昭「法華経と庶民信仰とのはざまで」（『鬼と鹿と宮沢賢治』集英社 平成十二年六月）
宮川恵佐巨「10 一三九 夏」（『宮沢賢治作品散歩』宮川恵佐巨 平成十二年十二月）
赤田秀子「文語詩 語注と解説」（「クラムボンの会二十周年記念林洋子ひとり語り 賢治の詩・タゴールの詩」クラムボンの会 平成十二年）
大角修「陀羅尼と祈り」（『[図説]法華経大全』学習研究社 平成十三年三月）
近藤晴彦「死の視点Ⅳ」（『宮沢賢治への接近』河出書房新社 平成十三年十月）
濱下昌宏「賢治と女性（3） 文語詩に見る〈女たち〉への眼差し」（『妹の力とその変容 女性学の試み』近代文芸社 平成十四年三月）
対馬美香C「〔毘沙門の堂は古びて〕」（『宮沢賢治 文語詩の森 第三集』平成十四年七月）
大角修「賢治の作品を読む」（『「宮沢賢治」の誕生』河出書房新社 平成二十二年五月）
米地文夫・一ノ倉俊一・神田雅章「南部北上山地における毘沙門堂と谷権現の時空間的位置 宮沢賢治のまなざしが捉えたもの」（「総合政策15―1」岩手県立大学総合政策学会平成二十五年十一月）
島田隆輔「祭日」（『宮沢賢治研究≪文語詩稿≫未定稿 信仰詩篇の生成』ハーベスト社 平成二十七年六月）

木村直弘「法華文学としてのイーハトヴ童話「かしはばやしの夜」オノマトペの共振的効果に根ざした「法華文学ノ創作」をめぐって」（「賢治学4」東海大学出版部 平成二十九年七月）
中村節也「賢治の法華経」（『宮沢賢治の宇宙音感 音楽と星と法華経』コールサック社 平成二十九年八月）
大角修「陀羅尼と祈り」（『全品現代語訳法華経』角川ソフィア文庫 平成三十年三月）

69 叔母枕頭

七月はさやに来れど、
人はなほ故知らに病み、
日すぎ来し白雲の野は、
さびしくも掃き浄めらる、

大意

七月がはっきりやって来たけれど、
叔母はそれでもなぜ病気になったのかもわからぬまま、
夕刻となって白い雲の野原は、
さびしくも掃き清められているように感じられる、

モチーフ

母イチの末妹コトが入院していた東京の病院を訪ねた時の経験に発する文語詩。「人はなほ故知らに病み」とは病名が結核であることを知らないでいたことを示しているように思えるが、コトは幼い頃、賢治と仏教講習会に参加し、講師の暁烏敏をも驚かせるような利発な子であっただけに、病名が何かということではなく、なぜ病気になったのかという倫理的・仏教的な問いであり、それを書こうとしていたのかもしれない。

語注

叔母　叔母とは母イチの末妹コト。瀬川弥右衛門に嫁したが大正十三年二月、二十八歳で病没。叔母ではありながら、賢治の一歳上でしかない。東京・京橋木挽町の古宇田病院に長く入院しており、家出上京中の大正十年六月二十九日の宮沢イチ宛書簡に「ことさんは、医師の話によりますと、もう、病気は殆んど快いさうで、衰弱さへ無かったら、すぐに退院しても好いさうです」と書いている。

日すぎ来し　「過ぎ越す」は『日本国語大辞典』によれば「（ある場所を）通り過ぎて来る。通過する」あるいは

「（ある時を）経過して来る」だが、日を過ぎ越すというのが、月日が経過したことであるとも、一日のうち時間が経過したとも取れる。杉浦静（後掲）は「七月初旬の夕刻の空に」としているが、おそらく後者の解釈であろう。本稿もその立場を取りたい。

評釈

「「東京」ノート」に書かれた下書稿㈠、黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈡（タイトルは手入れ段階で「叔母枕頭」）、その下部余白に書かれた下書稿㈢（タイトルは「叔母枕頭」。鉛筆で㋐）、兄妹像手帳に書かれた下書稿㈣（タイトルは「看病」。ただし『新校本全集』では下書稿㈣を本文に取らず、逐次形と扱っている）。

杉浦静（「文語詩［われはダルケを名乗れるものと］」の生成　宮沢賢治とダルケ(2)」「言語文化34」明治学院大学言語文化研究所　平成二十九年三月）は「「東京」ノート」に書き付けられた本作の下書稿㈠の配列と母イチに送った書簡の日付から、「この短章の題材は大正一〇年六月末から七月初旬のことであると推定できる」とするが、ここでもそう捉えておきたい。

叔母とは瀬川コト。瀬川弥右衛門（旧名は周蔵）に嫁したのは大正四年六月。コト二十歳、賢治十九歳の時である。瀬川は「大正十四年の九月瀬川弥右エ門が初めて貴族院議員の候補者として名乗を挙げた時には岩手県第一の多額納税者であつた」（『稗貫風土記　第一巻　人物篇』八木英三　昭和二十六年四月）とされる人物であった。

「歌稿［B］」に「724　しろきそら／この東京のひとむれに／まじりてひとり／京橋に行く。」とあるが、『新校本全集』の年譜では、この短歌から大正五年三月の記事だとし、「東京の京橋木挽町（古宇田病院へ療養中の母の末妹瀬川コトを見舞ったと推察）」としている。

この後も頻繁に訪ねていたことが書簡からわかるが、大正七年十二月二十六日、賢治はトシが入院したとの報せを受けて上京した際、翌二十七日に「本日は朝の間に木挽町のコトさんの所に参るべく候」と政次郎に書き送っている。明けて大正八年一月二十四日、この日もコトを古宇田病院に見舞っていることが、やはり政次郎宛の書簡から窺うことができる。賢治が家出上京中の大正十年には頻繁に訪ねていたようで政次郎に宛てて「ことさんには一日隔き位にお見舞いしては居ります」（二月二十四日）とも書いている。

コトが入院していた古宇田病院は、京橋区木挽町五丁目三番地（現在の中央区銀座六丁目）にあり、古宇田傚太郎が大正三年一月に開業している。奥田弘（「宮沢賢治の東

京に於ける足跡」『宮沢賢治研究叢書２　賢治地理』学芸書林　平成元年七月）が掲げた図版を見ると、非常に立派な建物で、『日本医籍録』（医事時論社　昭和九年五月）によれば「卒後伝染病研究所及母校皮膚科教室ニ於テ研究大正三年一月ヨリ現地開業　同十三年四月学位受領　趣味読書」とある。皮膚に関する医学論文や書籍の他、『金の星』に子ども向けの読み物なども執筆する文化人であった。

下書稿㈠は次のとおり。

日過ぎ来し雲の原は
さびしく掃き浄められたり

下書稿㈡の手入れ段階で「人はなほ故知らに病み」と「七月」という要素が加わって最終段階まで継続される他、下書稿㈡と下書稿㈢の手入れで「堀のはためぐる電車の」や「プラタヌスさやぎそめしを」といった大東京・銀座を思わせる語句が盛り込まれる案もあったことが改稿の主な特徴である。

気になるのは「人はなほ故知らに病み」である。逐次形では「故しらに人はなほ疾み」とあるが、ほぼ同じだと言ってよいと思う。「叔母は理由もわからないままに病の床に臥せっており」という意味になろうが、きちんと解釈しようとすると、なかなか複雑だ。というのも『新校本全集』の年譜の大正七年六月三十日、賢治が岩手病院で診察を受けた結果、肋膜炎であることが判明した時の記述に「これを見た父母のショック、不安は大変だったろう。母イチ、トシ、それに肝心の賢治が加わる。周辺にはながらく療養中のイチの妹コト、近くは岩田磯吉、みな同病である」とあるからだ。おそらく年譜は賢治の両親や清六などからの聞き書きによるものが多いのだろうが、それを信じれば、大正七年にはコトが結核であることがわかっていることになる。それなのに「故知らに病み」という言葉が大正十年の見舞いの際の経験に発した本作に刻まれているのは、不自然だと思う。

賢治が母イチ（コトの実姉）に送った大正十年六月二十九日書簡には、コトがもう退院してもいいと医者に言われたと書き、さらに次のように書いている。

但し、退隠後は、一遍に宅へは帰られないだらうと、医師が云ひます。途中、どこかで、休まなければならないだらうと思ひます。今度は、思ひ切って、大事を取らないと、又、元に戻ります。お父さまとも御相談の上で、又十日ばかり花巻の方へ戻るやうな、姑息な手段は

とらないで、情実なしに、医師の意見通りにしないと、ことさんも、あんまりお気の毒です。今度は、充分ご相談の上、もう二度と、病気を起すことの無いやうに、お勧め下さい。その御相談に、今日恒さんをお呼びになりました。ことさんは、もうどうしても松屋へは帰れないと、云ってゐられます。内のお父様に、宜しくお願ひして呉れと、申されました。

いくら松屋でも、十日毎に、二百五十円づゝ送ったり、容易の事ではないでせうから、後々の所まで、充分御相談の上、見掛け丈けの道徳を、おやめになるやう、御決断を願ひます。

もっとも、これは、母上にだけ、そっと申し上げる琴さんのお考へで、私の無責任な意見ではございません。

杉浦（前掲）は、この書簡を送った頃が本作の取材日だろうとするのだが、コトと賢治、また母方・父方の宮沢家、コトの嫁ぎ先である瀬川家（松屋）をも含め、コトの養生についてはかなり具体的に話が出ていたようであり、「故知らに病み」という状況とは異なる印象がある。

ただ、当時は結核は不治の病だともされていたことから、軽々に口外したり、本人に告げなかったりする場合もあったかもしれない。「人はなほ故知らに」の「人」は、「医者も家族も知らなかった」という意味ではなく、「コトだけが知らなかった（知らされていなかった）」と解釈することもできるかもしれない。

「人はなほ故知らに病み」にこだわるのは、古宇田傚太郎の専門が皮膚科であったからでもある。宮沢家の末娘で、岩手県一の多額納税者となる瀬川家の妻でもあったので、新進の医者が銀座に建てた豪華な病院に入院させたのは理解できる。しかし古宇田は「結核喀痰ノ消毒実験」（「細菌学雑誌」細菌学雑誌社 明治四十四年十二月）という結核に関する論文を書いているにしても、博士論文も皮膚学に関するもので、その他の論文や著書、また「読売新聞」に執筆した記事も関するものばかりであった。先に挙げた『日本医籍録』でも「皮膚科 古宇田医院」と書かれている。情報力も財力も十分であったのに、五年も皮膚科に入院させるのは不自然だ。実は結核ではない病気で長く入院していたか、あるいは結核であることを隠すために皮膚科病院に入院していたといったこともあったのかもしれない。

また「人はなほ故知らに病み」の解釈としてもう一つ考えられるのは、コトが結核であったか、あるいは皮膚科の病気だったか、といったことではなく、倫理的、あるいは

宗教的な意味で「なぜ病気になったのか」ということを問題にしている可能性だ。

賢治は昭和八年九月十一日、現存する最後の手紙で、教え子・柳原昌悦に次のように書いている。

私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、「慢」といふものの一支流に過つて身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かゞ空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従って師友を失ひ憂悶病を得るといったやうな順序です。

科学的に言えば、こうした病因は病因とは言えまい。しかし、生涯、信仰を貫いた賢治にとって、病気になった理由は、大きな問題だったのであろう。

賢治はともかくとして、コトはどうだったのか言えば、まだコトも賢治も幼い頃ではあるが、『新校本全集』の年譜にあるコト十二歳、賢治十一歳の時（明治三十九年）の記録が思い出される。

賢治の父らが中心となって仏教界の碩学を花巻に招いて夏期講習会が毎年開催されていたが、この年の講師だった暁烏敏は、「政とこと子との問答」として、政次郎とコトのやりとりを『暁烏敏日記』で、次のように記している。

政曰く 心はいかに／こと曰く 心は円きものにして内に仏あり。（十二歳）／又曰く 妾は身体は弱けれど心は強し。仏在せば也／政曰く 人生の目的いかゞ／こと曰く 母さんにたのまれて生れたり。この生に来れるは仏をほめ、世の人に平和を与へんが為也と／少女の信、嘉すべきかな（八月四日）

また暁烏は「いつまでもそのあどけなき笑顔にて仏の国の道しるべせよ」とコトについて詠んでもいる。

幼い時から仏教に触れていたことが賢治を仏教の熱心な信者にしたと思われるが（浄土真宗から日蓮宗への大きな変化こそあったものの）、叔母のコトも仏教的な思考法や人生観が沁みついていた可能性は高い。だとすれば、幼いころから仏教に親しんでいたコトと賢治は、見舞いに行った折にも、病気や花巻のことについてだけでなく、人生に

ついて、宗教についても語り合うことがあったのではないだろうか。

賢治は「ことさんには一日隔き位にお見舞いしては居ります」（宮沢政次郎宛書簡　大正十年二月二十四日）と書いている。『新校本全集』の年譜には「額面通り受け取れない」とされており、たしかに政次郎や母イチをはじめとした人々を安心させるために書いた可能性は高いにせよ、案外、賢治が書いたとおりであったのかもしれない。

また、本作が大正十年の経験に基づくのだとすれば、当時、賢治は家出上京し、ただ一人で東京で暮らしている最中であり、コトはコトで、知り合いもいない東京で、もう五年もの間、病床に臥している存在である。どちらも、これまで以上に、人生について、宗教や思想について考えており、何度も病室で語り合うことがあったとしても不思議ではないように思う。

また、斎藤宗次郎の『二荊自叙伝』には、大正十三年二月七日、農学校に新聞代を集金するために斎藤が訪ねたところ、宿直だった賢治と語り合い、そこで「永訣の朝」を読んだことが記録されている。『新校本全集』の年譜には、『二荊自叙伝』のもとになったその日の記録に「叔母コトの死とその経緯をめぐる「家族組織、社会組織の不完全を嘆」く賢治の思いに関する言及」があったことが紹介されている。コトは同年二月四日に仙台の東北帝国大学付属病院で没しているので、その報せを受けてのものだろう。詳細はわからないが、母の実家である宮善（賢治の祖父・宮沢善治、また母方の宮沢家のこと）への不満、あるいはコトの嫁ぎ先である瀬川家への不満を指すのであろう。

賢治は先にあげた大正十年六月二十九日の母イチ宛の書簡で「みんな周蔵さんが悪いとは決して云はれません」（周蔵はコトの夫・瀬川弥右衛門の旧称）と書いている。また、同じ書簡で「ことさんは、もうどうしても松屋へは帰れない」とも書いていたことを思うと、詳しい事情はわからないまでも、周蔵ばかりが悪いというわけではなかったということ、つまり、コトのことを思えば、周蔵が批判されても仕方がないような状況があった、ということを示してもいるからだ。

また、実家である宮善については、佐藤隆房（「祖父と孫」『私家版 宮沢賢治』桜地人館 平成八年三月）が、次のようなエピソードを紹介している。

賢治さんの母方の祖父に、宮善さんという方がいます。宮善さんは老齢ですが、なかなか元気で、若い時から非常に活動し、産をなした人です。

かつてその家のお孫さんが盛岡中学に入学することになった時、親類の一人で、賢治さんの伯母に当たる人が「ヂェー、ヂェー、賢コも寄宿舎さ入ったのだから、あれも寄宿舎にいれたらえ」と、すすめたそうです。すると宮善さんは

「イヤ、賢コのいた寄宿舎には、家のは置かれねえあんす」と断りました。賢治さんの育った寄宿舎には、何かしら好感を持たなかったらしいのです。花巻にあっても、賢治さんが遊びに来るのを宮善さんは歓迎しません。

「賢治さんの伯母に当たる人」とあるが、賢治の両親よりも年長の姉は、父方のヤギしかいない。ヤギは賢治が生まれた頃、最初に結婚した家から戻っており、賢治をかわいがり、「白骨の御文章」などを教えたことで知られている。明治三十五年には再婚したが、賢治が中学四年の明治四十五年には四十三歳で没している。

したがって佐藤の「伯母」は誤りで「叔母」が正しかったことになりそうだ。父方の伯母にはヤスがいるが、明治三十年に岩田家に嫁しており、気安く善治と話をするような間柄ではなさそうだ。

母方、つまり宮善からの候補者を考えれば、イチのすぐ下の妹は夭逝。その下のヨシは梅津家に嫁したが、七年間も転地療養した経験があるとのことで適切ではない。となると一番下の妹であるコトが、この「伯母」に最もふさわしい人物であるように思われる。年齢的にも寄宿舎時代の賢治のことを一番知っていただろう。

しかし、賢治は中学校時代、ストライキ騒動などで退寮処分になったことも知られていたはずなので、宮善が賢治を避けた理由もわからなくはない。

ところがそれよりずっと後のことですが、賢治さんが上京している時、この祖父の宮善さんも病人の看護で出京して来ました。この折、賢治さんは

「何か用があったら、おれに言いつけて下さい」などと足繁く見舞いに来ました。

ある日賢治さんは、

「お祖父さん、花見にお出かけになったらどうです。ちょっとでもいいんですよ、病気の人についてばかりいるのも良くないでしょう。少し陽気にもならないば」と言いました。

「そうだな」とお祖父さんも大いに乗り気になって、舟で花見をすることにしました。

舟の中で賢治さんは
「お祖父さん、おれ、いいもの買って来たんすじゃ、ハハハハハハハ」と道化顔で言いました。
「あ、何だべな」と聞かれると賢治さんは、懐から正宗（まさむね）の四合瓶を取り出して笑いました。
帰ってから宮善さんは
「面白かった、面白かった。資コに正宗買ってもらって、舟で花ッコ見ながら飲んだが、面白かったもなっす」と大満足です。東京でこの祖父は、賢治さんを芝居に連れて行ったり、あるいは料理を食べさせたりして
「ウン、ウン、やはり話のわかるのは親類中で賢コ一人だなあ」と言って心から嬉しそうにしておりました。

宮善が上京して看護したというのはコトを見舞ってのものだろう。賢治の大正十年三月四日の宮沢政次郎・安太郎（政次郎の弟の長男で賢治の従弟）宛書簡に「鍛治町御祖父様（信時注：宮善）病院に付添被遊居候へども御壮健の御様子」とあることにも明らかだ。「花見」については不詳だが「読売新聞」の大正十年二月十一日（朝刊）には「綻び初めた日比谷公園の梅」という写真が掲載され、同年三月九日（朝刊）には「桜綻ぶ！ 上の博物館前の巨幹」という写真が掲載されているので不自然ではない。

ところが場所が一度花巻となると、この祖父の賢治さんに対する態度は一変し、甚だしくこの孫を敬遠するのです。農学校教師になって、毎日その家の前を通っても、「上がれ」というようなこともほとんど無く、一方賢治さんのほうでも心得たもので几帳面（きちょうめん）なお辞儀をして
「今が帰りです」とさっさと引き上げていました。
賢治さんの美しい心は分かっていますが、宮善さんはやはり普通の浮世の人です。「ジブンヲカンヂャウニ入レズニ」という無我の賢治さんの思想を、そのまま自分の家の孫たちに真似されるのが心配だったのでしょう。
「おれは年も積んでいるから、賢治が何を言うても、そのいい点だけを取り上げて自分のものにすることが出来るが、若い者たちにはそれが出来ないのだから、危険で賢治の話は聞かされない」というのがその本音だったのです。

宮善としては、賢治の人柄を愛しながらも、掲げる理想主義が商家の現実とはマッチしないために賢治を退けた、ということだろう。それにしても孫に対して冷徹にそれを貫き通した宮善の現実主義はすさまじいが、コトに対しても宮沢家の格式や商売を重視するために冷徹に処すること

があっただろうことが想像できる。賢治が斎藤宗次郎に漏らした「叔母コトの死とその経緯をめぐる「家族組織、社会組織の不完全を嘆」く賢治の思いに関する言及」とは、夫とその家・松屋、あるいは祖父とその家・宮善のコトに対する冷徹さや現実主義、心よりも利益や名声を大事にする態度などを指すのであろう。

長々と引用してきたが、コトと賢治がともに東京で孤独だったこと、ともに仏教に幼いころから親しみがあり、親密になりやすかっただけでなく、家族や社会についての嘆きなどでも意気投合した可能性は高い。さすれば、「人はなほ故知らに病み」の解釈として「なぜ病気になったのか」といった話を彼らがしていたとすることも許されるのではないだろうか。

最終行に「日すぎ来し白雲の野は、／さびしくも掃き浄めらる、」とあるが、白雲を見ながらさびしさを感じるのも、「〔けむりはときに丘丘の〕」（「一百篇」）で乗り合わせたアメリカ人宣教師のミス・ギフォードとそれぞれの宗教観について語り合いながら車窓の外の天を見ていたことと関連付けてもよいのかもしれない。

コトについての言及はあまりないが、ギトン（「ゆらぐ蜉蝣文字」（http://id43.fm-p.jp/530/giton/index.php?Module=viewbk&action=ppg&stid=5&bkid=1010770&pgno=99&bkrow=0）が「琴子は、宮沢賢治伝にはほとんど顔を出しませんが、賢治が敬愛した〝もうひとりの肉親女性〟として、重要な人なのではないでしょうか」としているのは重要な指摘ではないかと思われる。ギトンは「「琴の星」、「琴の宿」の「お姫さま」には、琴子の追憶がある」とも書くが、それはさすがに深読みではないかと思うにせよ、賢治にとって重要な人物であった可能性はあり、賢治が人生や信仰について語りあえた女性がトシだけしかいなかったように見なされてきたことについては、反省する必要があるかもしれない。

㋐の付された下書稿㈢の後、逐次形として「兄妹像手帳」に下書稿㈢とほぼ同内容のものが記されている。さらに手を入れて定稿化するつもりがあったのかもしれない。ただ、岩手県外での取材が文語詩化されにくいためなのか、未定稿のままになってしまっている。

先行研究

小林俊子「詩歌」『宮沢賢治 絶唱 かなしみとさびしさ』勉誠出版 平成二十三年八月）

杉浦静「宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂（須田町）」（「「東京」ノート」所収）について」（「大妻国文50」大妻女子大学国文学会 平成三十一年三月）

70　宗谷［一］

まくろなる流れの岸に
根株燃すゆふべのけむり
こらつどひかたみに舞ひて
たんぽゝの白き毛をふく

丘の上のスリッパ小屋に
媼ゐてむすめらに云ふ
かくてしも畑みな成りて
あらたなる艱苦ひらくと

大意

黒く流れる川の岸に
この夕暮れに根株を燃やした火が昇っている
子どもたちが集まってお互いに舞い
たんぽぽの白い綿毛を吹き飛ばしている
丘の上の枕木でできた小屋には
老婆がいて娘たちに説き聞かせる
こうやって畑ができても
新しい困難がやってくるのだと

モチーフ

「北見」とあったタイトルが「宗谷」に変えられているのは、同タイトルの「宗谷」（『新校本全集』では「宗谷［二］」と表記）との「対」を意識してのものだろう。車窓風景のスケッチから発展したものと考えられるが、推敲の段階で車内にいる賢治には聞き取れるはずもない媼と娘の会話が描かれるようになっている。その媼の言葉の文意は取りにくいが、おそらくは「畑が成功したように思えても、また新しい苦難が始まるのだ」という意味だろう。北海道で農業を生業とする者が、永遠に負わされる「艱苦」について語る詩篇を意図したかと思う。

語注

宗谷　北海道北部の支庁名。賢治は大正十二年に樺太に渡った際に通過しているので、その時の車窓風景が元になっているのだろう。タイトル案には「北見」とする段階

もあったが、こちらは北海道北部の旧国名。宗谷支庁と北見国は重なる部分が多く、矛盾はない。賢治が乗ったのは宗谷本線。しかし現在の宗谷本線のルートとは違って、音威子府（おといねっぷ）からオホーツク海に面した浜頓別に向かい、海沿いに稚内まで北上していた。昭和五年になって旭川から幌延を経て稚内に向かう天塩線が宗谷本線に改称（現在に至る）されると、それまでの浜頓別ルートは北見線と名称変更された（その後、野付牛町が北見市となり、野付牛駅が北見駅になると天北線に改名。しかし平成元年に廃止）。文語詩執筆中の賢治は、その経緯も知っていただろう。タイトルは「北見」のままでも問題なかったが、おそらく未定稿に収められている「宗谷〔二〕」と「対」の関係にするために「宗谷」に改名したのであろう。

根株　木の切り株のこと。

スリッパ小屋　『定本語彙辞典』に「スリッパは鉄道の枕木の地方語（英語のsleeperから）。払い下げの古い枕木で造った掘っ建て小屋のこと」とある。スリッパ小屋の用例を見つけることができなかったが、枕木の方言である「すりっぱ」について、『日本国語大辞典』に栃木県安蘇郡、岐阜県飛騨、岩手県九戸郡（ただし「しりぱ」）が上がっていることから妥当なものなのであろう。明治期には古い枕木が売りに出されている新聞広告が確認できる。

艱苦ひらく　「艱苦」とは艱難辛苦のことだが、それが「ひらく」というのは、どういう意味なのかわかりにくい。「かくてしも畑みな成りて」というのは「このように畑がうまくいって」と解することができそうだが、その後に続く「あらたなる艱苦ひらくと」は、レトリックとしては「新しい苦難が始まるのだ」というようになるだろう。よいことはいつまでも続くわけはないとマイナスの意味を帯びると考えるべきかと思う。

評釈

黄罫（220行）詩稿用紙に書かれた下書稿㈠、その裏面に書かれた下書稿㈡（タイトルは「北見」、手入れ段階で「宗谷」。藍インクでⓉ）の二種が現存。先行作品の指摘はないが、「未定稿」には同タイトルの「宗谷」がある（『新校本全集』では「宗谷〔二〕」と表記）。

語注にも書いたように、賢治が大正十二年八月、樺太に行った際の経験に基づくものだろう。「北見」というと、北見市（当時は野付牛町）を思い浮かべそうだが、賢治は行ったことがない。旧国名である北見国のことを指し、そのタイトルを付したが、支庁名である宗谷を取ることにし

たのであろう。どちらのタイトルであっても間違いではない。

ただ、かつて「「五十篇」と「一百篇」 賢治は「一百篇」を七日で書いたか」（信時哲郎『一百篇評釈』）で指摘したように、賢治は「五十篇」と「一百篇」で同じタイトルの詩を書き、同時進行で手入れをしていた形跡があり、登場人物や舞台を変えるなどの虚構化も施したことが判明している（同じタイトルではなくても「対」にしている例も少なくない）。「宗谷」の場合は、どちらも未定稿だが、賢治はこの二詩を歌詞の一番と二番のように「対」のような作品として完成させるつもりがあり、定稿化を想定していたのだろう。タイトルが「北見」から「宗谷」に改められたのもそのためだと思われる。

賢治は「宗谷〔二〕」に㋐を付け、「宗谷〔一〕」にも㋐を付けているが、インクの色が違うことから、別の時期に付けられたようだ。同時進行的に推敲されていた可能性は高い（宗谷海峡での経験を書いた「宗谷〔二〕」に「北見」と付けることは難しいことから、「北見」ではなく「宗谷」が取られたのだろう）。

ただ、「宗谷〔一〕」と「宗谷〔二〕」を読み比べてみても、タイトルと取材地くらいにしか関連性は見出しにくい。しかし「宗谷〔一〕」には「まくろなる流れ」の句があり、「宗谷〔二〕」に「俄に朱金うち流れ」の句がある。「対」はテーマの類似性だけでなく、たとえば「悍馬」のように「おとしけおとし」（「悍馬〔一〕」）と「叩きそだたく」（「悍馬〔二〕」）という語調が「対」とされているような例もみられることから、賢治としては㋐を付けた頃から、それぞれの詩を洗練させながら「対」の表現を完成させるつもりだったのだろう。

比較のために「宗谷〔二〕」を引用しておきたい。

そらの微光にそゝがれて
いま明け渡る甲板は
網具やしろきライフヴイ
あやしく黄ばむ排気筒

はだれに暗く緑する
宗谷岬のたゞずみと
北はま蒼にうち睡る
サガレン島の東尾や

黒き葡萄の色なして
雲いとひくく垂れたるに
鉛の水のはてははや

朱金一すじかゞやきぬ

髪を正しくくしけづり
セルの袴のひだ垂れて
古き国士のおもかげに
日の出を待てる紳士あり

船はまくろき砒素鏡を
その来しかたにつくるとき
漂ふ黒き材木と
水うちくぐるかいつぶり

俄かに朱金うち流れ
朝日潰えて出で立てば
紳士すなはち身を正し
高く柏手うちにけり

時にあやしやその古金
雲に圧さるゝかたちして
次第に潰ひ平らめば
紳士怪げんのおもひあり

その虚の像のま下より
古めけるもの燃ゆるもの
湧きたゝすもの融くるもの
まことの日こそのぼりけり

舷側は燃えヴイも燃え
綱具を燃やし筒をもし
紳士の面を彩りて
波には黄金の柱しぬ

赤田秀子（「文語詩を読む その12 行きか、帰りか、七日か、九日か。未定稿「宗谷〔二〕」を読む」前掲）が書くように、口語詩の「宗谷挽歌」（「春と修羅（第一集）補遺」）と「宗谷〔二〕」は取材日が同じだと考えられそうだが、賢治が船中で「けれどももしとし子が夜過ぎて／どこからか私を呼んだなら／私はもちろん落ちて行く。」と思い、自殺者に間違われているのではないかと「宗谷挽歌」に書いていたのと「宗谷〔二〕」では、あまりにも雰囲気が異なる。そのため赤田は「宗谷〔二〕」を往路ではなく、復路で書かれたものではないかとする。ただ、旅の印象は、一般論としては復路よりも往路の方が強いように思われる。本稿では、どちらも往路でのものだと

考えておきたい。

さて「宗谷〔一〕」に戻り、下書稿から見ていきたい。手入れ前の下書稿㈠は次のようなものであった。

立ちがれしいたやのしたに
あをじろき亜麻刈るひとや
ましろなるそらを仰ぎて
ほろ蚊帳にあかごはねむる

車窓からの風景なのだろう。亜麻は世界中で栽培され茎からは繊維、種子からは亜麻仁油が薬用として採れる。「本邦に於ては本道が唯一の適地で、府県にあつては僅に青森・岩手の両県に於て之が栽培を試みたが成功しなかつた。しかし、本道と雖も一般に春季が低温に過ぎ、五―六月に至つて温度が急激に昇り、年によつては稍乾燥に失することがあるし、又、其の収穫期に当る七―八月に雨湿が多過ぎて、亜麻作上障害を与へることも稀で無い等で、之を欧州の名産地と比べると、概して気候は亜麻作に対して有利ではないが、耕種法さへよろしければ、相当良品を産し得る」（「菜種と亜麻」『高等小学　北海道農業書の解説　高二上巻』淳文書院　昭和十一年四月）とあるように、北海道特産の亜麻畑の青い花は、賢治には興味深いものだっただろう。旭川や富良野、名寄、音威子府にまたがる上川支庁は全道の亜麻生産面積の二十三％を占めていたので（「殖民公報119」北海道庁　大正十年四月）、賢治がここでメモを書き留めたというのも納得できる。

下書稿㈡では「亜麻刈るひと」の家族たちが登場し、その会話まで詩化しようとするが、列車の中にいたはずの賢治が会話の内容まで聞き取れたとは考えにくいことから虚構であろう（あるいは列車に乗っていた人の会話を参考に詩化したか）。

ましろなるそらのましたに
水いろの亜麻刈るなべに
立ち枯れのいたやの根もと
ほろ蚊帳にあかごはねむる

丘の上のスリッパ小屋に
媼ゐてむすめらに云ふ
恋はしもはじめくるしく
やがてしも苦きものぞと

にれやなぎおぐらき谷を
まくろなる流れは出でて

こらつどひかたみに舞ひて
たんぽゝの白き毛をふく

丘丘は幾重つらなり
こゝにして山きはまれば
見はるかす大野のかなた
海ぞとも更に知らなく

このあとの手入れでタイトルが「北見」から「宗谷」に変更され、初期のアイディアよりも下書稿㈡で生まれたアイディアを採用する方向でまとめられる。ただ、恋の成就ではなく、殖民について語られるように変更されている。

賢治が稚内に向けて宗谷本線（その後の北見線、天北線。現在は廃止）に乗ったのは大正十二年八月二日。旭川を十一時五十四分に発車する急行であったとされているが、旭川の日の入りの時間はkeisan（https://keisan.casio.jp/exec/system/1236677229）によれば十八時五十六分とのことで、下書稿㈡に「こゝにして山きはまれば」とあるのが、北見山地を越える天北トンネルの前後であったとすると、当時の時刻表を見ると上音威子府駅に十六時十六分、トンネルを抜けた小頓別駅に十六時三十八分に到着しているので、この頃に「ゆふべのけむり」（下書稿㈡手入れ）とあるのとも、また場所が「見はるかす大野のかなた／海ぞとも更に知らなく」とあるのとも合致する。

また『中央気象台月報 全国気象表 大正十二年八月』（中央気象台 大正十四年三月）によれば、この日の雲量は十で、日照時間は〇だったとのことなので「ましろなるそら」（下書稿㈠、㈡）とも合致する。

従って大正十二年八月二日の車中での経験を書いたものだとしてよいように思う。赤田（前掲）は、先述のとおり「宗谷〔二〕」が樺太への往路ではなく、復路の経験を書いたものではないかと指摘したが、「宗谷〔一〕」においても、いくら往路の列車の時刻や天候などが一致していても、復路であった可能性がないとは言えない。ただ、これも先述のとおり復路よりも往路の方が車窓の風景は印象に残りやすいだろうし、下書稿㈡において「こゝにして山きはまれば／見はるかす大野のかなた／海ぞとも更に知らなく」と結んであるのは、ここが峠であり、そこを越えた平野の遥か向こうに海があるのだという順番で解しやすいため、「宗谷〔一〕」においても往路での取材だと考えておきたい。

賢治は花巻農学校の修学旅行に引率教員として、北海道を訪ねたが、やはりその時にも車窓から見た風景を元にして、自分で想像したドラマを口語詩「一二三 馬 一九二四、五、二二、」（「春と修羅 第二集」）に盛り込んで

いる。

「一二三 馬」は、農作業に疲れて死んだ馬を農民たちが仲間が死んだかのように悼む光景が描かれ、「巨きな穴をこしらえて／馬の四つの脚をまげ／そこへそろそろおろしてやった／がっくり垂れた頭の上へ／ぼろぼろ土を落としてやって／みんなもぼろぼろ泣いてゐた」と結ばれている。北海道では農業を馬に頼る部分が他の地方よりも多く、そのための農民と馬との連帯感をテーマにしているのだろう。

賢治は修学旅行で北海道帝国大学に赴き、当時の総長で花巻出身の佐藤昌介の話を聞き、水産標本室、農学部温室、畜舎等を見学。大学を出て中島公園内の植民館（拓殖館）を訪れ、「〔修学旅行復命書〕」の中で次のように書いている。

中に開墾順序の模型あり。陰惨荒涼たる林野先づ開拓使庁官によりて毎五町歩宛区劃を設定せられ、当時内地敗残の移住民、各一戸宛此処に地を与へらる。然も初め呆然として為すなく、技術者来り教ふるに及んで漸く起ちて斧力を振ひ耒耜を把る。近隣互に相励まして耕稼を行ふ。圃地次第に成り陽光漸く徧く交通開け学校起り遂に楽しき田園を形成するまで誰か涙なくして之を観るを得んや。恐らくは本模型の生徒将来に及ぼす影響極めて大なるべし。

岩手の農業の問題については知っていたはずの賢治だが、北海道にはまた違った現実があったことを間近に見て感じるところがあって「一二三 馬」が書かれたのだろうし、また同じようにして「宗谷〔一〕」における媼の記述も生まれたのだろう。

高橋理一郎（『北海道案内』地方振興事績調査会 大正十三年九月）は、賢治が車窓を見たと思しき上音威子府について「大正三年二月岐阜県人二戸及富山県人一戸の農家が来住したのが初めで、其の年十一月鉄道の開通以来年々七八戸宛の移住者はあつたが、此の地は天塩、北見の国境に近く、附近一帯に山林茂り、地味は概して肥沃であるが、農耕地として開発の余地が少ないから、将来に向つても余り多くを期待することは出来ないやうである」と書く。

またトンネルを越えた小頓別については「大正元年十月秋田県人姉崎磯次氏の率ゆる五十五戸の団体移民が渡来したのを初めとし、岩手団体等が相次で移住し来り、何れも附近の開拓に努め、殊に大正三年には此処迄鉄道が開通してからは、一時繁盛なる市街となつたが、其の後鉄道の延長と又附近民有林は殆んど伐り尽くして木材業が振はなくなつ

たのとで漸次衰運に向ふに至つた」とある。

大正十二年に「媼」と書かれているのは、大正初年に移り住んだ世代になるのだろうが、大正三年七月に第一次大戦が勃発するとリネンの需要が高まって空前の亜麻ブームが起こったらしい。大正九年には中頓別に帝国製麻の亜麻工場ができ、『中頓別町史』（中頓別町　平成九年五月）には、帝国製麻の社宅で生まれたという人物による「父が大正七、八年ごろ、兵知安に移住して亜麻栽培していた。ちょうど第一次大戦で軍服の需要が増大して、亜麻の栽培農家はボロ儲けをしたと言われ、工場も大変な忙しさだったらしい」という証言が掲載されている。

しかし、第一次大戦が終わり、大正九年三月に戦後恐慌で株価が大暴落すると生産過剰・市価低落となり、大手三社が共同販売所を作ったり、帝国製麻と日本麻糸が合併するなどでしのいだという（『五十年史』帝国製麻株式会社　昭和三十四年十月）。

賢治が車窓に亜麻畑を見たのはこの頃だろうが、「媼」が「むすめら」に恋の話をするという設定（下書稿㈡初期形態）があったこと、また、「かくてしも畑みな成りて」とあることからすると、移住して間もないころと比べると娘も育ち、畑も軌道に乗っていたということを示しているようだ。賢治には亜麻の畑に戦後恐慌のイメージより、「ボロ儲け」時代のイメージを見ていたようである。

ただ、気になるのは「スリッパ小屋」である。突然この言葉が登場するのは、鉄道ファンであった賢治が、初めて乗る宗谷本線の車窓に釘付けになっていたことも理由の一つだろうが、北海道の鉄道がどのように建設されていたかについての記憶が、この言葉に込められていたようにも感じられる。

北海道の近代は鉄道と共に開けたと言っても過言ではないが、鉄道に乗る事だけでなく、建設現場にまで足を運び、ことに難所の工事にも興味を抱いた賢治であれば、鉄道建設のために多くの人命が失われたことも知っていたはずだ。

北海道の鉄道建設では「タコ部屋」あるいは「監獄部屋」と呼ばれる過酷な労働で知られており、たとえば大正十三年五月一日の「朝日新聞」（朝刊）では「慶普の生徒が北海道へ誘拐さる／れいの監獄部屋へ／危い所を函館で救はる」という見出しがあり、大正十一年九月三日の「読売新聞」（朝刊）には「実地経験上其内容を知り過ぎる程詳しく知つて居る」という筆者が「貴い血と汗」というタイトルで次のように監獄部屋について書いている。

▲何と云つても監獄部屋は元祖だけに北海道が一番盛だ。北海道で人夫を多少でも使用する土工部屋炭坑部屋

は殆ど全部監獄部屋だ。内地の監獄部屋は北海道を模倣して出来たのだ。

▲監獄部屋の人夫に依つて出来上る鉄道工事道路工事灌漑工事は是等人夫の血と汗の貴い結晶だ。私は汽車で走る毎に彼等人夫の喘ぎ喘ぎ働く有様が目の前に浮ぶ、此築堤の下には幾多の貴き是等の遺骸が埋められて居る事を熟々考へる。

宗谷本線も例外ではなかったようで、『中頓別町史』（前掲）によれば、「鉄道建設というのは大変過酷な仕事ぶりで、タコ部屋といって三人に一人は死んでいました。不潔な部屋に入れられ、働けるだけ働かされていました。線路迄引っ張り出してむりやり働かせる。医者もいないのでずいぶん死にましたよ」。「監獄部屋のようで、惨めでしたね。仕事に出て働けない者は、裸で米一俵を背負わして立たせていました。二〇〇人くらい死にましたかな。みそと塩のおかずで働けなくなると叩いて殺していました。軍隊から憲兵が調査にくると急に待遇がよくなりましてね。犯罪者やだまされて連れてこられたものが多かったようです」といった証言が紹介されている。

労働条件だけでなく、北海道のトンネル工事は技術的にも難しく、たとえば石北本線の常紋トンネルの工事の大変さは有名だが、宗谷本線の天北トンネルの工事も難関だったようで、軽くて変形しやすい蛇紋岩層であり、冬には積雪対策の必要もあって開業直前にようやく完工したという。

賢治は鉄道ファンでありながら、必ずしも駅や車両に興味があったわけではなく、今日の鉄道ファンがあまり注目しないような鉄道工事や鉄道工夫に深い関心を持っていた。ただ、「「鉄道ファン・宮沢賢治」再説」（信時哲郎「宮沢賢治研究 Annual32」宮沢賢治学会イーハトーブセンター 令和四年三月）にも書いたように、なぜか賢治は彼らの労働の過酷さについては正視しようとしない傾向があったのだが、さすがに監獄部屋について礼賛する気にはならなかっただろう。

また、監獄部屋に連れていかれた人の中には朝鮮人労働者も少なからずいたと思われるが、賢治は「五十篇」の冒頭にある「〔いたつきてゆめみなやみし〕」で、鉄道工事が終わったために解雇された朝鮮人労働者について書いていた。

そう思うと、ここに「スリッパ小屋」が登場しているのも、単に北海道で暮らす農民たちの生活を示すだけでなく、過酷な労働を強いられた鉄道工夫たちの痕跡を残しておきたかったのではないか、とも思えてくるのである。

「宗谷〔一〕」と「宗谷〔二〕」のどちらにも①が付されながら、定稿にまで発展させられていないが、赤田（「文語詩を読む その6 童話の素材を文語詩に 未定稿〔エレキに魚とるのみか〕を読む」（「ワルトラワラ17」ワルトラワラの会 平成十四年十一月）が「文語詩で病床における幻覚や幻想を扱ったものは別とすれば、以前言及したが、文語詩草稿で、ファンタジーを手法として展開しようとしたモチーフは、途中で放棄され、あるいは主題を変換させているものが目立つ」と指摘しているように、実際の経験よりも物語的な構想を膨らませ過ぎたため、文語詩としての完結ができなかったためではないかと考えることができそうだ。

あるいは「五十篇」と「一百篇」には北海道を舞台にしたと思われる文語詩が一篇ずつある他は、岩手県外を舞台にしたと判断できるものがなく、「未定稿」百二篇のうちの、少なくとも十一篇が県外を舞台にしたものになっている。本作が定稿化されずに終わったのも、そのためだったのかもしれない。

先行研究

なし